

秋田県文化財調査報告書第306集

## 潟 前 遺 跡 (第2次)

—県営田沢湖オートキャンプ場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

2000・3

秋田県教育委員会

かたまえいせき

# 潟前遺跡(第2次)

——県営田沢湖オートキャンプ場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書——

2000・3

秋田県教育委員会

## 序

秋田県内には、縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財が豊富に残されています。これら先人の貴重な文化遺産を保護すると共に、後世に伝えていくことは私達に課せられた重大な責務であります。同時に、地域社会を豊かにし、快適な生活を送るための開発も県民の切実な願いであります。当教育委員会は、埋蔵文化財の保護と地域開発の調和を図るべく銳意努力してまいりました。

このたび、県営田沢湖オートキャンプ場整備事業が計画され、事業地内に湯前遺跡のあることが判明しました。関係機関と協議して、遺跡保護のため事業計画の変更を行っていただきましたが、それでもなお遺跡の一部に影響があり、その部分については発掘調査を実施して記録保存することに致しました。

発掘調査は、平成 8 年度、10 年度を当教育委員会が、平成 9 年度を田沢湖町教育委員会が担当しました。3 年間の調査の結果、旧石器時代と縄文時代の複合遺跡であることがわかりました。平成 10 年度の調査では、縄文時代前期から中期前葉および後期前葉の集落跡を検出し、特に縄文時代後期には、大きな集落が営まれていたことがわかりました。

本報告書は、平成 10 年度の調査記録をまとめたものであります。本書が埋蔵文化財の保護に活用され、郷土の歴史や文化財を研究する資料として、多くの方々に御活用いただければ幸いに存じます。

最後に、本調査の実施並びに本書の刊行に際し御協力を賜りました田沢湖町、田沢湖町教育委員会、東日本旅客鉄道株式会社、秋田県商工労働部観光課をはじめ、関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成 12 年 3 月

秋田県教育委員会

教育長 小野寺 清

## 例　　言

1. 本報告書は、県営田沢湖オートキャンプ場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本報告書は、1998年(平成10年度)に調査された田沢湖町に所在する鴻前遺跡の調査結果を収めたものである。
3. 調査の内容については、すでにその一部が報告会資料・年報などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。
4. 本報告書の草稿執筆は、第4章第1節、第2節を松本昌樹と伊藤攻が、第1章から第3章、第4章第3節1、2および第6章を松本昌樹が、第4章第3節3、4を伊藤攻が行った。加筆は、松本昌樹が行った。
5. アスファルトの成分分析および第5章の執筆は、北海道大学教授 小笠原正明氏にお願いした。
6. 編集は松本昌樹が行った。
7. 本書に使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1『田沢湖』と秋田県商工労働部提供の500分の1の地形図である。
8. 本報告書の作成にあたり、南茅部町教育委員会文化財調査室室長 阿部千春、同学芸員 福田裕二の両氏にご教示をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

## 凡　　例

1. 遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。また、遺構には下記の略記号を使用した。

S 1……竪穴住居跡	S N……焼上遺構	S K……上坑
S K F……フラスコ状・袋状土坑	S K P……柱穴様ピット	S Q……配石・集石遺構
S R……上器埋設遺構	S U……粘土貯蔵遺構	S X……性格不明遺構

なお、遺構面図中に記したPは竪穴住居跡にともなう柱穴、RPは上器、Sは壁を示している。
2. 遺跡基本層位と遺構土層図中の上色の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準上色帖』に拠った。
3. 推図中の遺物番号は、遺構内外の出土を問わず、また土器、石器を問わず、すべて通し番号を付してあり、その番号は図版中の遺物番号と対応している。
4. 上層番号に用いた数字は、ローマ数字を遺跡基本層位に、算用数字を遺構上層に使用して区別した。
5. 推図に使用したスクリーントーンは、下記のとおりである。これ以外のスクリーントーンは各図中に凡例を示した。



燒土



炭化物の散佈



すり範囲



みがき範囲



たたき部位



くぼみ部位

# 目 次

序

例言・凡例

目次

第1章 はじめに .....	1
第1節 発掘調査に至る経過 .....	1
第2節 調査要項 .....	2
第2章 遺跡の立地と環境 .....	3
第1節 遺跡の立地 .....	3
第2節 歴史的環境 .....	4
第3章 発掘調査の概要 .....	7
第1節 遺跡の概観 .....	7
第2節 調査の方法 .....	8
第3節 調査の経過 .....	8
第4章 調査の記録 .....	11
第1節 縄文時代前期・中期の遺構と遺構内出土遺物 .....	11
1 竪穴住居跡 .....	11
2 土坑 .....	24
3 上器埋設遺構 .....	26
4 新土貯蔵遺構 .....	26
第2節 縄文時代後期の遺構と遺構内出土遺物 .....	27
1 竪穴住居跡 .....	27
2 燃土遺構 .....	45
3 土坑 .....	46
4 フラスコ状・袋状土坑 .....	72
5 土器埋設遺構 .....	72
6 配石・集石遺構 .....	74
7 性格不明遺構 .....	81
第3節 遺構外出土遺物 .....	82
1 上器 .....	82
2 土製品 .....	86
3 石器 .....	87
4 石製品 .....	91
第5章 自然科学的分析 .....	105
第6章 まとめ .....	111
報告書抄録 .....	

## 挿 図 目 次

第 1 図 遺跡位置図 .....	3
第 2 図 地形区分図 .....	4
第 3 図 周辺遺跡位置図 .....	6
第 4 図 調査区の基本断面 .....	7
第 5 図 造構配列図 .....	9・10
第 6 図 S 139・42・64堅穴住居跡とその出土遺物 .....	13
第 7 図 S 164・76・80堅穴住居跡とその出土遺物 .....	14
第 8 図 S 180・94・97・99堅穴住居跡とその出土遺物 .....	15
第 9 図 S 197堅穴住居跡とその出土遺物 .....	16
第 10 図 S 1102・136・137堅穴住居跡 .....	18
第 11 図 S 1102・136・148・158堅穴住居跡とその出土遺物 .....	19
第 12 図 S 1259堅穴住居跡 .....	21
第 13 図 S 1308・309・310堅穴住居跡とその出土遺物 .....	22
第 14 図 S 1340堅穴住居跡 .....	23
第 15 図 S K66・164・168・178・179・311・320土坑とその出土遺物 .....	25
第 16 図 S R243・318・331土器埋設構造、S U103粘土貯蔵構造とその出土遺物 .....	27
第 17 図 S I30堅穴住居跡 .....	29
第 18 図 S I30・45堅穴住居跡とその出土遺物 .....	30
第 19 図 S I46・47・51堅穴住居跡とその出土遺物 .....	31
第 20 図 S I53・55・61堅穴住居跡とその出土遺物 .....	33
第 21 図 S 177・113堅穴住居跡とその出土遺物 .....	34
第 22 図 S I122堅穴住居跡とその出土遺物 .....	35
第 23 図 S I140・143・157堅穴住居跡 .....	37
第 24 図 S I202堅穴住居跡とその出土遺物 .....	39
第 25 図 S I242・260・268堅穴住居跡とその出土遺物 .....	40
第 26 図 S I261・321堅穴住居跡 .....	41
第 27 図 S I321・334堅穴住居跡 .....	43
第 28 図 S I337・339堅穴住居跡 .....	44
第 29 図 S N101・104・126・152・153・342・343・344焼土遺構、S K10・16土坑とその出土遺物 .....	47
第 30 図 S K24・27・28・29・34・82土坑とその出土遺物 .....	49
第 31 図 S K35・36・44・49・52・62・79土坑とその出土遺物 .....	51
第 32 図 S K81・108・114・115・116・128・129・144・159土坑とその出土遺物 .....	53
第 33 図 S K170・175・176・177・191・196・197・205・224・225・227・229・245・250土坑とその出土遺物 .....	55
第 34 図 S K250・251・252・254・256土坑とその出土遺物 .....	57
第 35 図 S K257・258・269・270・336土坑とその出土遺物 .....	59
第 36 図 S K272・273・274・275土坑とその出土遺物 .....	61

第37 図 S K275上坑出土遺物	62
第38 図 S K276・278・279・280・282・283・284・285・286・287・288・290・291・292・294・295・341十坑	65
第39 図 S K282・283・284・285・286・287・288・292・294・296・297・300・303・304・305・306・313・315 七坑とその出土遺物	67
第40 図 S K296・304・305・325・326・327・330・332・333・335・338十坑とその出土遺物	69
第41 図 S K F54・165・30 フラスコ状土坑・袋状とその出土遺物	71
第42 図 S R193・194・262・281上器埋設遺構とその出土遺物	73
第43 図 S Q01・07・08・09・15・17配石遺構とその出土遺物	75
第44 図 S Q13・18・23・56・68・69・70・75・26・32・64配石遺構、S X323性格不明遺構	78
第45 図 S Q172・173配石遺構とその出土遺物	79
第46 図 S Q172・173配石遺構出土遺物	80
第47 図 遺構外山上土器(1)	92
第48 図 遺構外出土十士器(2)	93
第49 図 遺構外出土土器(3)	94
第50 図 遺構外出土土器(4)	95
第51 図 遺構外山上土器(5)	96
第52 図 遺構外出土土器(6)	97
第53 図 遺構外出土土器(7)	98
第54 図 遺構外出土土器(8)	99
第55 図 遺構外出土土器(9)・上製品	100
第56 図 遺構外出土石器(1)	101
第57 図 遺構外山上石器(2)	102
第58 図 遺構外山上石器(3)	103
第59 図 遺構外出土石器(4)・右製品	104
第60 図 アスファルト試料分析のフローチャート	105
第61 図 遺跡出土アスファルトのオイル分の高速液体クロマトグラフィーによる分析結果	107
第62 図 秋田県潟前遺跡から出土したアスファルトから得られたオイル成分の フラクションPのF1マススペクトル	107
第63 図 アスファルトの交易に関する北東北の主な河川および遺跡名	108
第64 図 秋田県伊勢堂岱遺跡から出土したアスファルトから得られたオイル成分の フラクションPのF1マススペクトル 他	108
第65 図 住居跡模式図	112

## 表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧	5
第2表 遺跡出土アスファルトの元素分析	106
第3表 遺跡山上アスファルトのR値と駒形産の試料のR値からの相対偏差	109

## 図 版 目 次

- |   |   |
|---|---|
| <p>図版 1 1. 遺跡遠景<br/>2. 調査区東部全景</p> <p>図版 2 1. 北部作業風景<br/>2. 中央部作業風景</p> <p>図版 3 1. S I 42 (東→)<br/>2. S I 64 炉(北東→)<br/>3. S I 76 (南東→)<br/>4. S I 80 (南西→)<br/>5. S I 99・94 上層断面(南→)<br/>6. S I 97 (南→)<br/>7. S I 102・339 (西→)<br/>8. S I 136・137・340 (南東→)</p> <p>図版 4 1. S I 148・158 (南東→)<br/>2. S I 308・309・310 (南→)<br/>3. S R243 (南東→)<br/>4. S U103 (南→)<br/>5. S I 30 (西→)<br/>6. S I 30 柱穴列(真上→)<br/>7. S I 45 炉(南→)<br/>8. S I 46 炉A(北西→)</p> <p>図版 5 1. S I 53 炉(東→)<br/>2. S I 55 炉(北東→)<br/>3. S I 77 炉(西→)<br/>4. S I 113 か(南→)<br/>5. S I 122 炉(南西→)<br/>6. S I 143 (南→)<br/>7. S I 157・340 (西→)<br/>8. S I 202 (西→)</p> | <p>図版 6 1. S I 242 か(南→)<br/>2. S I 260 炉(北西→)<br/>3. S I 268 炉(南西→)<br/>4. S I 261 (北西→)<br/>5. S I 321 (南東→)<br/>6. SK 10 (西→)<br/>7. SK 36 (南→)<br/>8. SK 49 (南→)</p> <p>図版 7 1. SK159 (東→)<br/>2. SK275 (南西→)<br/>3. SK291 (西→)<br/>4. SK333 (南東→)<br/>5. SKF307 (南→)<br/>6. SR193・194 (南西→)<br/>7. SR262 (西→)<br/>8. SR281 (北西→)</p> <p>図版 8 1. SQ 01 (南西→)<br/>2. SQ 09 (南→)<br/>3. SQ 13 (南西→)<br/>4. SQ 18 (南→)<br/>5. SQ 23 (南→)<br/>6. SQ 70 (南西→)<br/>7. SQ172 (西→)<br/>8. SX323 (南→)</p> <p>図版 9 遺構内出土土器</p> <p>図版 10 遺構内出土土器・アスファルト</p> <p>図版 11 遺構内出土土器、遺構外出土土器</p> <p>図版 12 遺構外出出土土器・土製品</p> |
|---|---|

# 第1章 はじめに

## 第1節 発掘調査に至る経過

田沢湖畔北東部の東日本旅客鉄道株式会社所有地内に、田沢湖町、東日本旅客鉄道株式会社、秋田県の三者連携によるハーブ園、ホテル、オートキャンプ場を中心とした滞在型リゾート地の建設が計画された。その基本計画は、平成7年度に諸調査・基本設計・実施設計を行い、平成8・9年度に建設工事を実施し、平成9年7月開業の予定であった。

平成7年10月、田沢湖町民より田沢湖町教育委員会に東日本旅客鉄道株式会社所有地内東端部分から上器が出上しているとの指摘があった。同年11月田沢湖町教育委員会は、東日本旅客鉄道株式会社に対し、社用地内に遺物包含地があるので調査が必要との連絡を入れた。同年12月22日、秋田県教育庁文化課が1回目の埋蔵文化財分布調査を実施した。その結果、町民から指摘された部分では遺構・遺物を確認することはできなかったが、オートキャンプ場建設予定地付近で縄文時代前期・後期の土器や土坑・焼土遺構を確認した。平成8年1月19日、秋田県教育庁文化課が2回目の埋蔵文化財分布調査を実施し、遺構・遺物出土地点は周知の遺跡であること、すなわち戻前遺跡であることを確認した。ホテルとオートキャンプ場の共同進入路付近1,500m<sup>2</sup>は工事によって消滅するので、そこは記録保存調査を行い、その他の部分については工事施工の際に立会調査を行う方針を決定し、当初計画に沿ったオートキャンプ場を建設することとした。

しかしその後、平成8年5月21日から31日にかけて、秋田県埋蔵文化財センターが範囲確認調査を実施した結果、遺跡はオートキャンプ場建設予定地を中心に約12,000m<sup>2</sup>の広がりをもち、縄文時代前期中頃および縄文時代後期前半の大規模な複合遺跡であることが判明した。特に、オートキャンプ場建設予定地の台地部分では縄文時代後期の配石遺構も検出した。複合遺跡のため通常の調査と比較して作業量が増えるため、平成8年度の記録保存調査は1,000m<sup>2</sup>が限度として、平成8年度はホテルとオートキャンプ場の共同進入路湖畔側を発掘調査し、共同進入路山側および台地部分については平成9年度に調査することとした。遺跡の保全に配慮し、当初は平成9年7月に「ハーブガーデン・ハートハーブ」、「長期滞在型宿泊施設・ファミリーオ」、オートキャンプ場が同時に開業の予定であったが、オートキャンプ場の開業計画については見直しが行われた。

平成8年9月9日から11月15日までにかけて、秋田県埋蔵文化財センターが共同進入路の湖畔側部分(1,030m<sup>2</sup>)の発掘調査を行った(第1次発掘調査)。

その後、平成9年6月2日から8月6日にかけて、田沢湖町教育委員会がオートキャンプ場建設予定地の台地部分の表土除去を行い、配石遺構の構成や広がりを確認した。この結果を受けてオートキャンプ場の設計変更が行われ、台地部分のテントサイト建設はとりやめ、盛土して保存活用する方針が決定された。それでもなお遺跡範囲内にあたる道路・駐車場用地・水路部分(2,800m<sup>2</sup>)については発掘調査が必要であり、平成10年5月12日から10月9日にかけて秋田県教育委員会が発掘調査を行った(第2次発掘調査)。なお、当初の事業名は「県営オートキャンプ場建設事業」であったが、平成10年度からは「県営田沢湖オートキャンプ場整備事業」と変更になっている。

## 第2節 調査要項

遺跡名	潟前遺跡
遺跡所在地	秋田県仙北郡山辺湖町山辺字潟前 69 外
調査期間	平成 10 年 5 月 12 日～10 月 9 日
調査面積	2,800 m <sup>2</sup>
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	松本昌樹（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第 3 科科学芸主事） 伊藤攻（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第 3 科非常勤職員） 泉田剛（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第 3 科非常勤職員） （平成 10 年 8 月退職） 田口康平（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第 3 科非常勤職員） （平成 11 年 3 月退職） 安原誠（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第 3 科非常勤職員） （現 岩手県宮古市教育委員会社会教育課文化系文化財調査員） 黒澤幸子（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第 3 科非常勤職員）
総務担当者	青原晃（秋田県埋蔵文化財センター総務課主任） 佐藤幸嗣（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事） （現 秋田県教育庁福利課主事） 佐々木敬隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事） 八文字隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
調査協力機関	秋田県商工労働部 東日本旅客鉄道株式会社 山辺湖町教育委員会

## 参考文献

- 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第 270 号 1997(平成 9 年)

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 遺跡の立地

田沢湖町は県東部のはば中央に位置する。町の大部分は、奥羽山脈の西側斜面と出羽山地の東側斜面にあたり、雄物川の支流玉川の上流域の大半を占める。また、南西部は横手盆地の最北部にあたる。

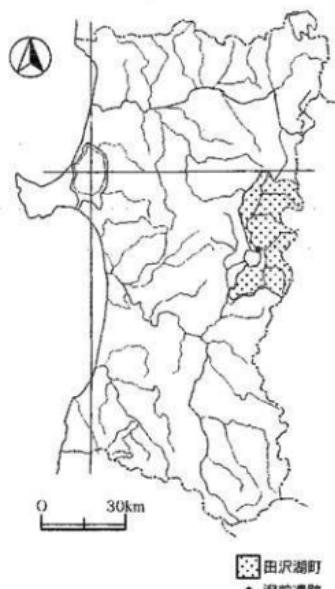
潟前遺跡はJR田沢湖駅の北西約5.7km、田沢湖の北東湖岸(北緯 $39^{\circ}44'29''$ 、東経 $140^{\circ}41'18''$ )に位置する。そこは、田沢湖の外輪山のひとつである笠森山より湖岸に伸びる標高254~264mの舌状台地先端部にあたる。(第1図)

遺跡周辺の地形は、山地・台地・低地の3つに分けられる。玉川河谷低地を境に西側は出羽山系で、非火山性山地の権森山地や田沢湖の周縁を取り巻く田沢湖山地がある。東側には火山性山地の荷葉岳火山地があり、その周縁や南側に非火山性山地のソッケ森山地、ハッ木山地、大影山・小影山山地が連なり奥羽山脈の一部を構成している。玉川河谷低地と東側の山地に挟まれた地域は生保内台地と呼ばれる。遺跡周辺の地形を大局的に見れば、玉川の流路を境に東には奥羽山脈、西には出羽山地がそれぞれ南北に連なっているといえる。なお、本遺跡は出羽山系の田沢湖山地内に位置する。(第2図)

田沢湖山地は、院内岳(751.1m)を主峰とする田沢湖周縁の外輪山であり、北東部を除き、急斜面を伴う標高500m以上の山陵が田沢湖を断続的にとりまいている。これらは田沢湖の火山活動によって形成された溶岩円頂丘であると考えられ、起伏量は院内岳付近で最も大きく400~420mであるが、他はおおむね200~300mである。しかし、田沢湖北東部には笠森山(401.3m)を最高とし、起伏量が40~140mの緩斜面からなる丘陵性の山地が分布しており、潟前遺跡もこの地域に入る。

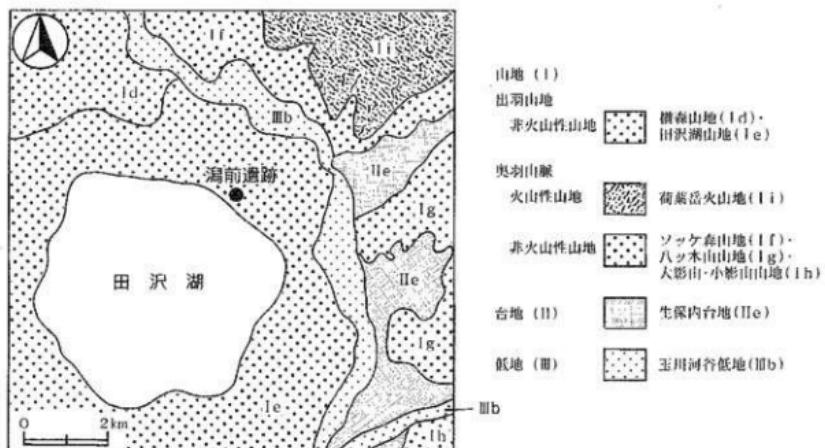
湖周辺の表層地質は、湖岸西から北西にかけては火山性岩石および深成岩から構成され断層群が発達し、田沢湖北岸には固結堆積物である松葉層、田沢湖北東部には宮田層、田沢湖から南東部地域には田沢層が広く分布し、緩やかな地形をなしている。潟前遺跡付近は田沢層(含輝石英安山岩質火山疊凝灰岩)や宮田層(石英安山岩質異質火山疊凝灰岩・凝灰岩)から構成されている。

田沢湖は湖面標高249m、水深423.4mで、日本の湖沼中最深である。その湖岸線の形は、直径約6kmの円形または直線で囲まれた多角形と見ることができる。



第1図 遺跡位置図

自然状態としては閉塞湖であるが、発電の利便等のため1940(昭和15)年玉川の強酸水が注入され、かつて十数種棲息していた魚は姿を消した。しかし、風光明媚な田沢湖を中心とする地域は田沢湖抱返り県立自然公園に指定され、秋田県有数の観光地となっている。



第2図 地形区分図

## 第2節 歴史的環境

図幅内では、秋田県遺跡地図で27カ所の遺跡が確認されているが、それらは田沢湖畔の潟地区や玉川の河岸段丘面に偏在する。(第1表、第3図)

旧石器時代の遺跡は、大曲仙北郡内では協和町米ヶ森遺跡や南外村小出I・IV遺跡で発掘調査が行われているが、玉川水系においては、平成8年度潟前遺跡(50-24)の調査が唯一のものである。

縄文時代の遺跡は19カ所確認されており、その時期は縄文時代前期から晩期にわたっている。前期の遺跡には潟前遺跡(50-24)、中期の遺跡には蟹澤口遺跡(50-13)、中期から晩期にかけての複合遺跡には上屋敷II遺跡(50-23)、潟尻遺跡(56-33)がある。なお、潟前遺跡(50-24)は、旧石器時代、縄文時代前期、中期、後期の複合遺跡であるが、主体は縄文時代後期である。晩期の遺跡には、大山遺跡(50-18)、沼田遺跡(50-21)、春山遺跡(50-25)、田子の木遺跡(50-26)、武藏野遺跡(50-36)がある。このうち田子の木遺跡では、武藏鉄城氏によって「田子の木式土器」の名称を与えられた土器が出土しているが、内容には不明な点が多い。また、武藏野遺跡(50-36)は昭和41・42年に田沢湖町と県教育委員会により発掘調査され、縄文時代晩期の大洞B C式土器や土偶が出土している。なお、縄文時代の遺跡としている中には、時期を特定できない遺跡も9カ所ある。

弥生・古墳時代の遺跡は確認されていない。古代に位置づけられるものは中山遺跡(50-12)と武藏野遺跡(50-36)の2遺跡である。武藏野遺跡では、堅穴住居跡が26軒検出されたというが、実際調査が行われたのは堅穴住居跡2軒、製鉄用の窯1基である。中世城館は8遺跡知られているが、空堀、

郭、帯郭のみであり具体的な史実で裏付けられる城館はない。

岡輪外であるが、田沢湖町内の神代地区に所在する黒倉遺跡は、昭和初年から深澤多市、田口耕之助氏らによる調査が行われている。また昭和10年には、武藤鉄城氏が黒倉堤付近の道路工事中に土器や石器が多く出土したことを教えられ、現地に赴いて遺跡であることを確認し調査を行っている。その後、黒倉B遺跡の本格的な調査が、昭和59年(1次調査)・昭和60年(2次調査)にかけて実施された。1次調査区域では、縄文時代前期から後期初頭の土器が出土したが、主体は中期初頭の大木式土器である。2次調査区域では縄文時代前期末葉から晩期の上器が出土したが、主体は中期全般にわたる大木式上器である。2年間にわたる調査の結果、縄文時代中期の堅穴住居跡7軒、石組塀6基、土坑5基、焼土造構3基、土器埋設造構2基、配石造構4基、捨て場1ヶ所が検出された。

## 註

1. 武蔵鉄城「田沢湖畔の石器」富木友治編『田沢湖』瑞木の会 1959(昭和34年)

## 参考文献

1. 秋田県『土地分類基本調査 田沢湖』5万分の1 國土調査 1991(平成3年)
2. 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図』(県南版) 1987(昭和62年)
3. 秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書』小出I・小出II・小出III・小出IV-1 『秋田県文化財調査報告書第261集』1991(平成3年)
4. 秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56年)
5. 田沢湖町教育委員会『黒倉B遺跡』第1次発掘調査報告 1985(昭和60年)
6. 田沢湖町教育委員会『黒倉B遺跡』第2次発掘調査報告 1986(昭和61年)
7. 深澤多市・田口耕之助『秋田県風土記の学』『東北文化』1巻2号 1928(昭和3年)
8. 田沢湖町教育委員会『武藏野堅穴住居跡群』第一次調査報告 1967(昭和42年)
9. 秋田県教育委員会・田沢湖町教育委員会『武藏野堅穴住居跡群』第二次調査報告 1968(昭和43年)
10. 秋田県教育委員会『湯前遺跡(第1次)』県営オートキャンプ場建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I 『秋田県文化財調査報告書第270集』1997(平成9年)

番号	遺跡名	所在地	時代	文献
50-11	高雲館・台城	田沢湖町山武字蟹沢口	中世(鐵跡)	2-4
50-12	中山	田沢湖町山武字猪乳	魏文(古代)	2
50-13	蟹沢口	田沢湖町山武字蟹沢口	魏文(中期)	2
50-14	天鏡	田沢湖町山武字人蟹沢	中世(鐵跡)	2-4
50-15	見付田館	田沢湖町山武字見付	中世(鐵跡)	2-4
50-16	中ノ沢	田沢湖町山武字中ノ沢	魏文	2
50-17	高屋館	田沢湖町山武字高屋	中世(鐵跡)	2-4
50-18	大山	田沢湖町山武字大山	魏文(晚期)	2
50-19	羽根坂館	田沢湖町山武字羽根坂	中世(鐵跡)	2-4
50-20	古館	田沢湖町山武字古田	中世(鐵跡)	2-4
50-21	沼田	田沢湖町山武字沼田	魏文(晚期)	2
50-22	上屋敷I	田沢湖町山武字先達	魏文	2
50-23	上屋敷II	田沢湖町山武字先達	魏文(中期～後期)	2
50-24	高前	田沢湖町山武字高前	旧石器・魏文(前中期～後期)	2-10
50-25	春山	田沢湖町春山字春山	魏文(晚期)	2
50-26	田子の木	田沢湖町田子木村	魏文(晚期)	2
50-27	田子の木館	田沢湖町田子木館	中世(鐵跡)	2-4
50-28	菊森館	田沢湖町菊字山	中世(鐵跡)	2-4
50-29	一の渡し	田沢湖町鷲子の渡・鷲兒童	魏文	2
50-30	ヨテコ沢	田沢湖町鷲子ヨテコ沢	魏文	2
50-31	荒沢	田沢湖町鷲子荒沢	魏文	2
50-32	下高野	田沢湖町牛井内字下高野	魏文	2
50-33	小先達	田沢湖町牛井内字小先達	魏文	2
50-35	黒沢野	田沢湖町牛井内字黒沢野	魏文	2
50-36	武藏野	田沢湖町牛井内字武藏野	魏文(晚期)・古代	2-7-8-9
50-37	御池石	西木村上木内字御池石	魏文	2
50-38	高尻	西木村西木内字高尻	魏文(中期～晚期)	2

第1表 周辺遺跡一覧



第3図 周辺遺跡位置図

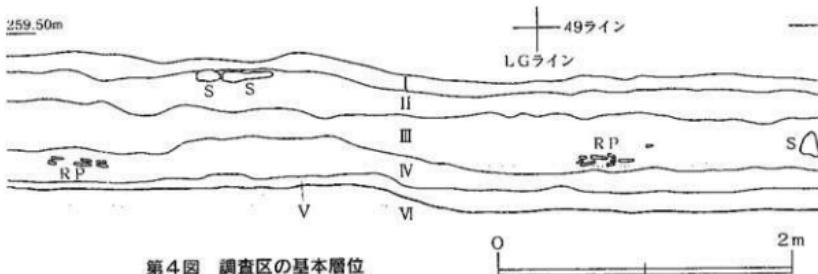
### 第3章 発掘調査の概要

#### 第1節 遺跡の概観

鶴前遺跡は、田沢湖の北東湖岸に位置し、田沢湖の外輪山である笠森山から湖岸に向かい南西方向に伸びる舌状台地先端部、標高254~264mに位置する。高緯度で標高が高いため、亜寒帯性気候区分域に入り、植林された杉林や広葉樹の二次林に囲まれている。樹木の間から田沢湖を間近に見下ろすことができる。調査対象範囲周辺も杉林であったが、現在は伐採されている。遺跡のほぼ中央を町道が南北に通っている。この町道は、湖岸の春山地区と外輪山北麓側の田沢地区を結ぶ道路で、通称田沢道と呼ばれる。湖岸には、湖を周回するかたちで県道田沢湖西木線が走っている。遺跡南端部から湖岸までの距離は約60m、湖面との比高は5mである。遺跡の平均傾斜度は8%であるが、北東側は12%とやや急な斜面となっている。(第5図、図版1)

平成8年度の範囲確認調査の結果から、遺跡の推定面積は約12,000m<sup>2</sup>であるが、同年度にホテルの進入路部分1,030m<sup>2</sup>は発掘調査が終了し、すでに道路になっている。調査範囲2,800m<sup>2</sup>も大部分が、平成9年度の田沢湖町の調査によって表土が取り除かれていた。また、町道部分は以前から削平され、砂利敷きされていた。町道西側の平坦面約5,000m<sup>2</sup>は遺跡の中心部と考えられ、この部分は保存されることになり、現在は盛り土されている。

調査区の基本層位は、調査区境界に沿って設定したトレンチから、以下のように観察できた。(第4図)



第4図 調査区の基本層位

第Ⅰ層 黒色土(10Y R2/1)：しまりの弱いシルト質土である。草木の影響を強く受けていて腐植含有量の多い黒ボク土壤である。層厚は、10~20cmである。

第Ⅱ層 黒褐色土(10Y R2/3)：しまりの弱いシルト質土である。腐植含有量の多い黒ボク土壤である。少量ではあるが、縄文時代後期の遺物を含む。ところによって指頭大から拳大の礫が混入する。層厚は、0~25cmである。調査区西部では欠落する部分がある。

第Ⅲ層 暗褐色土(10Y R3/3)：しまりのやや弱いシルト質土である。腐植含有量のやや少ない黒ボク土壤である。縄文時代後期の遺物を含む層である。ところによって指頭大の礫がわずかに混入する。層厚は、5~40cmである。

**第IV層 暗褐色土(10Y R3/4)**：しまりのやや弱いシルト質土である。縄文時代前期中葉から中期前葉の遺物包含層である。ところによって指頭大の礫が極わずか混入する。樹厚は、0~30cmである。調査区西部ではほとんどの部分で欠落する。

**第V層 にぶい黄褐色土(10Y R4/3)**：しまりのやや強いシルト質の地山漸移層である。樹厚は、0~15cmである。部分的な堆積であり、主に調査区東部で認められる。

**第VI層 明黄褐色土(10Y R6/8)**：しまりの強い粘土質の地山である。

## 第2節 調査の方法

発掘調査はグリッド法を用いた。調査区内に任意の点を1ヵ所を選定し、この基準杭から磁北に合わせた南北基線とこれに直交する東西基線を設け、網掛けすることにより4×4mのグリッドを設定した。また、南北線には2桁の算用数字、東西線にはアルファベット2文字の線名を付し、各グリッドは南東隅の交点の算用数字とアルファベットを組み合わせて呼称した。

遺構等の実測は、各グリッド杭を利用して行い、縮尺は原則として20分の1とした。

## 第3節 調査の経過

5月12日 作業員説明会を行った。資材の整理、環境整備をした。

5月13日 表土除去を開始した。前年調査の行われた区域の配石遺構から実測を開始した。

6月19日 S X30 性格不明遺構は、地床炉を中心にして、周囲に柱穴が巡る竪穴住居跡であることわからり、S I 30 竪穴住居跡と名称を変更した。

6月29日 調査区南端の仮設水路があふれたため、応急措置をしたあと原因者側に連絡した。

7月2日 縄文時代後期の遺構は調査区全体に広がり、その密度も高く、予定通りの調査日数では終えられないことが明らかになった。

7月8日 所長に調査期間の延長を依頼した。

7月16日 調査期間の延長の内諾を得、10年度の発掘・整理予算を見直し、補正予算を作成した。

7月31日 飛び地になっている調査区に遺構はなく、調査を終えた。

8月4日 皇太子殿下御来跡の榮を賜り、県教育厅富権泰時参事がご説明した。

8月24日 S R193・194 土器埋設遺構を検出した。

9月1日 S Q06 配石遺構は、S I 202 竪穴住居跡の壁であることがわかった。

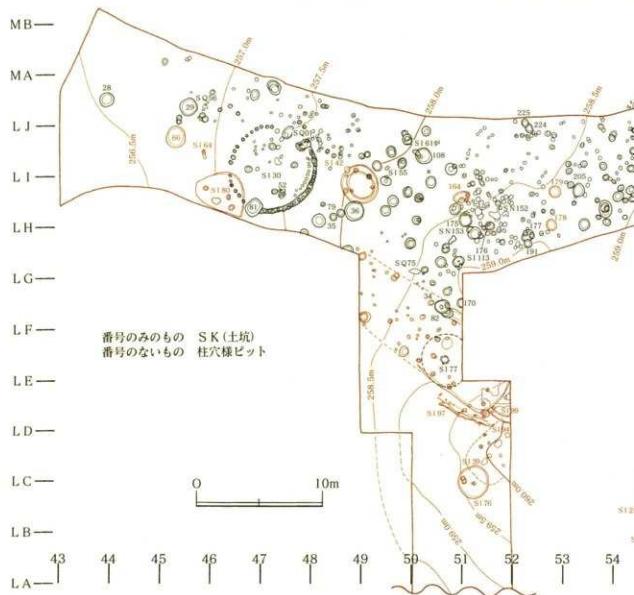
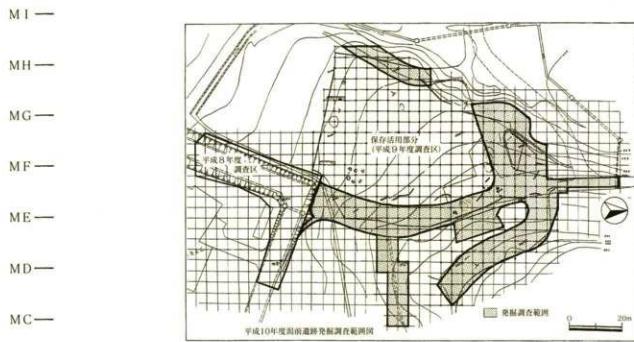
9月8日 S N136・137 燃土遺構は、大型住居跡の地床炉であることがわかった。

9月24日 調査区南部の調査を終了し、原因者側に明け渡しをした。

10月1日 S R262 上器埋設遺構は、壁溝のあるS I 324 竪穴住居跡の壁近くの床に埋設されたアスファルト貯蔵上器であることを確認した。

10月7日 終了写真撮影を行った。

10月8日 遺物・器材を埋蔵文化財センターに搬送するとともに電線・電話取り外し・リース機材の返却を行い、調査を終了した。



第5図 遺構配置図

## 第4章 調査の記録

本調査で検出された遺構は、竪穴住居跡42軒、土坑91基、フ拉斯コ状・袋状土坑3基、配石・集石遺構18基、焼土遺構8基、上器埋設遺構7基、その他の遺構2基、柱穴様ピット490基であり、すべて縄文時代の遺構である。このうち縄文時代前期・中期の遺構と判断した遺構は、竪穴住居跡18基、土坑7基、上器埋設遺構3基、その他の遺構1基であり、それ以外の遺構はすべて縄文時代後期前葉のものと判断した。なお、炉だけあるいは柱穴だけの検出であっても、竪穴住居に伴うと思われるものは竪穴住居跡として扱った。また、柱穴様ピットは、建物跡に伴うと判断できなかったものについて記述を省略した。

縄文時代前期・中期の遺構は調査区の南東側を中心に広がるが、その広がりは調査区全体の4分の1にすぎない。逆に、縄文時代後期の遺構は調査区全体に広がり、その密度も高い。遺物は、第II～III層および同面を構築面とする遺構覆土中から縄文時代後期の土器・土製品・石器・石製品が、第IV～V層および同面を構築面とする遺構覆土中から縄文時代前期・中期の土器・石器が出上した。しかし、上位の遺構の構築時や近代の道路造成・植林などによって搅乱されていて、縄文時代前期から後期までの遺物が混在していることが多く、層位的に時間差をとらえることができなかった。さらに、調査区南東側は、斜面であるうえ、縄文時代前期・後期ともに遺構の密度が高く、遺構の新旧や遺物の前後関係を把握することができなかった。

### 第1節 縄文時代前期・中期の遺構と遺構内出土遺物

#### 1 竪穴住居跡

##### S I 39 竪穴住居跡(第6図)

L C51、LD51グリッドに位置する。トレンチ内の地山上で地床炉を検出して確認した。S I 76竪穴住居跡と重複するが、本住居跡が新しい。未調査区域との境界に設定した断面には、本住居跡と重複している竪穴住居跡の壁を検出したが、本住居跡が古い。平面形は楕円形と推定した。覆土は3層に分けられた。第6～8層がそれである。自然堆積と思われる。壁は、断面からしか検出できなかつたが、外傾しながら立ち上がり。その高さは0.35mを測る。床面は、やや凸凹はあるがほぼ平坦である。地床炉が3ヵ所で検出された。柱穴は、床面に5ヵ所検出したが、主柱穴は特定できなかつた。遺物は、床面近くから縄文上器片(1～3)が出土した。構築時期は、出土した上器片から縄文時代中期初頭と思われる。

##### S I 42 竪穴住居跡(第6図、図版3)

L H48・49、L I 48・49グリッドに位置する。地山上で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸3.0m、短軸2.8mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは0.35mである。覆土は、5層に分けられた。自然堆積と思われる。壁は、外傾しながら立ち上がり、最も高いところで0.15mを測る。床面は、ほぼ平坦である。外側に幅0.2m～0.5mのテラス状の一段高い面をもつ。床面中央に薄い円形の炭痕を検出した。床面とテラス状の面から7基の柱穴を検出した。遺物は、覆土中から

縄文土器片(4~6)や石鏟2点(7・8)、石鐵1点(9)、石匙1点(10)が出土した。構築時期は、出土した十器片から縄文時代前期中葉と思われる。

#### S I 64 壊穴住居跡(第6・7図、図版3・9)

L I 45 グリッドに位置する。焼土とその中で横倒しになった土器を検出して炉と判断した。S I 80 壊穴住居跡と重複していると思われるが、新旧関係は不明である。壁も床も検出することができなかった。炉の内部から縄文土器(13)が出土した。口縁部を南西に向けて横倒しになり、上部は失われていた。また、胴部から底部にかけては、二次焼成を受け赤変していた。焼土は土器の東側に広がっていた。構築時期は、出土土器から縄文時代中期初頭と思われる。この土器は、横倒しに埋設された可能性がある。また、住居でなく炉としてだけ使用した可能性もある。

#### S I 78 壊穴住居跡(第7図、図版3・9)

L B51、LC51 グリッドに位置する。地山上で褐色土の落ち込みとして確認した。S I 39 壊穴住居跡と重複する。本住居跡が古い。平面形は直径2.45mの円形であり、底面直径2.24m、確認面からの深さは0.26mを測る。覆土は3層に分けられた。すべて地山に近い覆土で、自然堆積と思われる。壁は、外傾気味に立ち上がる。床面は平坦である。床面ほぼ中央に薄い炭層を確認して、炉と推定した。柱穴は、床面の両側に2基検出した。遺物は、底面近くの覆土上より縄文土器(11・12)、石匙2点(14・15)が出土した。柱穴が重複することから1回の改築があった可能性がある。構築時期は、出土した土器から縄文時代前期中葉と思われる。

#### S I 80 壊穴住居跡(第7・8図、図版3)

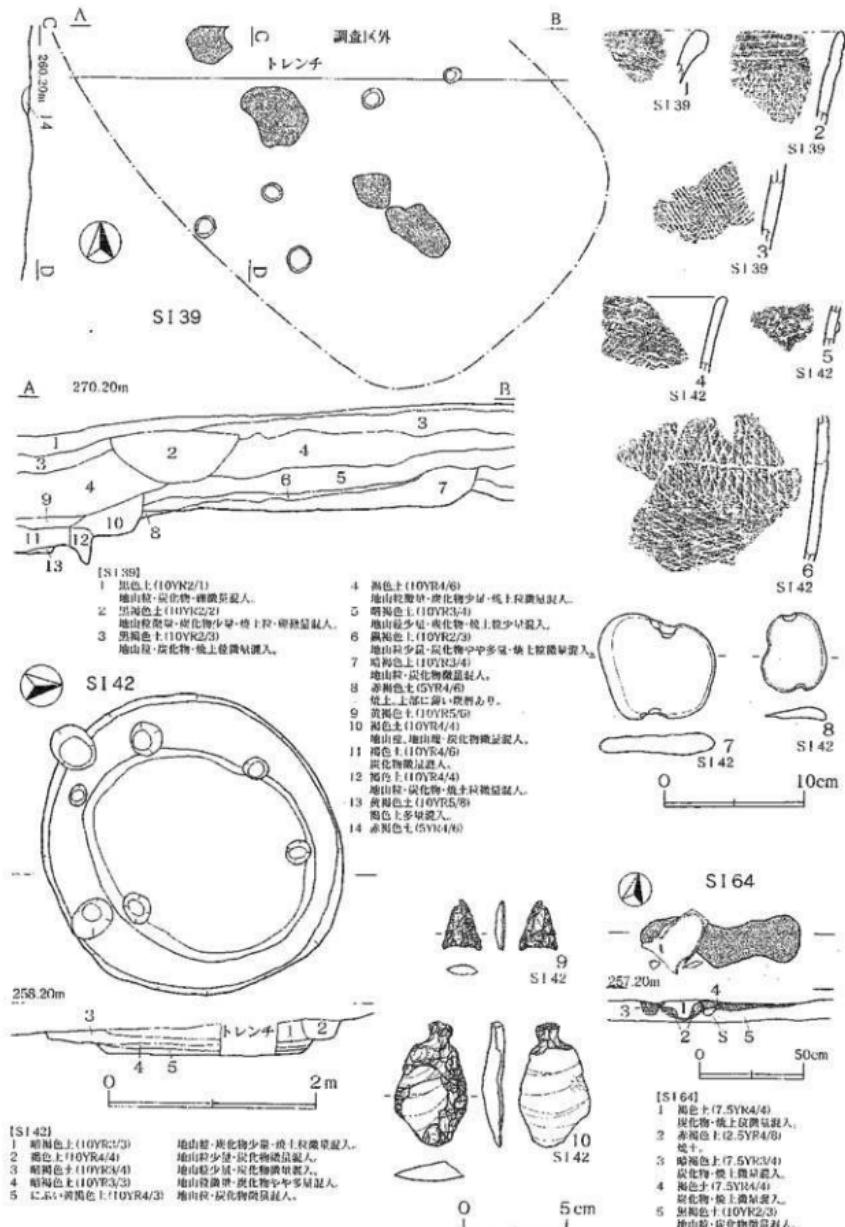
L H45・46 グリッドに位置する。地山上で暗褐色土の落ち込みとして確認した。S I 30 壊穴住居跡と重複するが、本住居跡が古い。平面形は、直径4.5mの円形と推定され、確認面からの深さは0.21mを測る。東側は調査区外に広がるが、およそ半分は調査したものと思われる。覆土は3層に分けられた。そのうち2層は柱穴の覆土である。壁は、少し開きながら立ち上がると思われる。床面は、平坦である。中央付近に焼土の堆積を検出し、炉と判断した。床面に4基の柱穴を確認した。主柱穴はP1・4と思われる。P2では、底面近くに炭層を検出した。遺物は、覆土中より縄文土器片(16~24)、右匙1点(28)、石鏟3点(25~27)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代前期中葉と思われる。

#### S I 94 壊穴住居跡(第8図、図版3)

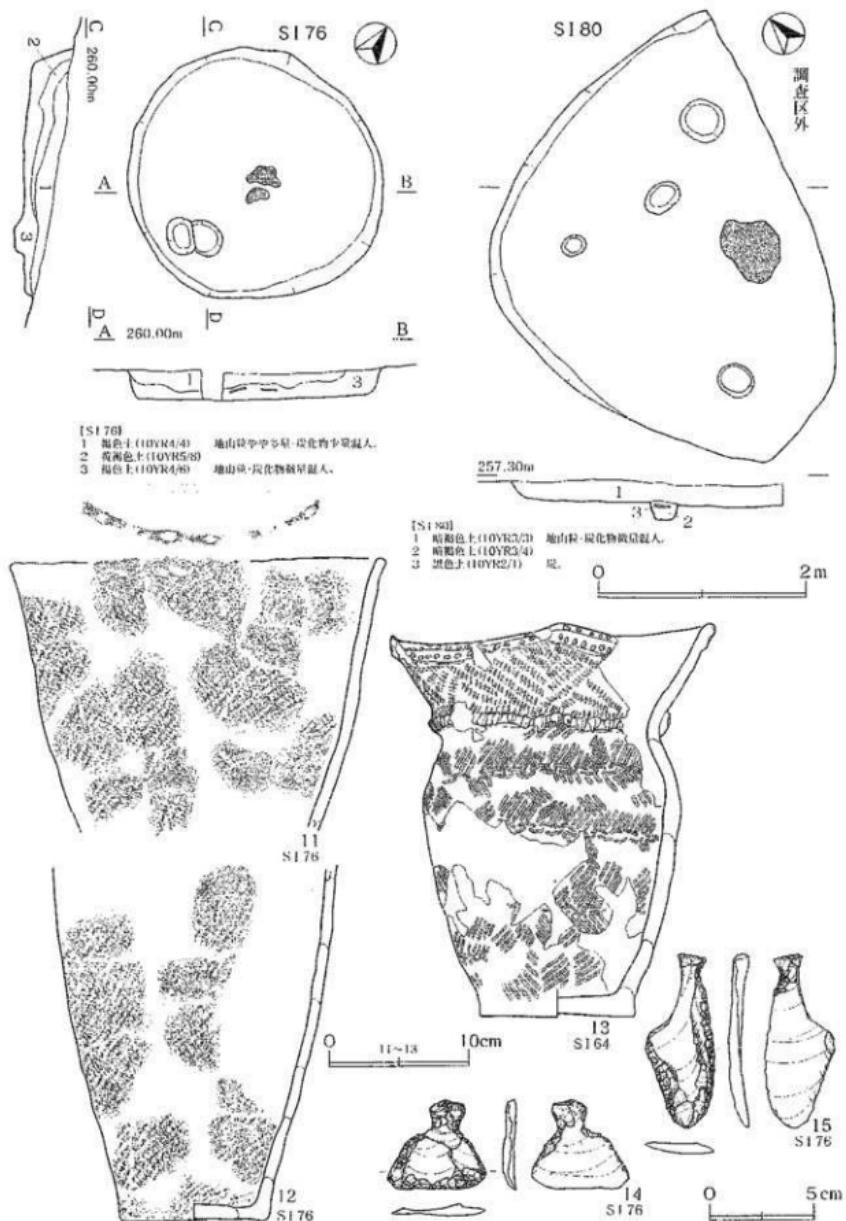
L D51 グリッドに位置する。調査区外との境界にあたる断面と黄褐色土の落ち込みで確認した。S I 97・99 壊穴住居跡と重複する。本住居跡が最も古い。覆土は1層(第9層)で、ほぼ地山と同じである。遺物は、覆土中より縄文土器片数点が出土したが、磨滅が著しく掲載しなかった。構築時期は、確認状況から縄文時代前期中葉と思われる。

#### S I 97 壊穴住居跡(第8・9図、図版3・9)

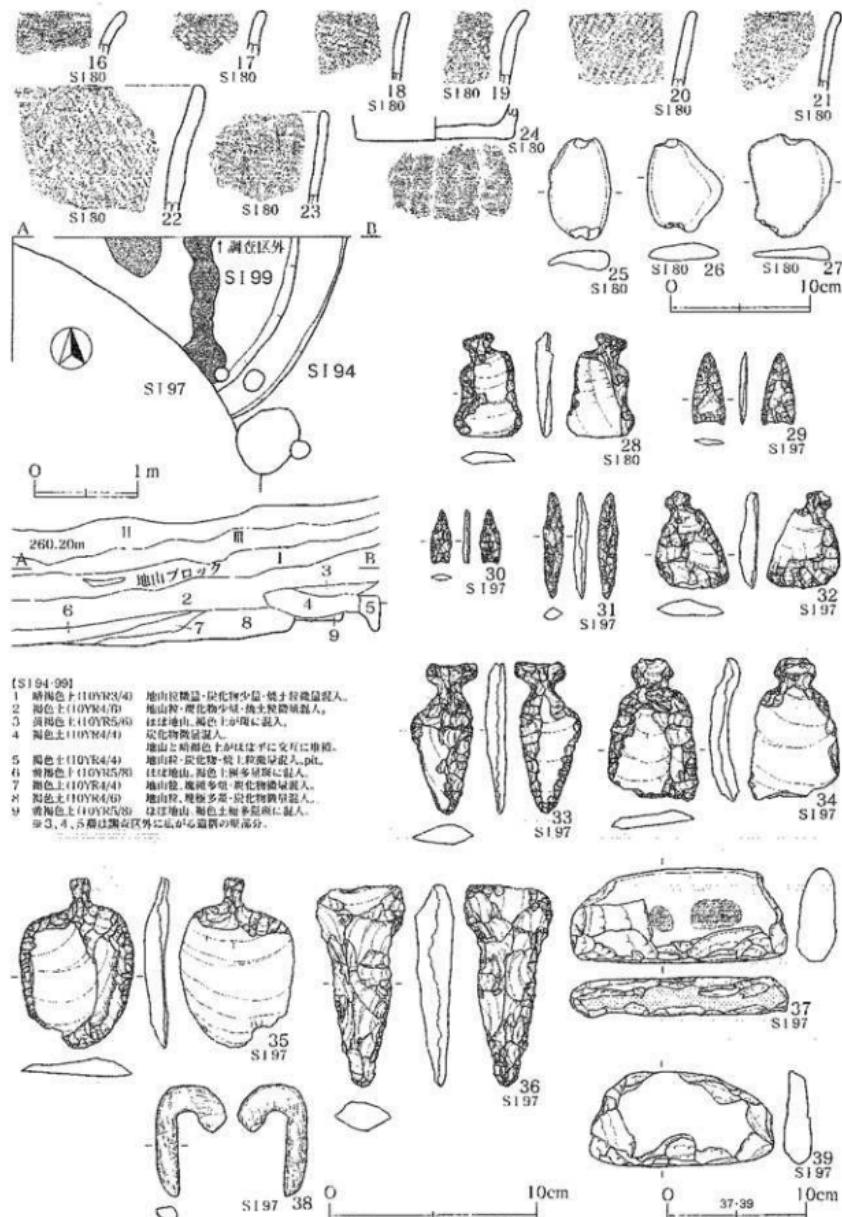
L E49・50、LF49・50、LG49・50、LD51 グリッドに位置する。IV層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。S I 94・99 壊穴住居跡と重複する。本住居跡が最も新しい。南側で調査区外に伸び、平面形は、推定長軸17m、短軸4.8mの楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.40mを測る。遺構内の覆土は2層に分けられた。壁は、少し開き気味に立ち上がる。傾斜地に床面を作ったため、北側では地山を削り南側では地山を盛って平坦にし、床にしている。北側の壁に沿って薄い炭層が広がるほか、地床が2ヶ所で検出された。床面で50基ほどの柱穴を検出しているが、主柱



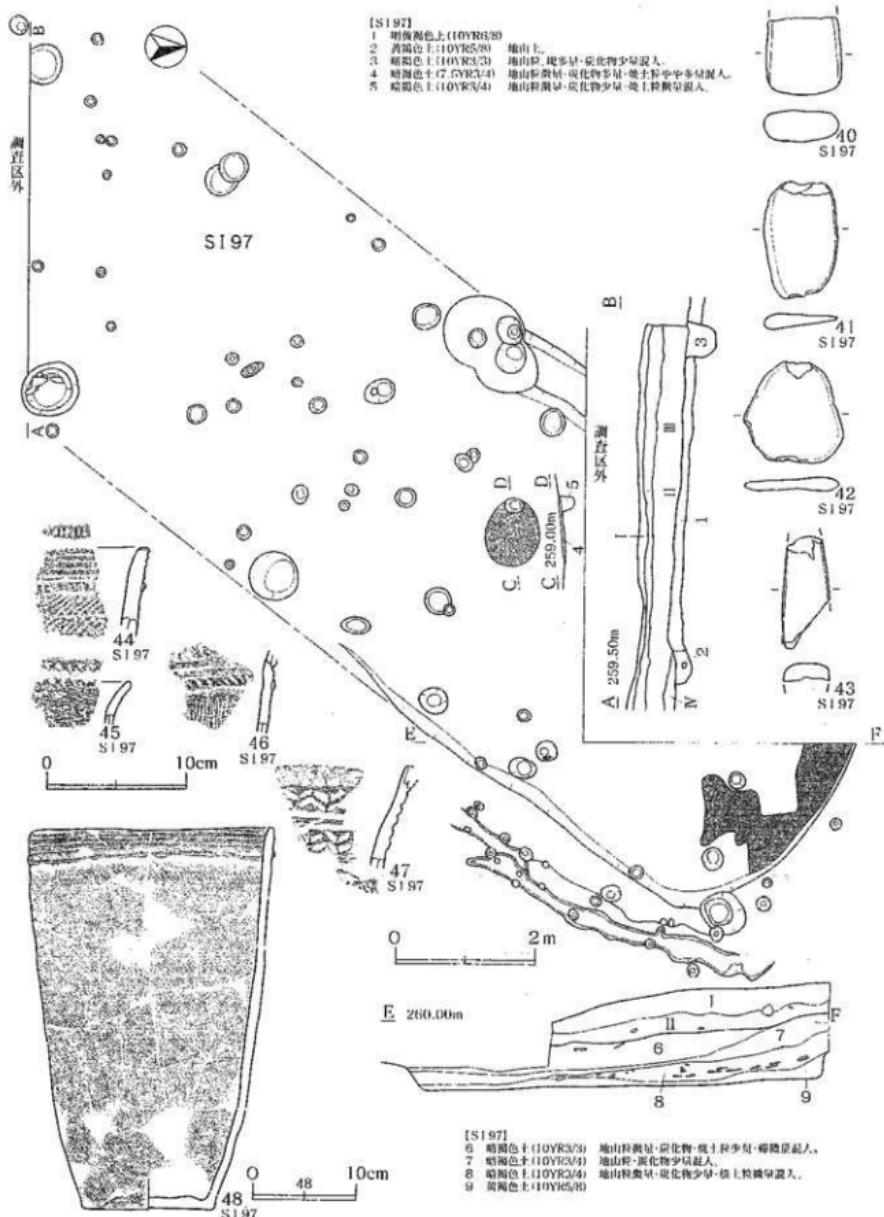
第6図 SI 39・42・64 積穴住居跡とその出土遺物



第7図 S164・76・80 積穴住居跡とその出土遺物



第8図 SI 80-94-97-99 竪穴住居跡とその出土遺物



第9図 S197 穴住居跡とその出土遺物

穴は壁面に沿って並ぶ柱穴であると思われる。南東側で壁面の外側に沿って0.4mほどの幅で続する小さな溝と穴が検出された。壁の構造材の痕と思われる。遺物は、覆土中より縄文土器(44~48)、石匙4点(32~35)、削器1点(36)、石錘2点(41・42)、石鎌3点(29~31)、玦状耳飾り1点(38)、磨製石斧(40・43)、半円状扁平打製石器2点(37・39)が出土した。一部柱穴に重複があることから、1回の改築の可能性を考えられる。構築時期は、出土した土器より、縄文時代前期末葉から中期前葉と思われる。

#### S I 99 積穴住居跡(第8図、図版3)

L D51 グリッドに位置する。調査区外との境界にあたる断面で掘り込みを確認するとともに褐色土の落ち込みとして検出した。S I 94・97 積穴住居跡と重複する。S I 94 積穴住居跡より新しく、S I 97 積穴住居跡より古い。規模は、S I 97 積穴住居跡に切られていて不明である。覆土は、3層(第6~8層)に分けられた。地山の混入割合が高い。壁は、外傾気味に立ち上がると思われる。床面は、平坦であると思われる。床面が赤変した部分を検出し地床炉と判断した。東側に薄い炭層が帯状に伸びている。遺物は、覆土中から縄文土器片5点が出土したが、磨滅が著しいため掲載しなかった。構築時期は、確認状況と出土した土器から縄文時代前期中葉と思われる。

#### S I 102 積穴住居跡(第10・11図、図版3)

L C56、L D56 グリッドに位置する。IV層中で、にぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。S I 53・334・339 積穴住居跡と重複するが、いずれの遺構より古い。S I 136・137 積穴住居跡とも重複するが、その新旧は不明である。平面形は、長軸約7.7m、短軸約4.1mの楕円形と推定される。覆土は、2層に分けられた。1層はS I 339 積穴住居跡の覆土である。自然堆積と思われる。壁は、外傾気味に立ち上がる。床面は、ほぼ平坦である。地山が赤変し固結した部分を3ヶ所検出した。いずれも地床炉である。地床炉の北西側に薄い炭層が帯状に伸びている。壁に沿って8基の柱穴を検出した。遺物は、床面付近から縄文土器片(50)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代前期後葉と思われる。

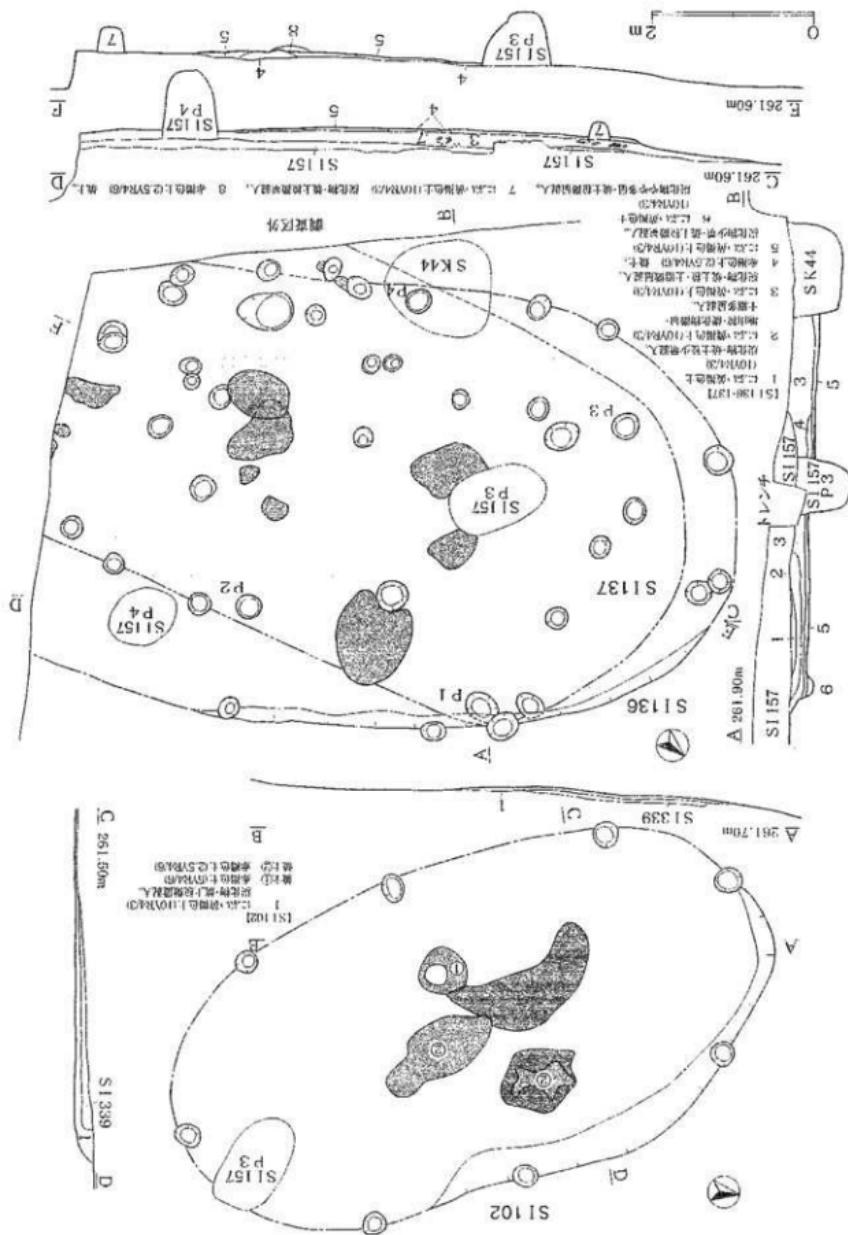
#### S I 136 積穴住居跡(第10・11図、図版3・9)

L B54・55・56、L C54・55・56 グリッドに位置する。IV層中で焼上遺構として検出し、北東側で壁の立ち上がりを確認後、積穴住居跡とした。S K44 土坑、S I 102・137・157・259・340 積穴住居跡と重複する。S K44 土坑、S I 157 積穴住居跡より古く、S I 137・259・340 積穴住居跡より新しい。S I 102 積穴住居跡との関係は不明である。平面形は、長軸10m以上、短軸約5.5mの楕円形と推定される。確認面からの深さは、0.20mである。覆土は、3層に分けられた。自然堆積と思われる。壁は、北東側のみ検出できた。床面は、ほぼ平坦である。炉を3ヶ所検出した。いずれも地床炉である。40基あまりの柱穴を検出したが、本住居跡に伴うか、S I 137 積穴住居跡に伴うかは不明である。覆土の中に集中して土器が出土したところがあり、その出土量はコンテナ5箱を越えた。本遺構の廃棄に伴って捨てられたものと考えられる。S I 137 積穴住居跡を少しずらした位置に改築したものが本住居跡であるが、柱穴が2基ずつ並ぶところがあり、さらにもう1回の改築が考えられる。構築時期は、出土した土器(49、51~57)より、縄文時代前期末葉から中期前葉と思われる。

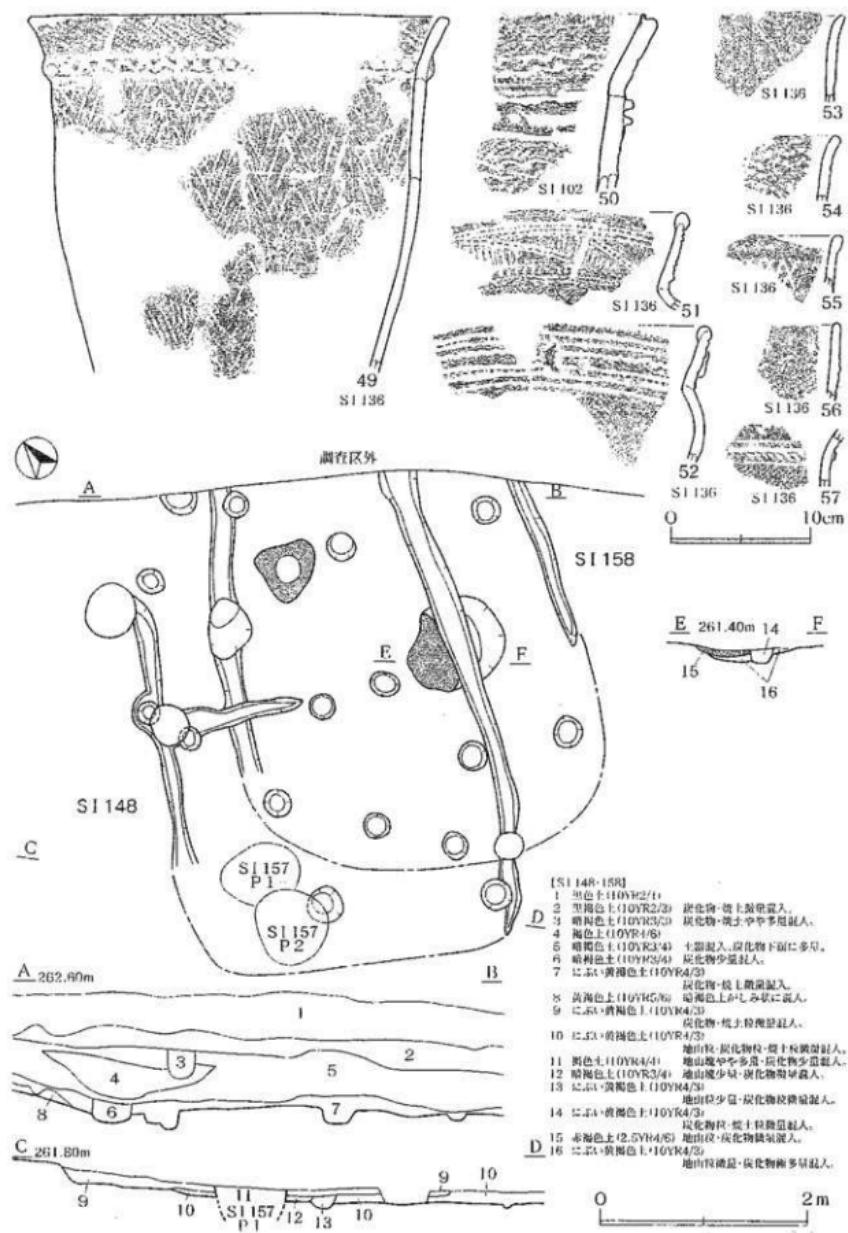
#### S I 137 積穴住居跡(第10図、図版3)

L B54・55・56、L C54・55・56 グリッドに位置する。S I 136 積穴住居跡の地床がの断面作成時、その下に別の焼上遺構を検出した。すなわち焼土遺構として確認した。S K44 土坑、S I 102・136・157・259・340 積穴住居跡と重複する。S K44 土坑、S I 136・157 積穴住居跡より古く、S I 259・

第10圖 SI 102-136-137 豐元佳居飾



第4章 聰明的配色



第11図 SI 102-136-148-158 竪穴住居跡とその出土遺物

340 穫穴住居跡より新しい。S I 102 穫穴住居跡との関係は不明である。平面形は、長軸 10m 以上、短軸約 5m の楕円形と推定される。覆土は、1 層である。自然堆積と思われるが、一部はしまりが強く、S I 136 穫穴住居跡の床面を構成していたと考えられる。床面は、ほぼ平坦である。褐色土の赤変を 7 カ所で確認したが、3 カ所に入別することができた。すなわち 3 屢以上の中床が連なっていたと考えられる。40 基あまりの柱穴を検出したが、本住居跡に伴うか、S I 136 穫穴住居跡に伴うかは不明である。主柱穴と考えられるのは、P1~4 である。本住居跡の遺物として確認できたものはない。柱穴や焼上が並列するところがあることから 1 回の改築が考えられる。構築時期は、確認状況より、縄文時代前期末葉から中期前葉と思われる。

#### S I 148 穫穴住居跡(第 11 図、図版 4)

L A56・57、L B56・57 グリッドに位置する。IV 層中で、焼土と壁溝を検出し、竪穴住居跡と判断した。S I 140・143・157・158 穫穴住居跡と重複する。S I 140・143・157 穫穴住居跡より古く、S I 158 穫穴住居跡より新しい。北東側で調査区外に伸びるため全容は不明であるが、平面形は、長軸 5m 以上、短軸約 3m の隅丸長方形で、深さ 0.15m と推定される。覆土は 1 層で、自然堆積と思われる。壁は、断面でしか確認できなかったが、やや外傾しながら立ち上がる。床面はほぼ平坦である。かは、地床かであるが、上面の柱穴に中央部を壊されている。柱穴は、同一面から 16 基を検出したが、本住居跡に伴うか S I 158 穫穴住居跡に伴うかは判別できなかった。壁溝は、長辺にあたる大部分から検出されたが、全体に巡っていたかどうかは不明である。本住居跡のものと確認できた遺物はない。S I 158 穫穴住居跡を改築したものが本住居跡であることから、構築時期は縄文時代前期末葉から中期前葉と思われる。

#### S I 158 穫穴住居跡(第 11 図、図版 4)

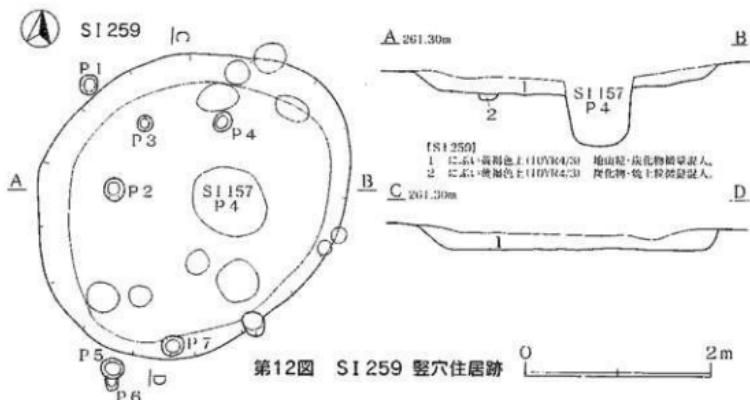
L A56・57、L B56・57 グリッドに位置する。IV 層中で、焼土と壁溝を検出し、竪穴住居跡と判断した。S I 140・143・148・157 穫穴住居跡と重複する。これらすべての住居跡より古い。規模の全容は不明であるが、長軸 4m 以上、短軸約 3m の隅丸長方形と推定される。覆土は 1 層で、自然堆積と思われる。壁は、断面でしか確認できなかったが、極めて緩やかに立ち上がる。床面はほぼ平坦であると思われる。かは、浅い掘り込みのある地床かである。S I 148 穫穴住居跡の壁溝に中央部を壊されている。柱穴は、同一面から 16 基を検出したが、本住居跡に伴うものか S I 148 穫穴住居跡に伴うものかは判別できなかった。壁溝は、長辺にあたる部分から検出されたが、全体に巡っていたかどうかは不明である。本住居跡のものと確認できた遺物はない。本住居跡を改築したものが、S I 148 穫穴住居跡である。構築時期は、確認面の層位より、縄文時代前期末葉から中期前葉と思われる。

#### S I 129 穫穴住居跡(第 12 図)

L B55 グリッドに位置する。IV 層中で褐色土の落ち込みとして確認した。S I 136・137・143・157・340 穫穴住居跡と重複する。これらすべての住居跡より古い。平面形は、長軸 3.7m、短軸 3.0m の円に近い楕円形である。確認面からの深さは、0.18m を測る。覆土は 1 層で、自然堆積と思われる。壁は、緩やかに立ち上がる。床面は、ほぼ平坦である。かは、確認できなかったが、S I 157 穫穴住居跡の柱穴(P4)の壁面に薄い炭の層を確認し、かの痕跡と判断した。柱穴は、同一面から 8 基検出した。主柱穴は P2・4 と思われる。本住居跡のものと確認できた遺物はない。構築時期は、確認面の層位より縄文時代前期と思われる。

#### S I 308 穫穴住居跡(第 13 図、図版 4)

L G57・58、L JI57・58 グリッドに位置する。地山上で平坦な面と焼土、壁溝を検出し、竪穴住



第12図 SI 259 壓穴住居跡

居跡と判断した。SI 309・310 壓穴住居跡、SQ 172・173 配石造構、SR 193・194 上器埋設造構と重複する。SI 310 壓穴住居跡より新しく、その他の造構より古い。全容は不明であり、壁は北側の一部に痕跡を見るだけである。床面は平坦であるが、北西側半分は緩やかな斜面になっている。本来はIV層かV層に床面があったと思われる。中央部に焼土の堆積があり、炉と判断した。柱穴を、同一面で9基検出したが、平坦な部分では1基のみで、すべてが本住居跡に伴うかどうかは不明である。北側と東側にかけて溝が検出された。遺物は、溝から縄文土器片15点、削器1点(60)、石鏟1点(61)、石錐1点(59)が出土した。出土土器片は、縄文時代前期のものと後期のもの(58)が混じっていたが、磨滅が著しい。構築時期は、確認面の層位より、縄文時代前期から中期前葉と思われる。

## SI 309 壓穴住居跡(第13図、図版4)

LH 56・57 グリッドに位置する。地山上の平坦面で焼土と壁溝を検出して確認した。SI 308・310 壓穴住居跡、SQ 172・173 配石造構、SR 193・194 土器埋設造構と重複する。SI 308・310 壓穴住居跡より新しく、その他の造構より古い。床面は平坦であるが、西側は緩やかに傾斜している。床面の中央と思われるところに焼土の堆積があり、炉と判断した。平坦面で13基の柱穴を検出したが、主柱穴は不明である。溝は東側で検出されたが、他は道路によって滅失したと思われる。縄文土器片9点が出土したが、磨滅が著しいため掲載しなかった。構築時期は、確認面の層位より、縄文時代前期から中期前葉と思われるが、住居形態から後期の可能性もある。

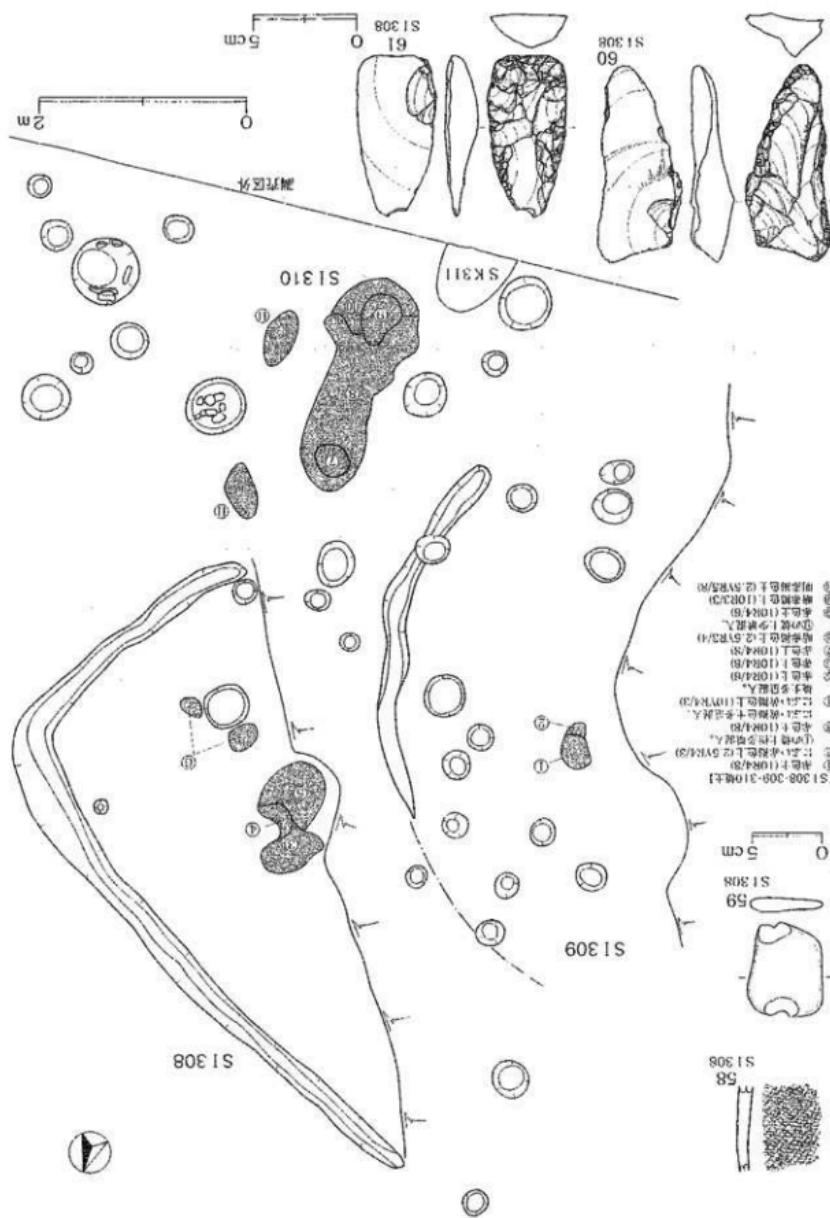
## SI 310 壓穴住居跡(第13図、図版4)

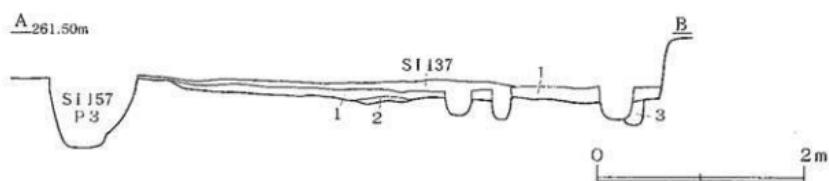
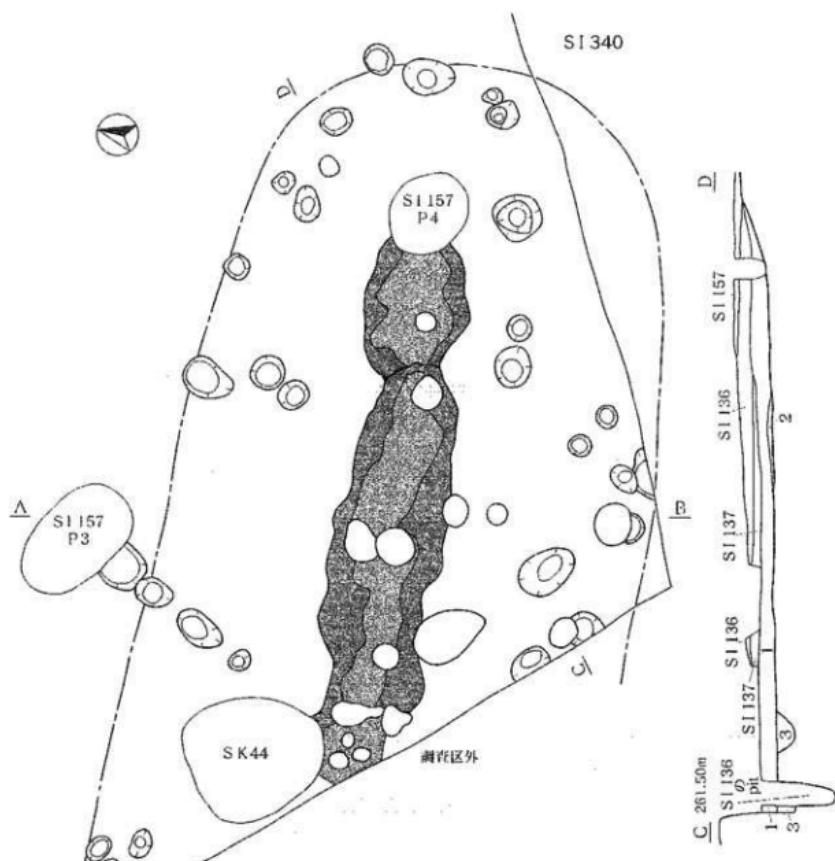
LG 56、LH 56 グリッドに位置する。地山上で焼土の広がりと、平坦な面を検出して確認した。SI 308・309 壓穴住居跡、SQ 172・173 配石造構、SR 193・194 上器埋設造構と重複する。本住居跡が最も古い。規模等の全容は不明であるが、床面は平坦である。地床炉と考えられる焼土は、南北に厚い部分がある。平坦面で11基の柱穴を検出したが、本住居跡に伴うかどうかは不明である。本住居跡のものと確認できた遺物はない。構築時期は、確認面の層位より、縄文時代前期から中期前葉と思われる。

## SI 340 壓穴住居跡(第14図、図版3)

LB 54・55、LC 54・55 グリッドに位置する。IV層中で、焼土とそれを梢円状に囲む柱穴を検出

第13圖 SI 308-309-310 聖火生器等之出土遺物





第14図 SI 340 壁穴住居跡

し、竪穴住居跡と判断した。S K44 上坑、S I 136・137・157・259 竪穴住居跡と重複する。S K44 土坑、S I 136・137・157 竪穴住居跡より古く、S I 259 竪穴住居跡より新しい。平面形は、長軸 9.0m 以上、短軸 4.5m の楕円形と思われる。床面は、南西側がやや低いが、ほぼ平坦である。床面に焼土の堆積と炭の広がりを検出し、地床かと判断した。床面に 30 基の柱穴を検出したが、すべてが本住居跡に作られたかどうか不明であり、柱穴も不明である。壁際の柱穴が二重ないし一重になることから、1 回ないし 2 回の改築が考えられる。山上遺物で、本住居跡に伴うと確認できたものはない。構築時期は、確認面の層位より、縄文時代前期末葉から中期前葉と思われる。

## 2 上坑

### SK66 土坑(第 15 図)

L I 45 グリッドに位置する。地山上で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸 1.72m × 短軸 1.43m のほぼ円形で、確認面からの深さは 0.09m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層である。底面は、ほぼ平坦である。底面中央付近に人頭大の扁平な礫があった。遺物は、覆土中より縄文土器片 6 点のほか、石皿 1 点(62)、石匙 3 点(63～65)、削器 1 点(66)が出土した。土器片は、磨滅が著しいため掲載しなかった。構築時期は、確認面の層位と山上遺物より、縄文時代前期中葉から中期前葉と思われる。

### SK164 土坑(第 15 図)

L H 50・51 グリッドに位置する。地山上で暗褐色土の落ち込みとして確認した。3 基の柱穴と重複している。いずれの柱穴よりも古い。平面形は、長軸 1.28m × 短軸 0.8m の楕円形で、確認面からの深さは 0.12m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は、3 層に分けられた。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片 8 点と石鍤 1 点(67)が出土した。土器片は、磨滅が著しいため掲載しなかった。構築時期は、確認面の層位より、縄文時代前期中葉から中期前葉と思われる。

### SK168 土坑(第 15 図)

L B 55・56 グリッドに位置する。IV 層中で黒褐色土の落ち込みとして確認した。柱穴と重複している。本土坑が古い。平面形は、長軸 0.82m × 短軸 0.52m の楕円形で、確認面からの深さは 0.23m を測る。壁は、わずかに外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位より、縄文時代前期中葉から中期前葉と思われる。

### SK178 土坑(第 15 図)

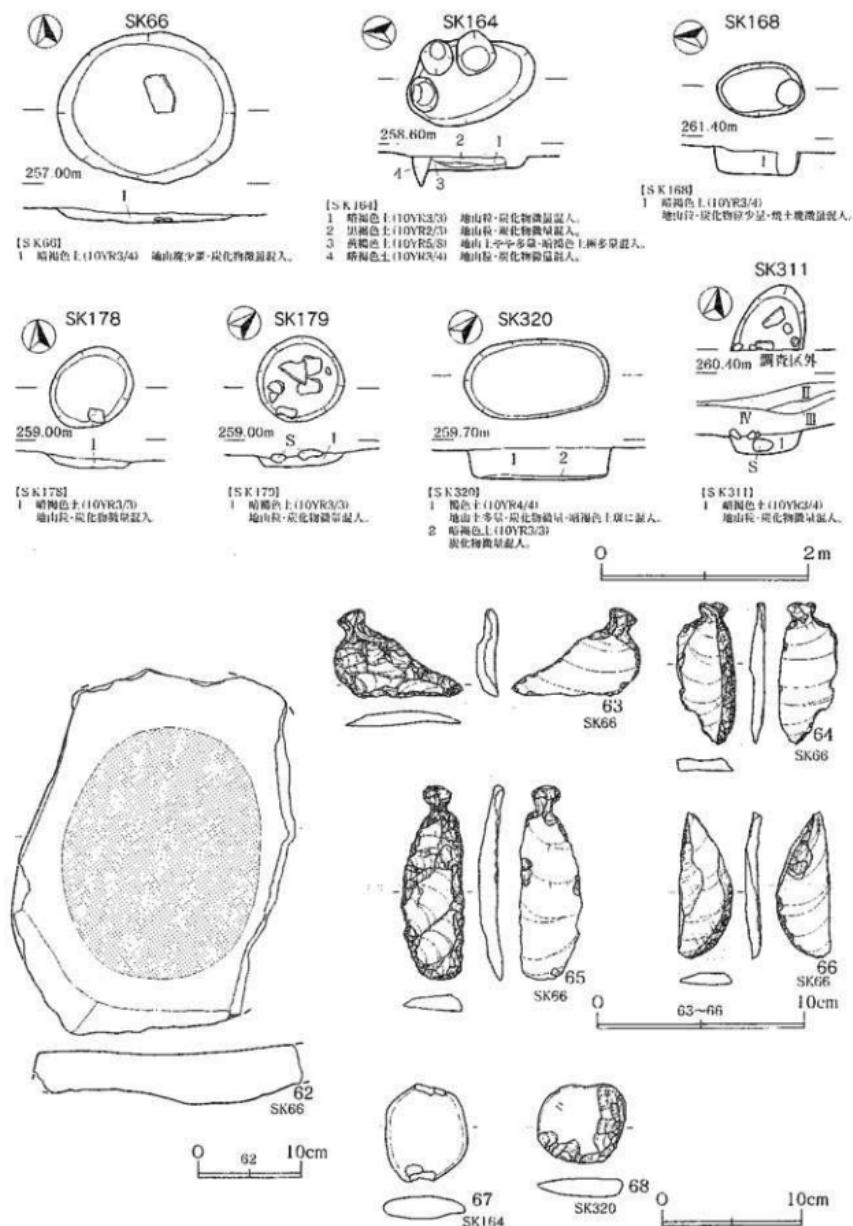
L G 52、L H 52 グリッドに位置する。地山上で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸 0.86m × 短軸 0.71m の楕円形を呈し、確認面からの深さは 0.13m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層である。底面は、中央部がやや低いが、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位より、縄文時代前期中葉から中期前葉と思われる。

### SK179 土坑(第 15 図)

L H 52 グリッドに位置する。IV 層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 0.83m の円形で、確認面からの深さは 0.14m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、ビンボン玉大から人頭大の礫を数個含む。底面は、中央部がやや低いが、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位より、縄文時代前期中葉から中期前葉と思われる。

### SK311 土坑(第 15 図)

L H 56 グリッドに位置する。調査区外との境界の断面に掘り込みを検出して確認した。全容は不



第15図 SK66・164・168・178・179・311・320 土坑とその出土遺物

明であるが、調査した半分の形状から平面形は橢円形と思われる。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は1層で、ピンボン<sup>ト</sup>大から人頭大の礫を含む。底面は、中央部が低いが、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認状況から縄文時代前期中葉から中期前葉と思われる。形態から上墳墓と考えられる。  
SK320 土坑(第15図)

L157・L1157 グリッドに位置する。地山上で褐色土に暗褐色土が廣に混じる円形の広がりとして確認した。平面形は、長軸1.9m×短軸0.75mの橢円形で、確認面からの深さは0.30mを測る。壁は、わずかに外傾しながら立ち上がる。覆土は2層に分けられたが、暗褐色土が礫に混入することから、人為堆積と思われる。底面はほぼ平坦である。覆土中から縄文土器片6点、削器1点(68)が出土した。土器片は、磨滅が著しく掲載しなかった。構築時期は、確認面の肩位と出土遺物より、縄文時代前期中葉から中期前葉と思われる。覆土と形態から上墳墓と考えられる。

### 3 土器埋設造構

#### S R243 土器埋設造構(第16図、図版4・9)

MB64 グリッドに位置する。道路により上部は削平されていたが、地山上で正立する土器を検出し確認した。掘り方規模は、開口部径53cm、底面径24cm、確認面からの深さ32cmを測る。土器(72)は、底径11cm、高さ14cmの上部を欠損する深鉢形上器である。埋設土器以外の遺物は出土しなかった。覆土は、土器内と掘り方の2層に分けられた。土器の外側ににぶい黄褐色土を詰めて埋設していた。時期は、縄文時代中期前葉と思われる。

#### S R318 土器埋設造構(第16図、図版9)

MH59 グリッドに位置する。上部は削平されていたが、地山上で正立する土器を検出し確認した。掘り方規模は、ほぼ土器と同じで、開口部径27cm、底面径22cm、深さ9cmを測る。上器(70)は、現存部分が底面径19cm、高さ6cmで、上方の大部分は失われている。埋設土器以外の遺物は出土しなかった。覆土は、土器内と掘り方の2層に分けられた。時期は、縄文時代前期中葉から後葉と思われる。

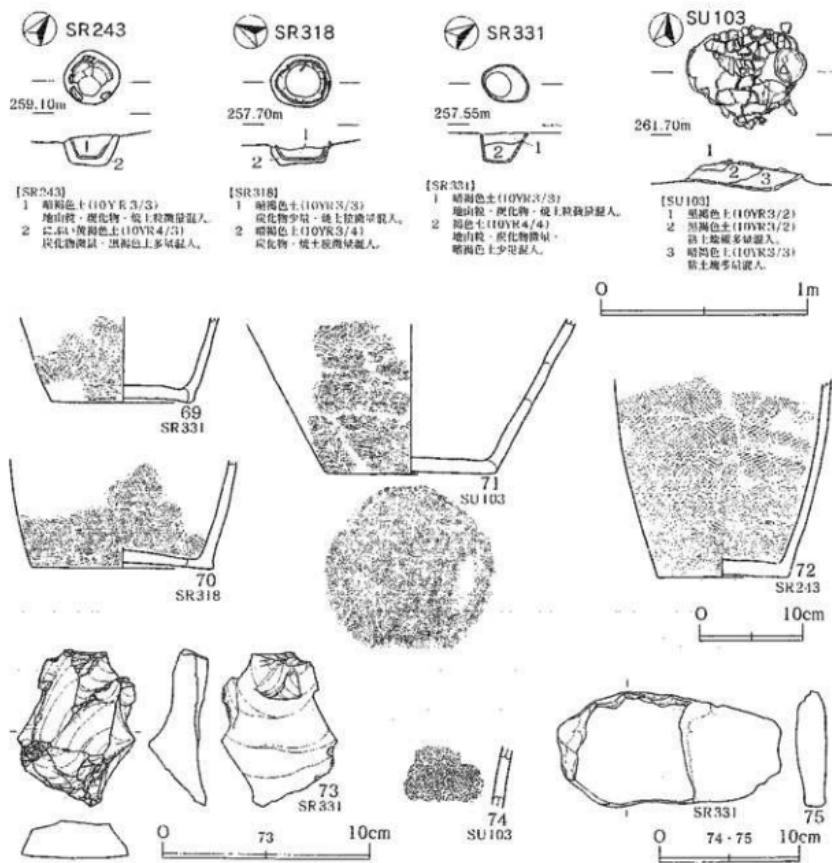
#### S R331 土器埋設造構(第16図、図版9)

MH58 グリッドに位置する。地山上で正立する上器を検出し確認した。掘り方規模は、ほぼ土器と同じで、開口部径20cm、底面径12cm、深さ14cmを測る。土器(69)は、現存部分が底面径12cm、高さ14cmで、上半部は失われている。埋設土器以外の遺物は、削器1点(73)、半円状扁平打製石器1点(75)が出土した。覆土は、土器内が2層に分けられた。時期は、縄文時代前期と思われる。

### 4 粘土貯蔵造構

#### S U103 粘土貯蔵造構(第16図、図版4・9)

LD57 グリッドに位置する。地山上に土器がまとめて出土し、確認した。S1339 壁穴住居跡と重複する。S1339 壁穴住居跡より古い。土器および内部の褐灰色粘土が、長径55cm、短径49cmの橢円状に広がる。その厚さは、最も厚いところで13cmを測る。掘り込みはないが、土器に挟まれた粘土と覆土は3層に分けられた。土器に詰め込まれていた粘土と、粘土が流出し黒色土、暗褐色土の滲入した部分である。粘土は大部分酸化しているが、本来は青灰色であったと思われる。遺物は、本体土器(71)と流れ込んだと思われる土器(74)が出土した。取り上げた土器片は60点に及んだが、流失・磨滅が激しく復原できたのは底部のみである。時期は、出土土器より、縄文時代前期中葉から後葉と思われる。本造構は、粘土を貯蔵した土器が横倒しになった跡と思われる。



第16図 SR243・318・331土器埋設遺構、SU103粘土貯藏遺構とその出土遺物

## 第2節 繩文時代後期の遺構と遺構内出土遺物

### 1 塵穴住居跡

S I 30 塘穴住居跡(第17・18図、図版4)

L H46・47・48、L I 46・47・48 グリッドに位置する。焼土と柱穴の検出によって確認した。S K P 63 柱穴様ビットと重複している。本住居跡が古い。一部道路によって削られた部分があるが、平面形は直角6.2mの円形である。壁面に沿って円形に柱穴が並んでいる。覆上は、1層と考えられる。壁は、柱をほぼ等間隔に並べ、その柱の間を地山上で埋めた構造であったと思われる。床面は、焼上

上面で平坦だったと考えられるが、はっきりとしたところは検出できなかった。竪穴住居跡中央部北西よりに地床炉がある。主柱穴は4本である。本住居跡のものと確認できた遺物は、柱穴から出土した上器片4点(76~79)、石錘1点(80)である。出入り口と思われる柱穴の覆土から2回の改築が考えられるが、北側で柱穴列が二重になることから少なくとも1回の改築があったと思われる。構築時期は、床面が基本上層Ⅲ層中に作られたと考えられることと出土した土器片から、縄文時代後期前葉と思われる。なお、76は前期の十器が流れ込んだものと考えられる。

#### S I 45 竪穴住居跡(第18図、図版4・9)

LB56 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で3基の埋設土器を検出し、竪穴住居跡と判断した。3基の埋設土器は、検出順に炉A・炉B・炉Cとした(81~85)。覆土は、表土除去の際に取り除いてしまい調査できなかったが、か<sup>i</sup>Aと周辺の焼土部分については10層に分けられた。炉A(81)は直径約17cmの深鉢形土器であり、底部を欠き、垂直に埋設されており、その高さは確認できた部分だけで14cmを測る。炉B(82)は、直径約28cmの深鉢形土器で、か<sup>i</sup>Aと同様底部を欠いて埋設され、その高さは22cmを測る。か<sup>i</sup>C(83)は、高さ42cmの深鉢形土器を縦に半截した後、横位に設置していたが、磨滅が著しく一部しか復原できなかった。炉の新旧関係は、焼土の堆積状況から、それぞれわずかであるが時期差があり、か<sup>i</sup>C→か<sup>i</sup>B→か<sup>i</sup>Aの順に古いと考えられる。他に、炉Bの内部から2点(84・85)の土器が出土した。構築時期は、が埋設土器から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S I 46 竪穴住居跡(第19図、図版4)

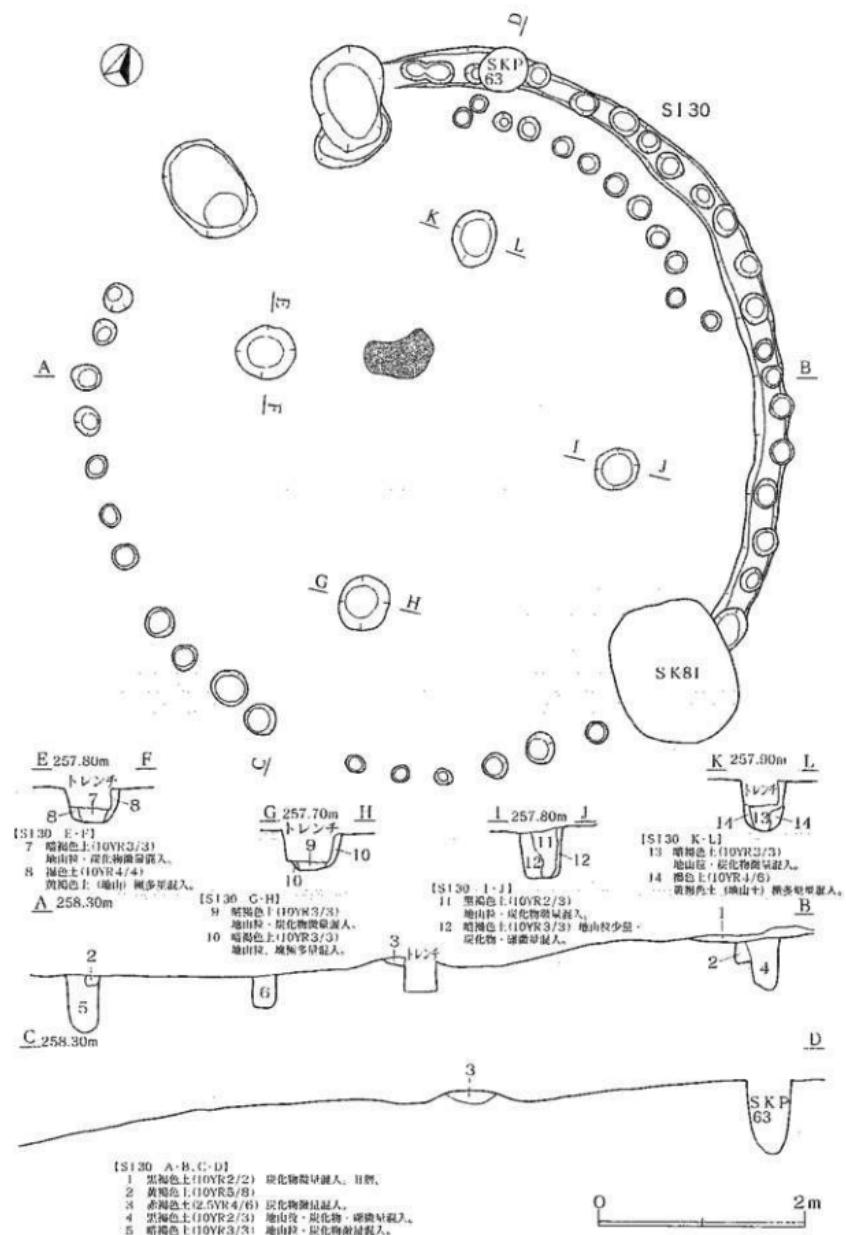
LB57 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で2基の炉を検出し、竪穴住居跡と判断した。覆土は、表土除去の際に取り除いてしまい、床面の一部を確認しただけである。その床面には地山に由来する褐色土と焼上、炭化物が混入していた。貼り床と考えられるが、確認できた面積は北側の炉(A)の周辺部約1m<sup>2</sup>である。炉Aは、埋設土器(86)を作う。直径約29cmの深鉢形土器の底部を欠き、倒立に置いたものである。この埋設土器の南側に炉Bがあり、南北約0.4m、東西約0.8mの焼土範囲をもつ。これには浅い掘り込みがあり、焼土が堆積していた。焼けた上器片が出土したことから、ここにも土器を埋設していた可能性がある。炉Aの覆土は4層、炉Bの覆土は2層に分けられた。なお、掲載していないが、埋設土器以外に、炉の内部と周辺から土器片42点が出土している。2基の炉の新旧関係は不明である。構築時期は、が埋設土器から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S I 47 竪穴住居跡(第19図、図版9)

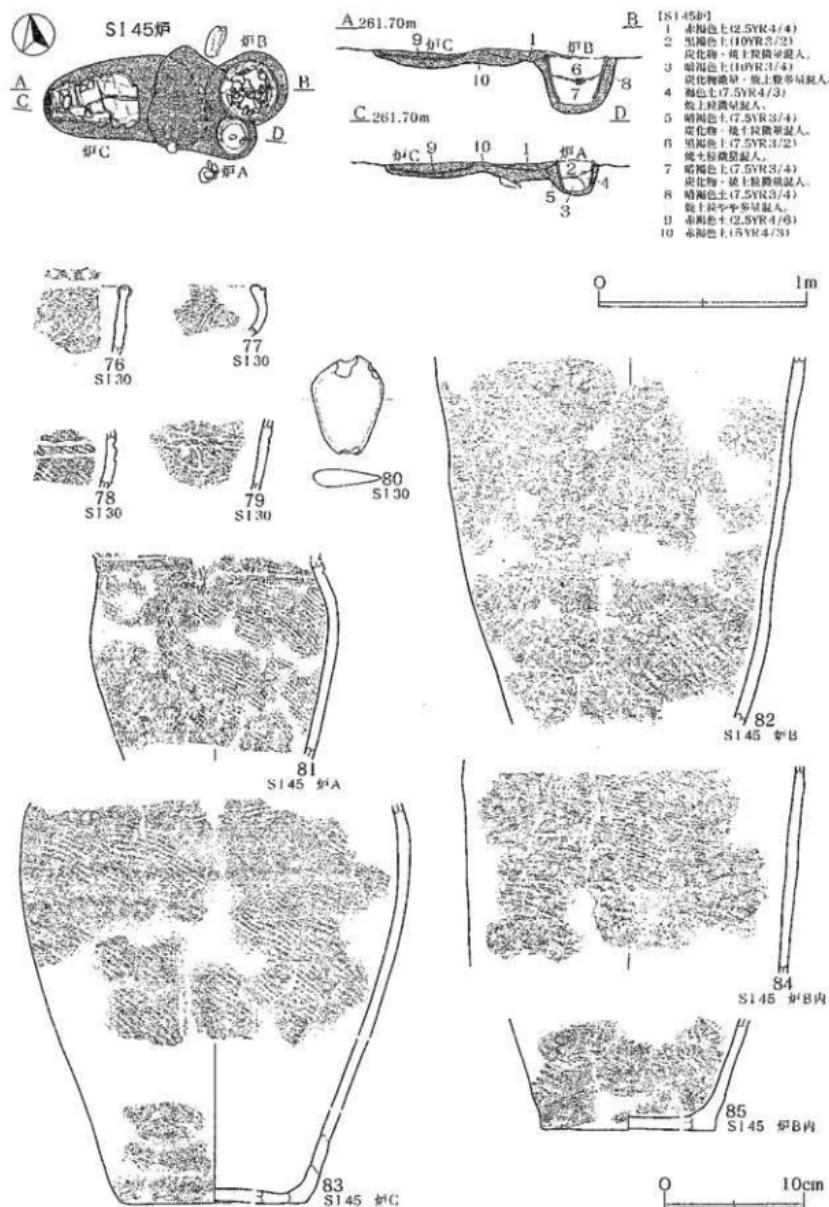
LA56 グリッドに位置する。調査区の境界沿いにトレーナーを入れた際、Ⅲ層上面で土器埋設炉を確認し、竪穴住居跡と判断した。覆土は、表土除去の際に取り除いてしまい調査できなかった。Ⅲ層上面から掘り込みがあったと思われるが、壁の立ち上がりも検出できなかった。埋設土器にともなう掘り込みは2層で、その覆土に土器片が刺された状態で弧を描くような形で出土したことから、これに埋設土器が設置されていたものと判断した。その土器片に接して東側には焼土の広がりも確認できた。本住居跡のものと確認できた遺物は、炉埋設土器(87)とその周辺から出土した土器(88・89)だけである。88、89は断面勾角作成の際にか<sup>i</sup>の掘り込み内とその直下から出土した縄文時代前葉の土器である。構築時期は、が埋設土器から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S I 51 竪穴住居跡(第19図、図版10)

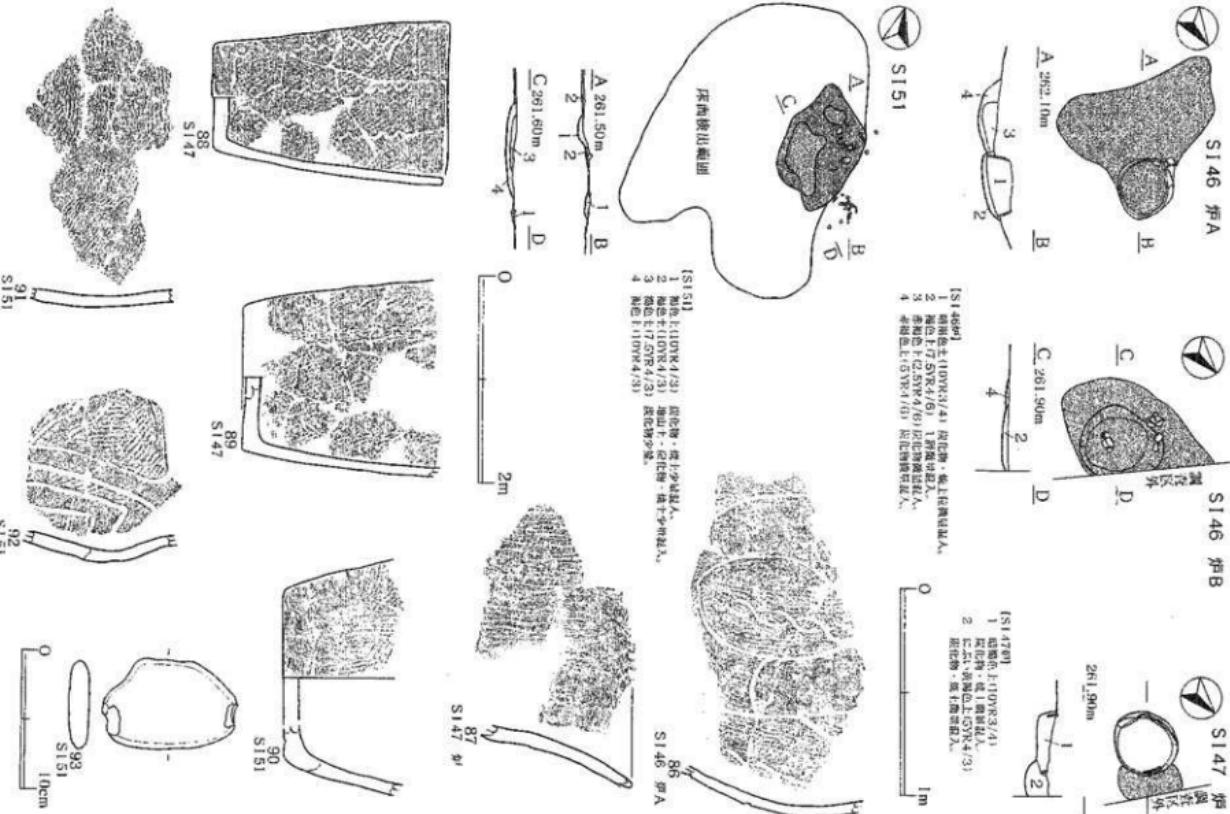
LB55 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で、固く締まる焼土と地山土が混じる暗褐色土の広がりを



第17図 SI 30 穂穴住居跡



第18図 SI 30・45 積穴住居跡とその出土遺物



第19図 SI 46・47・51 穂穴住居跡とその出土遺物

検出し、堅穴住居跡と判断した。覆土は、表土除去の際に取り除いてしまい調査できなかった。暗褐色土に地山土を貼ったと思われる床面は、しまりが弱く、確認できた面積は約4mである。かを1基確認した。土器の胴部破片が覆土に刺さった形で出土したことから、土器埋設かの可能性がある。本住居跡に伴う遺物は、か内の上器(91)とその周辺の上器(90・92)、および石錐1点(93)である。構築時期は、確認面の層位と出土した土器から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S I 53 堅穴住居跡(第20図、図版5)

L C 56・57、L D 56・57グリッドに位置する。Ⅲ層上面でか埋設土器を検出し、堅穴住居跡と判断した。S I 102・334・339堅穴住居跡と重複するが、いずれの住居跡よりも新しい。平面形は、直径3.5mほどの円形と推定される。覆土は、表土除去の際に取り除いてしまったが、かは埋設土器の覆土と掘り方の2回に分けられた。掘り方は、土器より一回り大きめである。土器は上部を欠いているが、直径21cm、深さ10cmの深鉢形土器が正立する形に据えられていた。その周囲には、狭い範囲ではあるが、焼土の堆積が認められた。かを囲むように5基の柱穴を検出した。4基はいずれも直径25cmほどの円形で30~40cmの深さがあるが、北端の1基は地山までの深さが浅いためか、柱穴の深さは15cmと浅くなっている。本住居跡に伴う遺物は、か埋設土器(94)のほかは23点の上器片のみである。構築時期は、か埋設土器から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S I 55 堅穴住居跡(第20図、図版5・10)

L I 49グリッドに位置する。Ⅲ層中でかを検出し、堅穴住居跡と判断した。S I 61堅穴住居跡と重複すると思われるが、詳細は不明である。炉は、土器埋設炉である。同じ場所に2回作られているが、古いほうの炉は廃棄にともなって小石混じりの灰で中を埋めている。床面に柱穴を検出しているが本住居跡に伴うかどうかは不明である。本住居跡に伴う遺物は、炉埋設土器(95、96)だけである。炉が2回作られていることから、1回の改築が考えられる。構築時期は、炉埋設土器から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S I 61 堅穴住居跡(第20図)

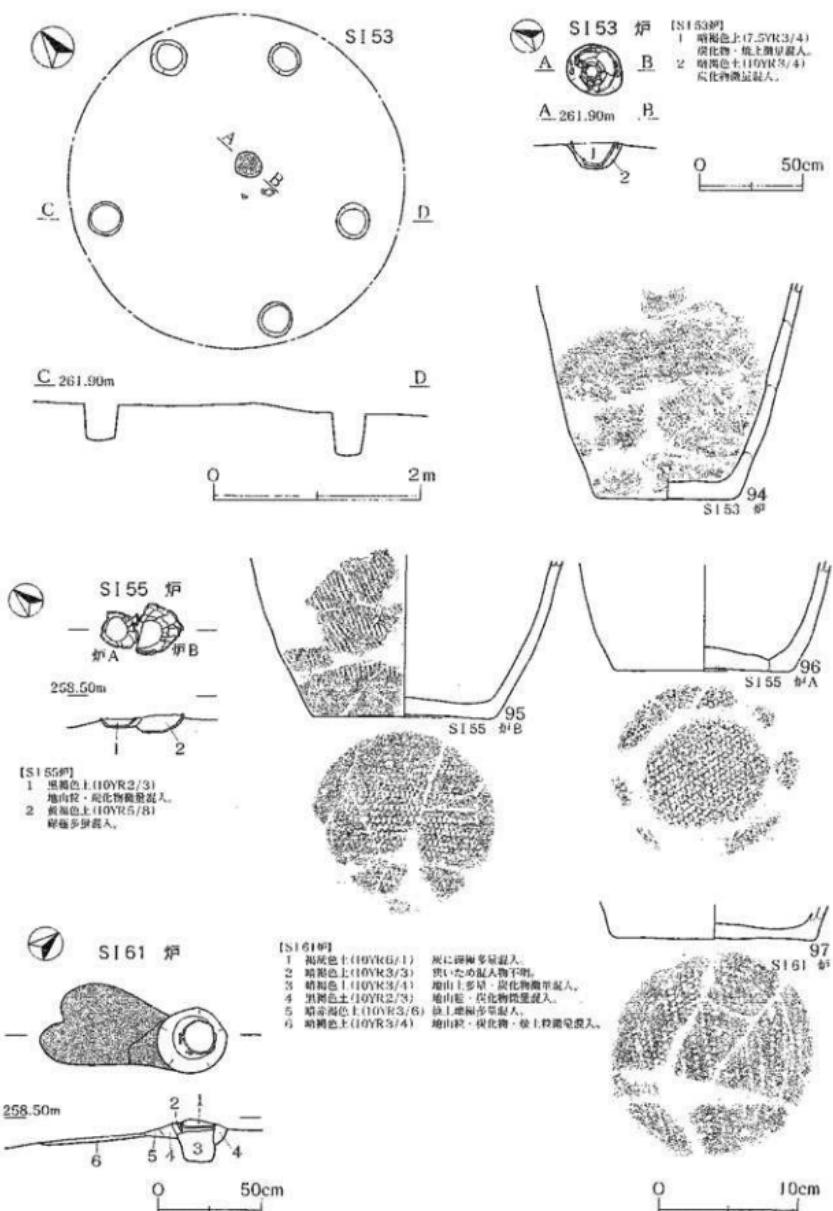
L I 50グリッドに位置する。Ⅲ層中で炉を検出し、堅穴住居跡と判断した。S I 55堅穴住居跡と重複すると思われるが詳細は不明である。床面は、平坦であると思われる。かは、土器埋設かである。柱穴状の掘り込みに地山土を埋め土器を設置している。床面に柱穴を検出したが本住居跡に伴うかどうかは不明である。本住居跡に伴う遺物は炉埋設土器(97)のみである。構築時期は、縄文時代後期前葉と思われる。

#### S I 77 堅穴住居跡(第21図、図版5)

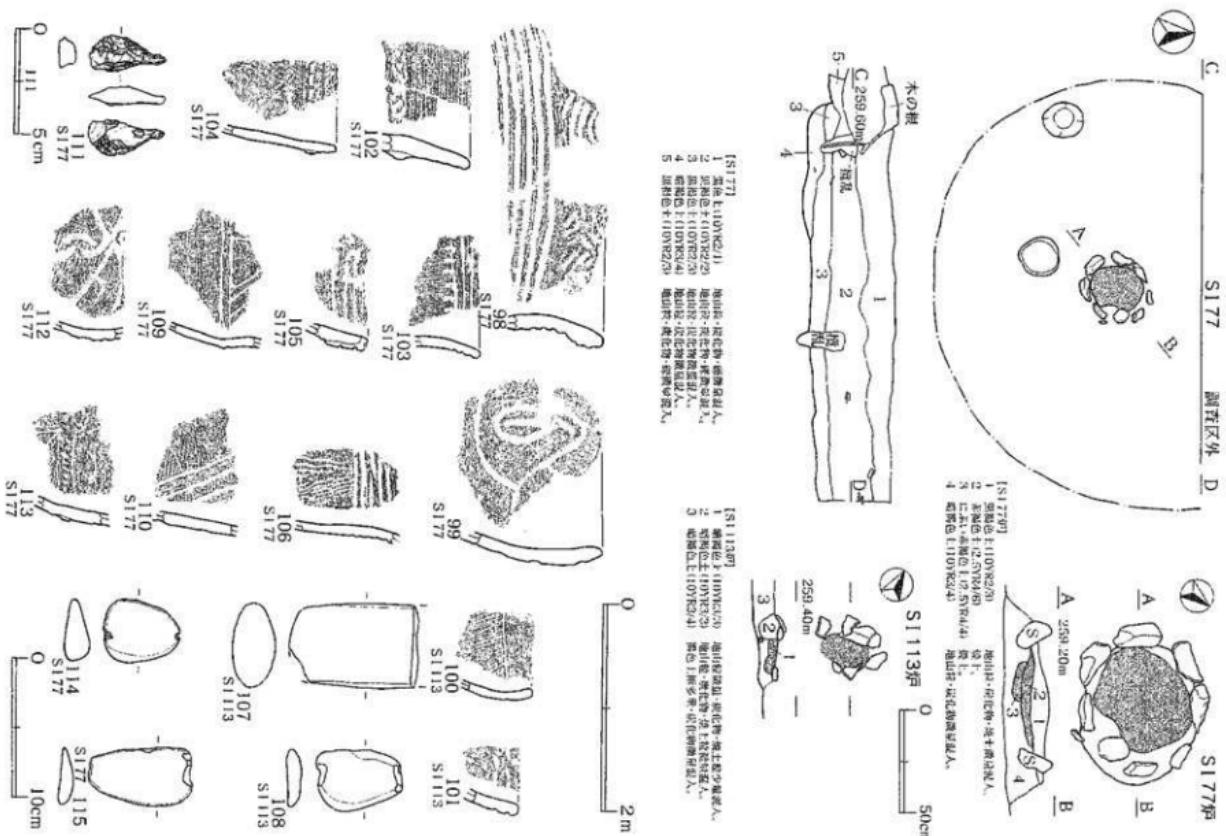
L D・L E 50グリッドに位置する。Ⅲ層中で黒色土の落ち込みとして確認した。S I 97堅穴住居跡と重複するが、本住居跡が新しい。平面形は、直径約4mの円形と推定される。覆土は、2層に分けられた。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は、ほぼ平坦であり、S I 97堅穴住居跡の覆土の上に作られている。炉は、人頭大の礫を8個円形に並べた石皿ゆで、焼上が堆積し、礫の内面は焼けていた。柱穴は、2基検出した。遺物は、覆土中から縄文時代前期末葉(102~104・106)と中期初頭(98)、後期前葉(99・105・109・110・112・113)の土器片、および石錐2点(114・115)、削器1点(111)が出土した。構築時期は、検出面の層位と出土した土器片から、縄文時代後期前葉と思われる。

#### S I 113 堅穴住居跡(第21図、図版5)

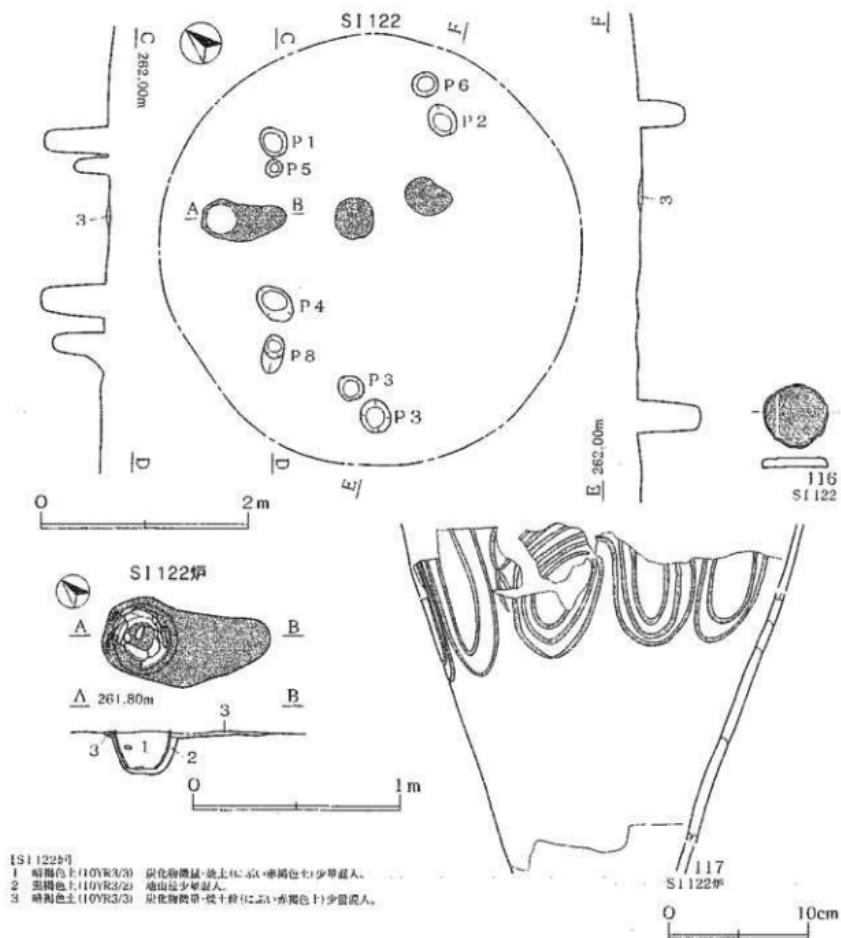
L G 50・51グリッドと調査区外との境に位置する。Ⅲ層中で石窯かを検出し、堅穴住居跡と判断



第20図 S153・55・61 竪穴住居跡とその出土遺物



第21図 S177-113 穹穴住居跡とその出土遺物



第22図 SI 122 壁穴住居跡とその出土遺物

した。炉は、礫を不整円形形状に配置し、その中には焼上がり堆積していた。周間に数基の柱穴があったが、本住居跡のものかどうかは不明である。遺物は、炉の中から縄文時代中期初頭(101)と後期前葉(100)の上器片、石錐1点(108)、石斧1点(107)が出士した。構築時期は、検出面の層位と出土した上器片から、縄文時代後期前葉と思われる。

#### S I 122 壁穴住居跡(第22図、図版5)

L.G63・64、L.H63・64 グリッドに位置する。Ⅲ層中に、か埋設土器を確認し、壁穴住居跡と判断した。平面形は、直径約4mの円形と推定される。壁面と覆土は、平成9年度の調査の際に除去さ

れ不明である。床面は、ほぼ平坦である。焼上の広がりを 3 カ所検出した。うち 1 カ所は、埋設土器を伴う。柱穴は、8 基検出した。P1~4 はやや深く、その他は比較的浅い。本住居跡に伴う遺物は、か壺設上器(117)と円盤状土製品 1 点(116)のみである。焼上が 3 カ所にあることと柱穴が 2 基ずつ並ぶ配置から、1 回ないし 2 回の改築が考えられる。構築時期は、山上した埋設土器から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S I 140 穹穴住居跡(第 23 図)

L B56・57、L C56・57 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で、焼上とそれを取り囲む柱穴 10 基あまりを確認し、穹穴住居跡と判断した。S I 148・157・158 穹穴住居跡と重複するが、そのいずれの遺構よりも新しい。平面形は、直徑約 3.9m の円形と推定した。覆土は 1 層である。壁は、北西側の 2m ほどしか確認できなかったが、高さ 0.1m で、やや外傾しながら立ち上がる。床面は、ほぼ平坦である。床面に赤変窓所が 1 カ所あり、地床炉と判断された。同一面から、13 基の柱穴を検出したが、主柱穴は不明である。壁に沿う柱穴が並列していることから、1 回の改築が考えられる。本住居跡のものと確認できた遺物はない。構築時期は、検山面の層位から縄文時代後期と思われる。

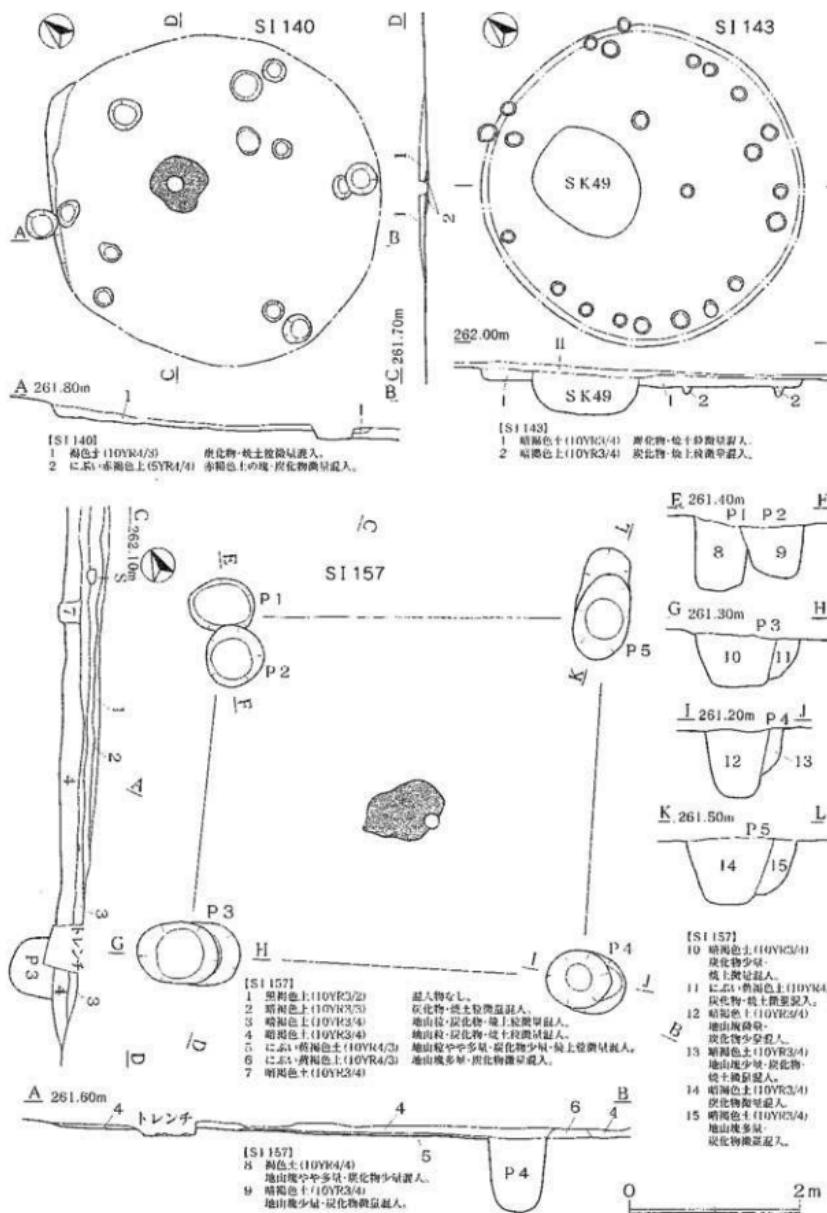
#### S I 143 穹穴住居跡(第 23 図、図版 5)

L A55・56、L B55・56 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で、柱穴 20 基あまりが円形に並ぶことを確認し、穹穴住居跡と判断した。S I 148・157・158 穹穴住居跡、SK49 土坑と重複するが、SK49 上坑より古く、他の遺構よりも新しい。平面形は直徑約 3.90m の円形と推定され、確認できた深さは 0.15m である。覆土は 2 層である。うち 1 层は柱穴の覆土である。壁は、断面でしか確認できなかったが、やや外傾しながら立ち上がる。床面は、ほぼ平坦である。炉は、本住居跡を壊して構築された SK49 土坑の覆土に多量の焼上粒が含まれていたことから、同遺構に壊されたものと思われる。柱穴は同一面から 23 基を検出したが、すべて直徑 0.15m、深さ 0.25m ほどであり、主柱穴は不明である。北西側に一部柱穴の並びが途切れる部分があり、出入り口と考えられる。本住居跡に伴う遺物はない。構築時期は、確認面の層位と柱穴の覆土の状況から、縄文時代後期と思われる。

#### S I 157 穹穴住居跡(第 23 図、図版 5)

L A56、L B55・56、L C55・56 グリッドに位置する。柱穴はⅢ層下面で、暗褐色土の落ち込みとして確認し、焼上は同じく黄褐色土の赤変として確認した。当初それぞれ別遺構と判断したが、確認面が同じことと、焼土を開んで柱穴が正方形に配置されていることから、柱穴の半数終了後堅穴住居跡とした。S I 143・148・158 穹穴住居跡と重複する。S I 143 穹穴住居跡より古く、S I 148・158 穹穴住居跡よりも新しい。柱穴の規模は直徑 0.6m~1m、深さは 0.60~0.88m で、類似した形状となっている。覆土は 15 層に分けられたが、第 7 層は別の遺構の覆土で、第 8~15 層は柱穴の覆土である。人為堆積と思われる。床面は、西側がやや下がるが、ほぼ平坦である。黄褐色土の赤変窓所が 1 カ所あり、地床炉と判断した。4 カ所に柱穴を確認したが、それぞれ重複していた。掘り込みが確認できないことと柱穴の規模から、掘立柱建物跡の可能性もある。本住居跡に伴う遺物は、柱穴から出土した縄文土器片 4 点であるが、磨滅が著しいため掲載しなかった。4 カ所の柱穴すべてがそれぞれ 2 基の柱穴の重複となっていることから、1 回の改築が考えられる。柱穴の芯芯間距離は構築当初が 4.05m~4.75m、建て替え後が 3.55m~4.65m と推定される。構築時期は、確認面の層位と柱穴の覆土の状況から、縄文時代後期と思われる。

#### S I 202 穹穴住居跡(第 24 図、図版 5・10)



MA55、L J54・55・56、L I54・55・56、L H54・55・56 グリッドに位置する。壁溝を検出して確認した。SK227・245 土坑と重複する。本住居跡は、SK227 土坑より新しく SK245 土坑より古い。全体の4分の1ほどは調査区外であることと大部分が道路で削られていたため詳細は不明であるが、平面形は、直径9.2m の円形と思われる。覆土は、約10cm の厚さで残っているだけであった。床面は、平坦であるが西に向かって低くなる。柱穴は、床面より27基検出した。主柱穴はP5・9・11・14・16・17・22と思われ、P13・15・19は別の造構に伴う柱穴と思われる。壁溝は東側に検出され、西に伸びるにしたがって消滅していく。その溝の延長線上に、平均して人頭大の疊が弧状に配列されている。この配石は調査区外にあるが、壁を構成するものと思われる。その性格上、溝の内側にあるとは考えにくく外側にあったと思われる。遺物は、覆土から縄文土器(118・119・121・122)、搔器1点(120)、石錘2点(123・124)が出土した。P16に重複があるほかは、改築の痕跡はない。構築時期は、山上した上器から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S I 242 整穴住居跡(第25図、図版6・10)

L I57、L J57 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で炉埋設土器を検出して確認した。S I 261 整穴住居跡、SQ07 配石造構と重複する。S I 261 整穴住居跡より新しく、SQ07 配石造構より古い。道によってほとんどが削られていて全容は不明であるが、床面は平坦であると思われる。炉には埋設土器が伴い、その北側と東側に焼上が広がっている。北側に広がる焼上の端には、薄い炭の堆積が見られた。本住居跡に伴う遺物は、炉埋設土器(125)だけである。構築時期は、埋設土器から縄文時代後期と思われる。

#### S I 260 整穴住居跡(第25図、図版6)

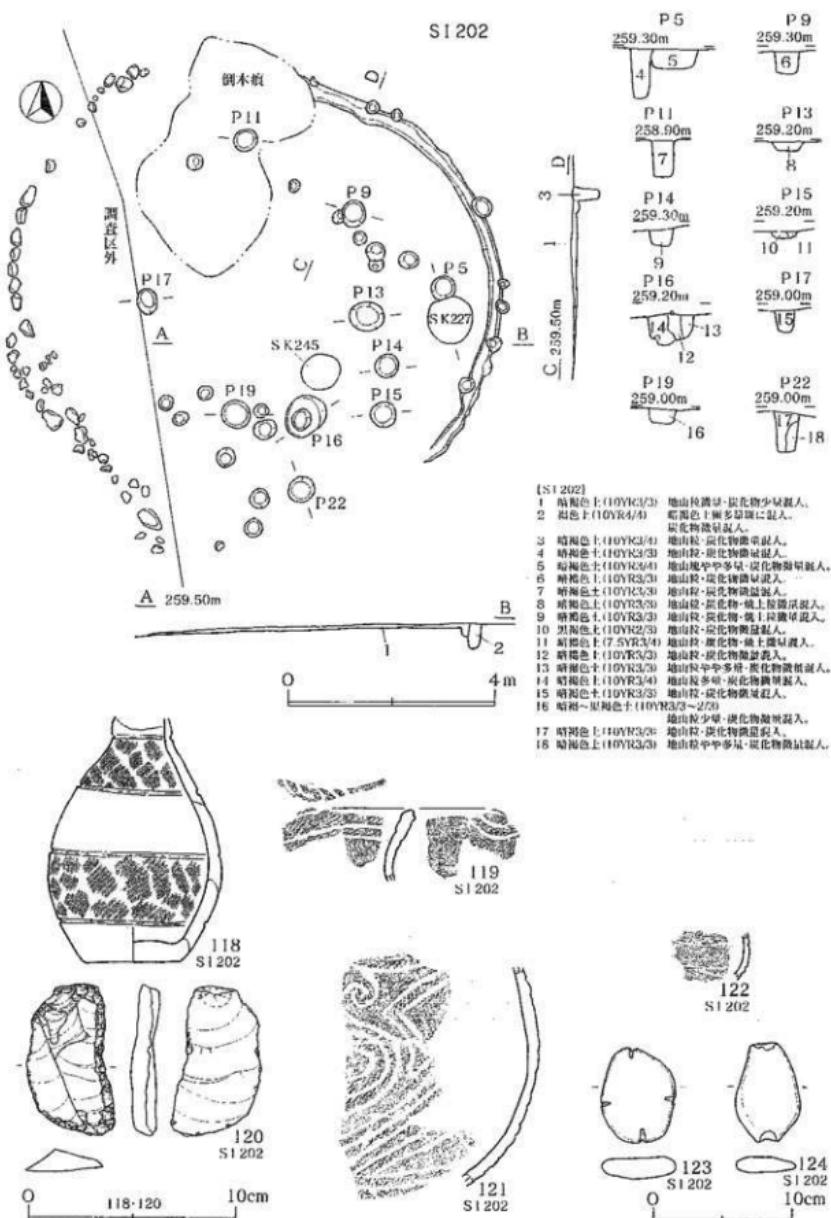
L J65 グリッドに位置する。Ⅲ層中で土器埋設を確認し、整穴住居跡と判断した。斜面にあり、また杉根による攪乱のため床面、壁面ともに検出できなかった。炉の覆土は2層に分けられた。本住居跡に伴う遺物は、炉埋設土器(127)とその内部に詰められた土器片(126・128)だけである。炉埋設土器は、崩壊が著しく復原できなかった。構築時期は、山上した上器から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S I 261 整穴住居跡(第26図、図版6)

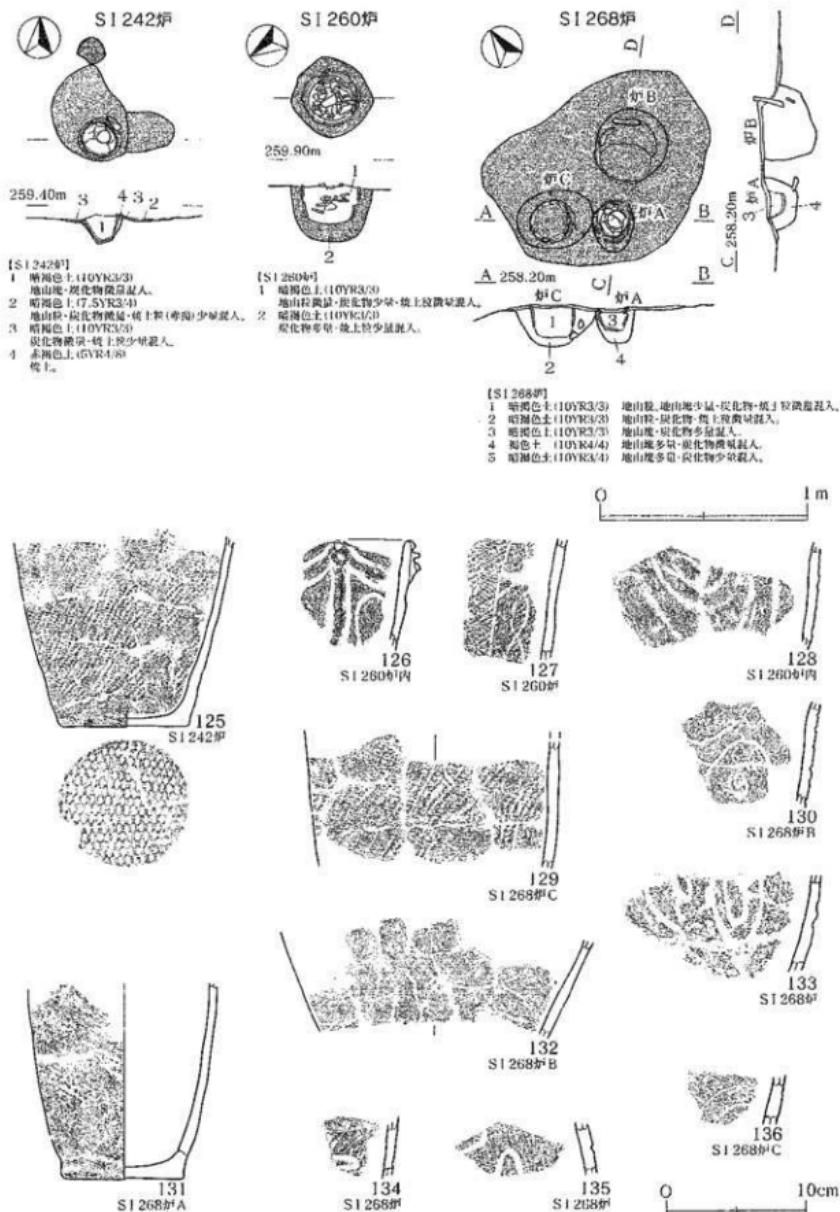
L I57、L J57・58 グリッドに位置する。Ⅲ層中で壁溝を検出して確認した。S I 242 整穴住居跡、SK252 土坑と重複し、本住居跡が最も古い。Ⅲ層上において平坦な床を作ったものと思われるが、地山が傾斜していて検出できなかった。壁溝の内側に33基の柱穴を検出したが、主柱穴は不明である。東側に約4.5m、北東側に約3.5m の弧状の溝がある。溝が検出された場所は斜面の高い部分で、低い部分では、確認できなかった。本住居跡に伴う遺物はない。構築時期は、検出面の層位から縄文時代後期と思われる。

#### S I 268 整穴住居跡(第25図、図版6・10)

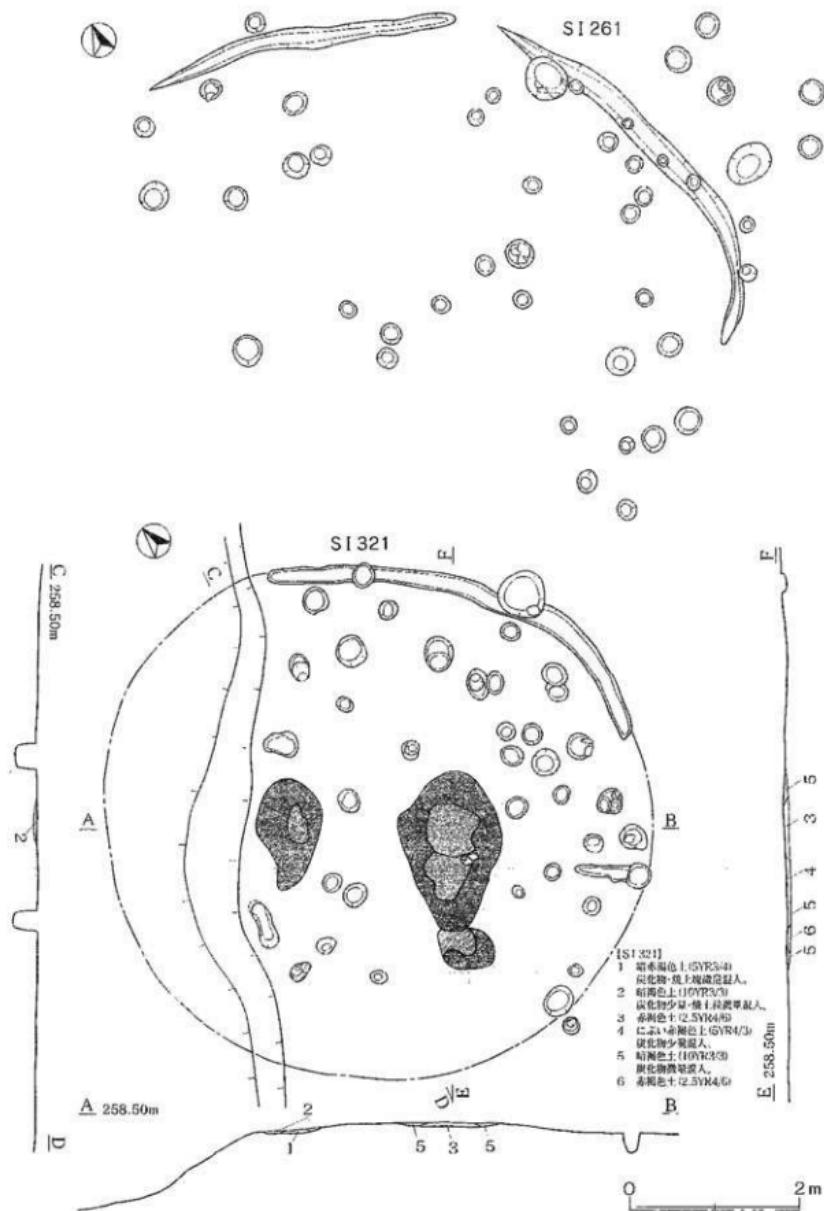
MF59 グリッドに位置する。Ⅲ層中で土器埋設を検出して確認した。S I 321 整穴住居跡、SX323 性格不明造構と重複すると思われるが、新旧関係についても不明である。炉は、検出順に炉A、炉B、炉Cとした。炉A、炉Cは、土器埋設である。いずれも上部を欠いているが、炉A(131)は口径15cm の深鉢形土器を、炉C(129)はL型縫部・底部を欠いた口径21cm の深鉢形土器を埋設していた。炉Bは、炉Aに伴う火床面と思われたが、直径約35cm、深さ約25cm の円形の掘り込みがあり、中から16点の土器片(復原が132)と扁平な疊が突き刺さった状態で出土した。廃棄の際埋設した土



第24図 SI 202 壁穴住居跡とその出土遺物



第25図 SI 242・260・268 積穴住居跡とその出土遺物



第26図 SI 261・321 窪穴住居跡

器を抜き取って、礎を立てた可能性もある。本住居跡に伴う遺物は、炉埋設土器(129・131)とその周辺から出土した土器片(130・132~136)である。3基の炉に明瞭な切り合い関係は認められなかったが、炉Aの焼上が全体を覆っていることから、炉Aが最も新しいと思われる。構築時期は、出土した土器から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S I 321 穹穴住居跡(第26図、図版6)

MD63・64、ME63・64 グリッドに位置する。Ⅲ層中で焼土の広がりと弧状の溝跡を検出して確認した。北西側は沢状の地形であり崩落しているが、平面形は直徑約6mの円形と推定される。床面は、平坦と思われる。焼土の広がりを3ヶ所で確認し、いずれも地床炉と判断した。40ヶ所近い柱穴を検出したが、すべてが本住居跡のものであるかどうかは不明である。東側に壁溝の一部が残っていた。柱穴は、床面から36基検出されたが、主柱穴は不明である。炉の焼上の堆積状態から、1回ないし2回の改築が考えられる。本住居跡に伴う遺物は、アスファルトの詰まった土器(S R262)だけである。深鉢形土器を埋設し、内部にアスファルトを貯蔵していたものと思われる。構築時期は、アスファルト貯蔵土器(280)から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S I 324 穹穴住居跡(第27図)

MF58・59、MG58・59・60、MII58・59・60 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で壁溝と焼上を検出し穹穴住居跡と判断した。S I 268 穹穴住居跡、S X323 性格不明造構と重複する。S X323 性格不明造構より古いか、S I 268 穹穴住居跡との新旧関係は不明である。平面形は、直徑約7.5mの円形と推定される。床面は、凹凸はあるがほぼ平坦である。床面に焼土の堆積を検出し、炉と判断した。本住居跡に伴う遺物はない。柱穴は床面に33基検出されたが、主柱穴は不明である。東側と北側に壁溝の一部が弧状に残っていた。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から、縄文時代後期と思われる。

#### S I 334 穹穴住居跡(第27図)

LC57・LD57 グリッドに位置する。Ⅲ層中で、焼土とそれを囲む柱穴を検出し穹穴住居跡と判断した。S I 53・102・339 穹穴住居跡と重複する。S I 53 穹穴住居跡より古く、S I 102・339 穹穴住居跡より新しい。平面形は、直徑約4mの円形と思われる。床面は、西側がやや低いが、ほぼ平坦である。焼土の堆積を確認し、地床炉と判断した。6基の柱穴を検出したが、トレーナー掘りの際に1基の柱穴を壊しているので、本来は7基あったものと思われる。主柱穴はP1~3と思われる。本住居跡に伴う遺物はない。構築時期は、検出状況から縄文時代後期と思われる。

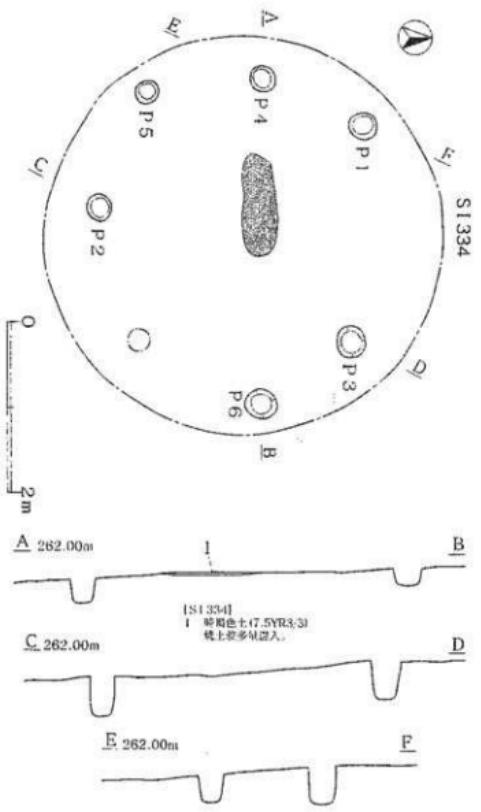
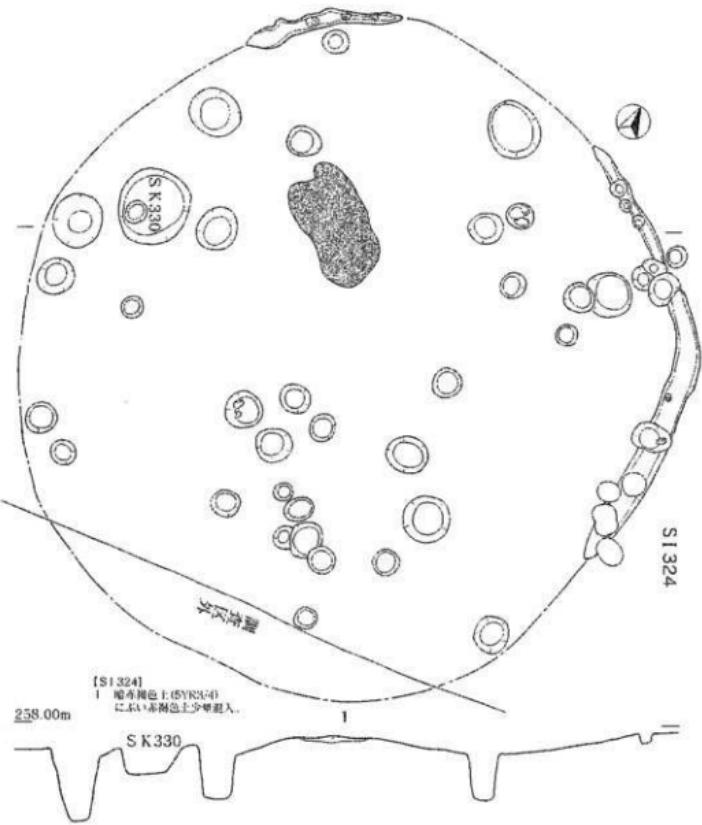
#### S I 337 穹穴住居跡(第28図)

ME60・61・62、MF60・61・62 グリッドに位置する。Ⅲ層中で、弧状に並ぶ柱穴群を検出し穹穴住居跡と判断した。平面形は、直徑約6mの円形と思われる。床面は、北西側がやや低いが、ほぼ平坦である。床面に50基あまりの柱穴を検出したが、主柱穴はP1~4と思われる。本住居跡に伴う遺物はない。弧状に並ぶ柱穴が二重、三重になること、P4とP5が重複することから、1回ないし2回の改築が考えられる。構築時期は、確認面の層位と柱穴の覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

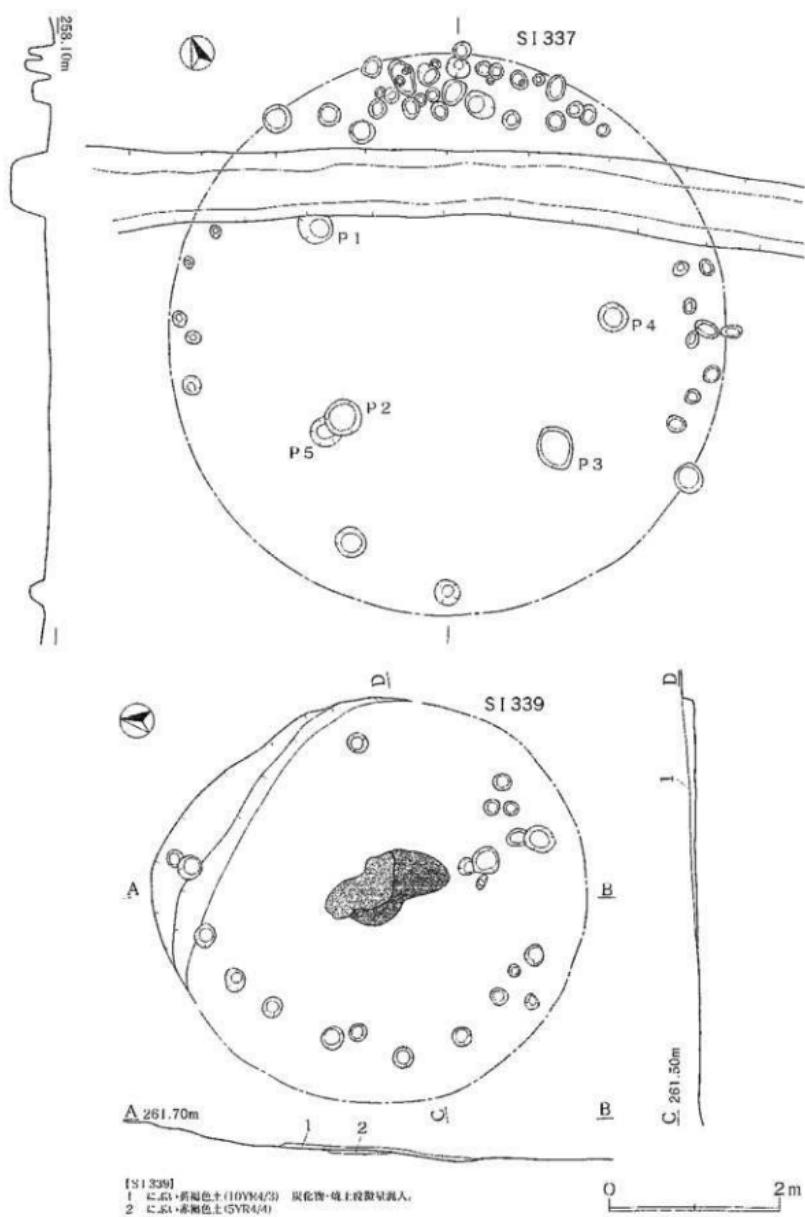
#### S I 339 穹穴住居跡(第28図、図版3)

LC56・57、LD57 グリッドに位置する。Ⅲ層中で、焼土とそれを囲む柱穴を検出し穹穴住居跡と判断した。S I 53・102・334 穹穴住居跡と重複する。S I 53・334 穹穴住居跡より古く、S I 102 穹穴住居跡より新しい。平面形は、直徑約4.5mの円形と思われる。壁は、北東側一部だけの検出である

第2節 特文時代後期の遺構と追拂出土遺物



第27図 S1324・334 積穴性居跡



第28図 SI 337・339 穂穴住居跡

が、ごく緩やかに立ち上がる。床面は、西側に向かってやや低くなるが、ほぼ平坦である。床面に焼土の堆積と炭の広がりを検出し、地床炉と判断した。床面と壁部分に22基の柱穴を検出したが、柱穴は不明である。本住居跡に伴う遺物はない。構造時期は、検出状況と柱穴の覆土から、繩文時代後期と思われる。

## 2 焼土遺構

### S N101 焼土遺構(第29図)

L G62 グリッドに位置する。平面形は長軸(北西-南東)1.38m×短軸(北東-南西)0.56m の楕円形を呈する。柱穴と重複するが、本遺構が新しい。本遺構の底面には、豆粒大の礫が敷かれたように堆積していた。掘り込みはなく、遺物は出土しなかった。

### S N104 焼土遺構(第29図)

L D55・56 グリッドに位置する。平面形は長軸(北-南)1.35m×短軸(東-西)0.30m の不整楕円形を呈する。掘り込みはなく、遺物は出土しなかった。

### S N126 焼土遺構(第29図)

L G65 グリッドに位置する。調査区外にかかっているため北東側は確認できなかったが、平面形は、円形または楕円形と考えられる。確認できた部分は、長軸(北西-南東)0.90m×短軸(北東-南西)0.18m である。掘り込みはなく、遺物は出土しなかった。

### S N152 焼土遺構(第29図)

L H51 グリッドに位置する。平面形が長軸0.3~0.9m×短軸0.2~0.4m の不整円形または楕円形の集合体状を呈する。いずれも掘り込みはなく、遺物は出土しなかった。

### S N153 焼土遺構(第29図)

L G50 グリッドに位置する。平面形は長軸(北西-南東)0.72m×短軸(北東-南西)0.22m の不整楕円形を呈する。掘り込みはなく、遺物は出土しなかった。

### S N342 焼土遺構(第29図)

L II63・64 グリッドに位置する。長軸(北東-南西)0.57m×短軸(北西-南東)0.35m の不整楕円形と、直径0.70m の不整円形の2ヶ所の焼上上がりがある。いずれも掘り込みはなく、遺物は出土しなかった。

### S N343 焼土遺構(第29図)

M G61・MH61 グリッドに位置する。2ヶ所の焼土を一括し本遺構とした。SKF307 袋状七坑と重複する。本遺構が新しい。1ヶ所は、炭化物の広がりを含めた全体の平面形が長軸(北東-南西)4.09m×短軸(北西-南東)2.65m の不整楕円形を呈する。その中に長軸約0.7m×短軸約0.35m の焼土が9ヶ所確認できた。北側と東側は、トレンチに切られている。もう1ヶ所は、その南東側で長軸0.85m×短軸0.52m の焼土とそれに接する炭化物の広がりが確認できた。いずれも掘り込みはなく、遺物は出土しなかった。

### S N344 焼土遺構(第29図)

M F61・MG61 グリッドに位置する。3ヶ所の焼土を一括し本遺構とした。1ヶ所は、炭化物の分布範囲を含め、平面形が長軸(北-南)3.63m×短軸(東-西)2.38m の不整楕円形を呈する。その中に長軸1.80m×短軸1.01m と長軸0.73m×短軸0.49m と長軸0.43m×短軸0.34m の楕円形の焼土が確認できた。1ヶ所は、その北東側で長軸(北西-南東)1.64m×短軸(北東-南西)0.64m の瓢箪形に広がる。1ヶ所は、南東側で長軸(北西-南東)0.79m×短軸0.54m(北東-南西)の不整楕円形に広がる。

いずれも掘り込みはなく、遺物は出土しなかった。

### 3 土坑

#### S K10 土坑(第29図、図版6)

M A60 グリッドに位置し、当初配石造構として確認した。S K P266 柱穴と重複するが、本土坑が古い。平面形は、長軸 1.20m × 短軸 0.75m の梢円形を呈し、確認面からの深さは 0.45m を測る。壁はやや外傾しながら立ち上がり、途中で一段平坦面をついたあと、再びやや外傾しながら立ち上がる。覆土は 4 層で、人為堆積と思われる。1 層と 2 層は同じ性格のものである。4 層は礫を据えた層である。1 层の上に大きく平べったい礫が蓋のように据えられ、その両側にも礫が据えられている。底面は、中央部が低くわずかに鉛底状である。遺物は、覆土中から縄文土器片(137)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。形態から土壙墓と思われる。

#### S K16 土坑(第29図)

L D58 グリッドに位置する。II 層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸 1.40m × 短軸 1.12m の不整梢円形で、確認面からの深さは 0.22m を測る。壁は、大きく外傾しながら立ち上がる。覆土は 2 層で、自然堆積と思われる。底面は、中央が凹む。遺物は、覆土中から縄文土器片(138、139)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S K24 土坑(第30図)

M C59、MD59 グリッドに位置する。II 層下面で黒褐色土の落ち込みと、礫の表出によって確認した。半分は調査区外である。平面形は、長軸約 2.65m × 短軸約 1.65m の梢円形と推定され、確認面からの深さは 0.37m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、直径 5cm～25cm の礫が多数散在する。人為堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

#### S K27 土坑(第30図、図版10)

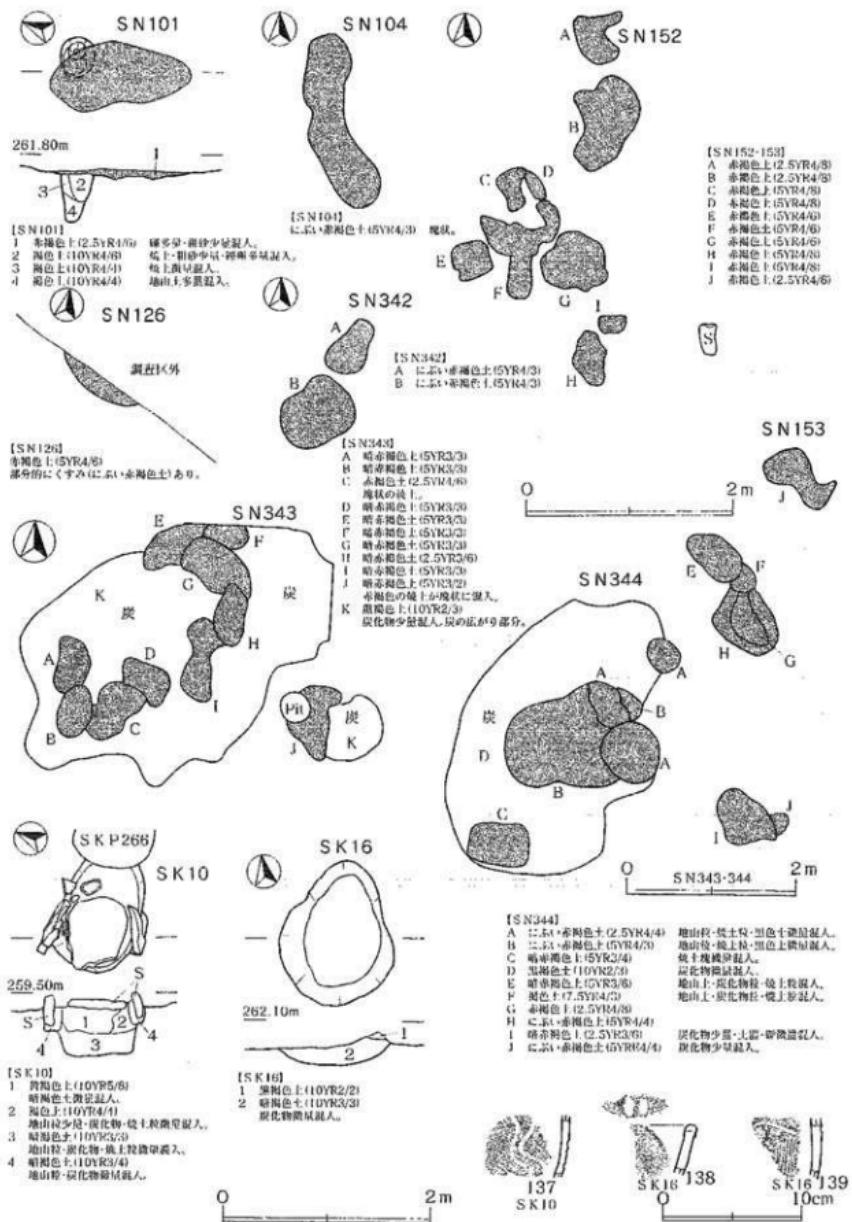
L E58、L F58 グリッドに位置する。II 層下面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。2 基の柱穴を壊して構築されている。平面形は、長軸 2.01m × 短軸 1.92m のほぼ円形を呈し、確認面からの深さは 0.43m を測る。壁は、外傾しながら緩やかに立ち上がる。覆土は 3 層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、3 層上面から縄文土器(150)、挿器 1 点(140)が出土した。構築時期は、出土した土器から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S K28 土坑(第30図)

L J43・44 グリッドに位置する。II 層下面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直軸 1.08m × 短軸 1.06m のほぼ円形を呈し、確認面からの深さは 0.38m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦であるが中央部が少し凹む。遺物は、覆土中から縄文土器片(141・142)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S K29 土坑(第30図)

L J45 グリッドに位置している。II 層下面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 1.35m の円形で、確認面からの深さは 0.20m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は 4 層で、自然堆積と思われる。底面は、やや中央部が低いが、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片



第29図 SN 101-104-126-152-153-342-343-344焼土造構、SK 10-16土坑とその出土遺物

4点が出土したが、磨滅が著しく、1点(143)のみ掲載した。これは、IV層に存在していた縄文時代前期葉の土器片が入り込んだものと考えられる。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期と思われる。

#### S K34 土坑(第30図)

L F50 グリッドに位置する。III層上面で地山混入土が円形に存在することから確認した。SK82十坑、柱穴2基と重複するが、いずれの造構よりも新しい。平面形は、長軸1.17m×短軸1.04mのほぼ円形で、確認面からの深さは0.40mを測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は4層で、人為堆積と思われる。北側にある柱穴も本上坑掘削時に埋められたものと考えられる。底面は、ほぼ平坦であるが中央部に浅い柱穴の痕跡がある。遺物は、覆土中から縄文土器片(144~147)、石皿1点(148)が出土した。縄文時代中期前葉(144~146)と後期前葉(147)の土器片が混じって出土している。構築時期は、確認状況と出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。形態と覆土の状況から、陥れ穴か貯蔵穴と考えられる。

#### S K35 土坑(第31図)

L H48 グリッドに位置する。III層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸57cm×短軸54cmの円形を呈し、確認面からの深さは0.39mを測る。断面形はU字形を呈する。覆土は、1層である。一気に埋め戻されたと考えられる。底面は、わずかに中央部が低く鍋底状を呈する。遺物は、覆土中から縄文時代後期の土器片(152・157)、削器1点(151)、半円状扁平打製石器1点(156)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。覆土の状況から上坑と判断したが、柱穴の可能性も否定できない。

#### S K36 土坑(第31図、図版6)

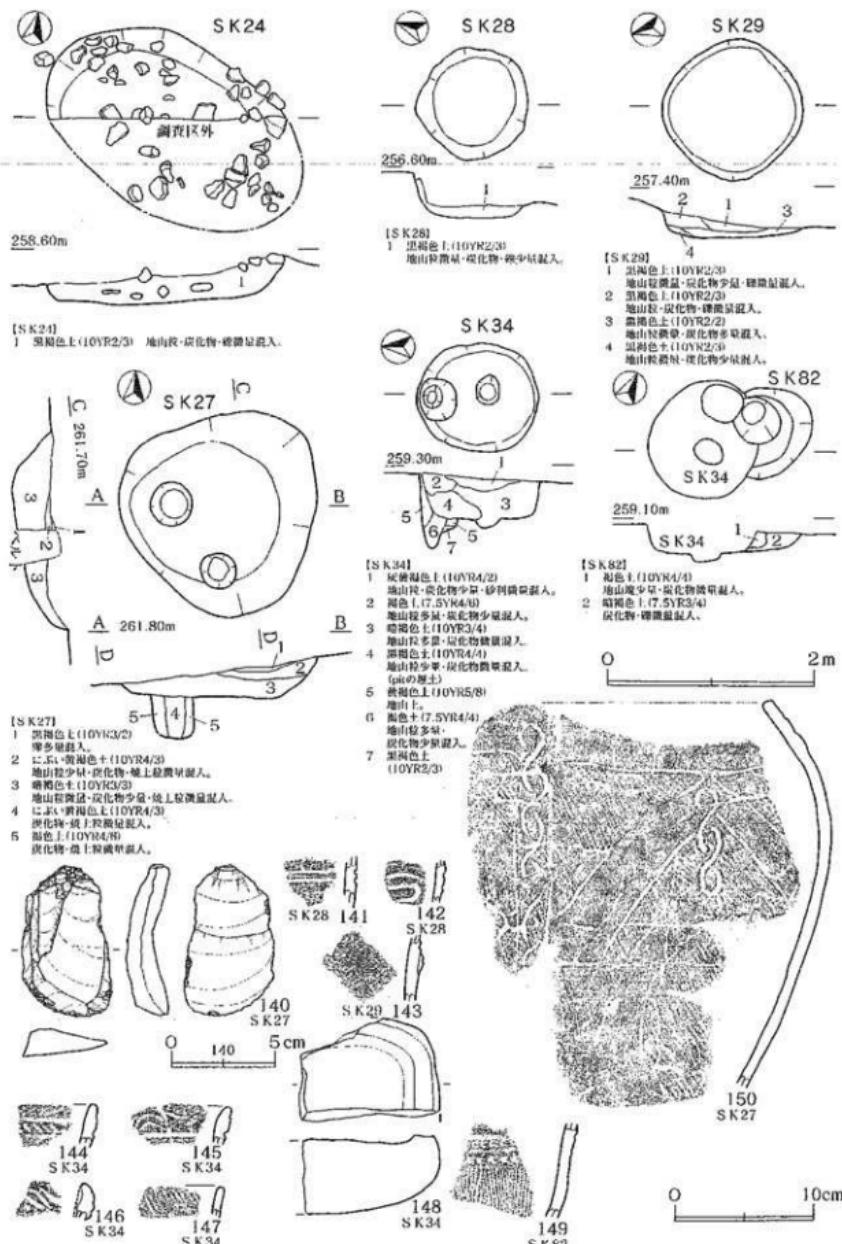
L II48・49 グリッドに位置する。II層下面で黒褐色土の落ち込みと基本土層ベルトで確認した。平面形は、長軸1.52m×短軸1.48mの円形で、確認面からの深さは0.54mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は、1層で、一気に埋められている。底面は、ほぼ平坦である。底面北半分には、壁に沿って人頭大前後の蝶が並ぶ。遺物は、覆土中から縄文土器片(153~155・158~160・164)、石錘1点(167)、半円状扁平打製石器1点(161)が出土している。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。形態から、土壤墓と考えられる。

#### S K44 土坑(第31図、図版10)

L C55 グリッドに位置する。II層下面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。S I 136・137・340 壁穴住居跡と重複するが、いずれの造構よりも新しい。それらに伴う4基の柱穴を壊して構築されている。平面形は、長軸1.36m×短軸1.23mの円形を呈し、確認面からの深さは0.66mを測る。東壁はほぼ垂直に立ち上がり、他はやや外傾しながら立ち上がる。覆土は、3層に分けられた。1層は3層の上に自然堆積したもの、2層は杉の根による搅乱、3層は人為堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、3層上部から縄文土器2点(162、163)、器台の脚部と思われるもの1点(166)が出土している。構築時期は、出土した土器から縄文時代後期前葉と思われる。形態と出土遺物から、土壤墓と考えられる。

#### S K49 土坑(第31図、図版6)

L B56 グリッドに位置する。II層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。S I 45・143・157・158 壁穴住居跡と重複しているが、いずれの造構よりも新しい。平面形は、長軸1.36m×短軸1.15mのほぼ円形で、確認面からの深さは0.32mを測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は、1層である。人為的に埋められていて、炭化物・焼土とともにかなりの量が含まれている。この炭化物・焼土はS I 143 壁穴



第30図 SK24-27-28-29-34-82 土坑とその出土遺物

住居跡の丸を破壊したときに出たものと考えられる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認状況や覆土から縄文時代後期と思われる。形態から、上墳墓か貯蔵穴と考えられる。

#### S K52 土坑(第31図)

L H47 グリッドに位置する。疊のまとまりによって確認した。S I 30 穫穴住居跡と重複するが、本土坑が新しい。明瞭な掘り込みは、確認できなかったが、平面形は円形で、断面形は「U」字形と思われる。覆土は1層で、人為堆積と思われる。底面は、平坦だったと思われる。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。

#### S K62 土坑(第31図)

L D58・59 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸 0.95m × 短軸 0.80m の楕円形を呈し、確認面からの深さは 0.22m を測る。壁は、大きく外傾しながら立ち上がる。覆土は1層で、自然堆積と思われる。底面は、中華鍋底状を呈する。遺物は覆土中から土器片が4点出土したが、磨滅が著しいため掲載しなかった。構築時期は、確認面の層位から縄文時代後期と思われる。

#### S K79 土坑(第31図)

L H48 グリッドに位置する。Ⅲ層内で黒褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 0.60m の円形で、確認面からの深さは 0.40m を測る。断面形は「U」字形を呈する。覆土は1層で、一気に埋められたと考えられる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(165)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。覆土から土坑と判断したが、柱穴の可能性も否定できない。

#### S K81 土坑(第32図)

L H46、L H47 グリッドに位置する。S I 30 穫穴住居跡の壁面を調査中、壁面で掘り込みを確認した。S I 30 穫穴住居跡と重複する。本土坑が新しい。平面形は、長軸 1.42m × 短軸 1.08m の楕円形を呈し、確認面からの深さ 0.62m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は1層で、一気に埋められている。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中より縄文土器片(168・169・173・174)、両側縁に敲きによる加工痕のある石器1点(171)、磨製石斧1点(172)、石匙1点(182)、石鏃1点(183)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

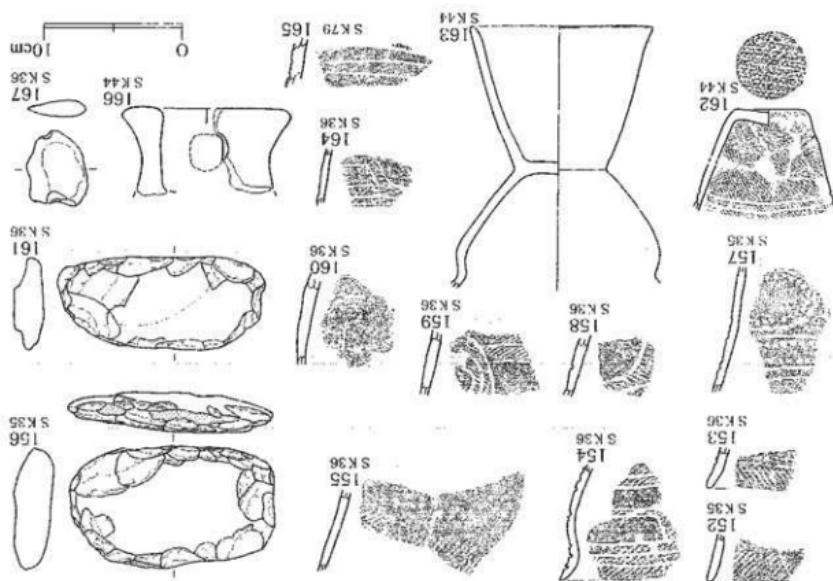
#### S K82 土坑(第30図)

L F50 グリッドに位置する。SK34 土坑を調査中に東側の壁面に掘り込みを確認した。SK34 土坑および柱穴と重複する。柱穴より新しく、SK34 土坑より古い。SK34 土坑に南西側を切られていて、全容は不明であるが、平面形は、直径 0.88m の円形と思われる。壁は、大きく外傾しながら立ち上がる。確認面からの深さは 0.19m を測る。覆土は2層に分けられ、人為堆積と思われる。底面は、平坦である。遺物は、覆土中から縄文時代前期の土器片(149)と後期の土器片7点が出土した。構築時期は、出土した土器片と確認状況から縄文時代後期と思われる。

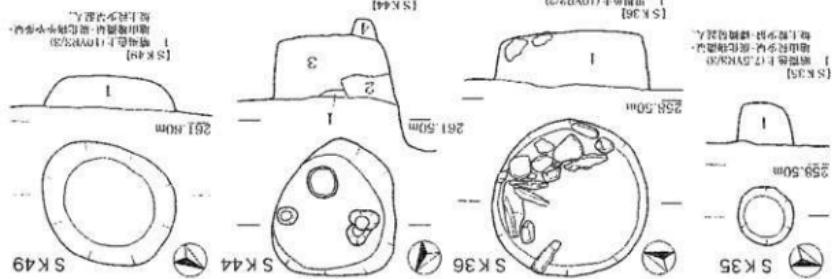
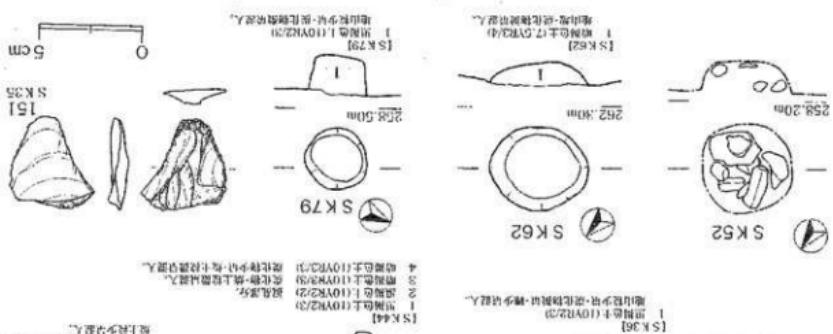
#### S K108 土坑(第32図)

L I 50 グリッドに位置する。地山上で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 1.20m の円形を呈し、確認面からの深さは 0.27m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は1層である。粒子が水平に堆積していることから自然堆積と思われる。底面は、平坦である。遺物は、覆土中より縄文土器片(170)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

第31圖 SK35-36-44-49-52-62-79 土坑乙器物出土遺物



0 2M



第二圖 舊石時代晚期的遺物出土於上層

## SK114 土坑(第32図)

L E 57 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 0.92m の円形である。確認面からの深さは 0.14m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は 2 層で、人為堆積と思われる。中央部に 45cm × 40cm × 10cm の扁平な礫を中心に疊が数個並べられていた。底面は、平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から、縄文時代後期と思われる。

## SK115 土坑(第32図)

L E 57 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 0.88m の円形を呈し、確認面からの深さは 0.14m を測る。壁は、大きく外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、自然堆積と思われる。底面は、中央部がやや低いが、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から凹石 1 点(180)が出土した。構築時期は、覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

## SK116 土坑(第32図)

L G 62 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。2 基の柱穴と重複している。いずれの柱穴よりも新しい。平面形は、直径 0.76m のほぼ円形を呈し、確認面からの深さは 0.53m を測る。断面形は、ビーカー形を呈する。覆土は、5 層に分けられた。第 5 層は人為堆積、それより上位は自然堆積と思われる。第 5 層から、野球ボール大からラグビー・ボール大の礫が 7 個出土した。底面は、平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(175)、磨製石斧 1 点(181)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

## SK128 土坑(第32図)

L H 64 グリッドに位置する。Ⅲ層下面でぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。SK197 土坑および柱穴と重複しているが、いずれの遺構よりも古い。平面形は、直径 0.80m の不整円形で、確認面からの深さは 0.54m を測る。断面形は、ビーカー状を呈するが、一部オーバーハングするところがあり、袋状に近い。覆土は 1 層で、土とともに拳大から人頭大の礫が埋められたものと思われる。底面は、ほぼ平坦であるが、中央部がやや凹む。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。形態から、貯蔵穴または上墳墓と考えられる。

## SK129 土坑(第32図)

L G 64 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸 0.60m × 短軸 0.53m のほぼ円形を呈し、確認面からの深さは 0.25m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、上位で掌大の礫 1 個が出土した。人為堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

## SK159 土坑(第32図、図版7)

L A 55 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸 0.98m × 短軸 0.90m のほぼ円形を呈し、確認面からの深さは 0.56m を測る。断面形は、ビーカー形を呈する。覆土は 1 層で、人為堆積と思われる。底面は、堅くしまり、ほぼ平坦である。遺物は、縄文時代中期前葉(177)と後期(176・178・179)の土器片、石鏃 1 点(185)、削器 2 点(184・186)が出土した。構築時期は、確認面と出土した土器から縄文時代後期前葉と思われる。形態から、貯蔵穴または上墳墓と考えられる。

## SK170 土坑(第33図)

L F 50 グリッドに位置する。調査区外との境界の断面に掘り込みを確認した。半分は調査区外で



第32図 SK81-108-114-115-116-128-129-159 土坑とその出土遺物

あるが、平面形は直徑 0.73m の円形と考えられる。確認面からの深さは 0.53m を測る。断面形は「U」字形を呈する。覆土は、2 層に分けられた。粒子がほぼ平坦に堆積していることから、自然堆積と思われる。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。

#### S K175 土坑(第 33 図)

L H50・51 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直徑 0.96m の円形を呈し、確認面からの深さは 0.18m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、自然堆積と思われる。底面は、やや中央部が凹むが、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

#### S K176 土坑(第 33 図)

L G51、L H51 グリッドに位置する。Ⅲ層中で黒褐色土の落ち込みとして確認した。柱穴と重複する。本土坑が古い。平面形は、直徑 0.68m の円形で、確認面からの深さは 0.18m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、自然堆積と思われる。第 2・3 層は、柱穴の覆土である。底面は、平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位から縄文時代後期と思われる。

#### S K177 土坑(第 33 図)

L G52 グリッドに位置する。Ⅲ層中で黒褐色土の落ち込みとして確認した。柱穴 2 基および S K191 土坑と重複するが、いずれの造構よりも古い。平面形は、直軸 0.99m の楕円形で、確認面からの深さは 0.20m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層(第 3 層)で、自然堆積と思われる。なお、第 1・2 層は S K191 土坑の覆土である。底面は、中央部がやや低いが、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位から縄文時代後期と思われる。

#### S K191 土坑(第 33 図)

L G52 グリッドに位置する。Ⅲ層中で黒褐色土の落ち込みとして確認した。S K177 土坑と重複する。本土坑が新しい。平面形は、直徑 0.61m の円形で、確認面からの深さは 0.38m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は 2 層で、自然堆積と思われる。S K177 土坑より地山粒子の割合が高い。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位から縄文時代後期と思われる。

#### S K196 土坑(第 33 図)

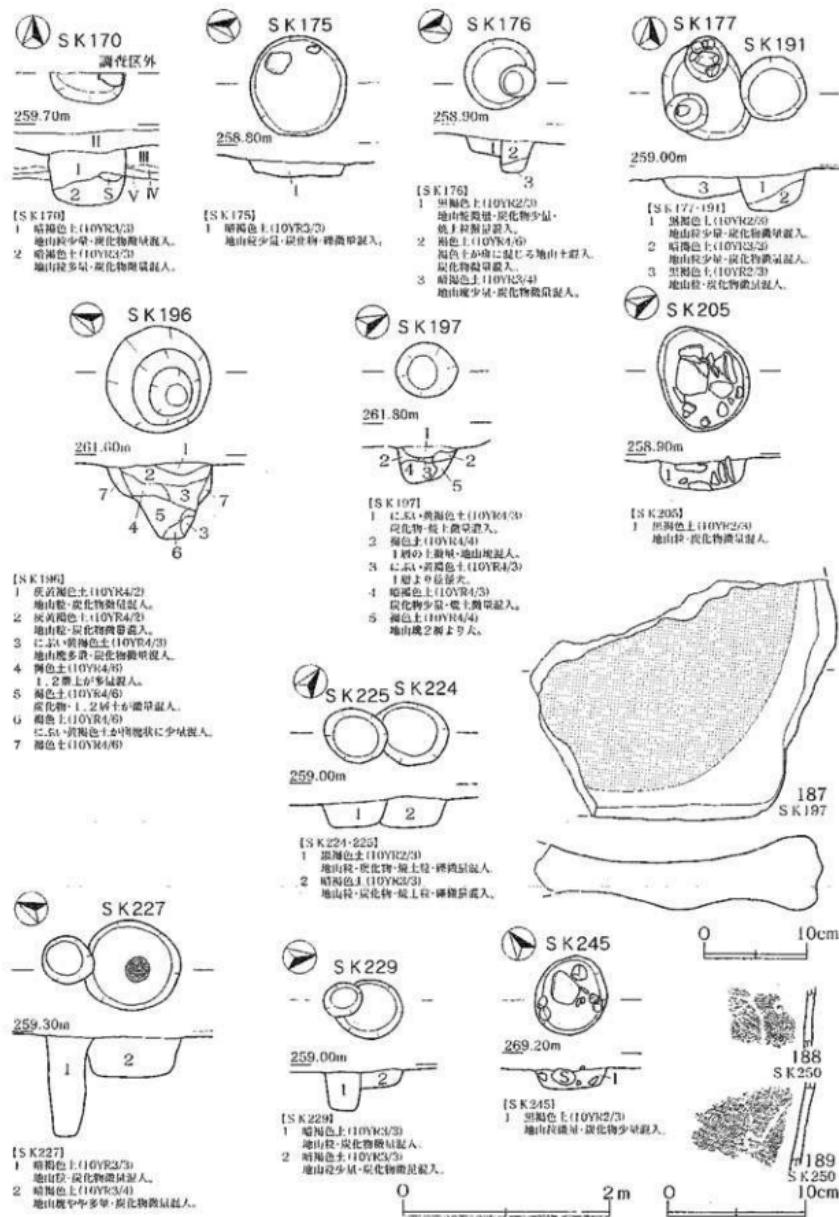
L H63 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で灰黄褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直徑 1.00m の円形で、確認面からの深さは 0.73m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は 7 層で、自然堆積と思われる。底面は狭く、中央が凹む。遺物は、2 層覆土中から縄文土器片が 2 点出土したが、磨滅が著しく掲載しなかった。構築時期は、出土遺物から縄文時代後期と思われる。

#### S K197 土坑(第 33 図)

L H63・64 グリッドに位置する。Ⅲ層下面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直徑 0.60m の円形で、確認面からの深さは 0.35m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は 5 層で、自然堆積と思われる。底面は南西側が低いが、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片 30 点、石皿破片 1 点(187)が出土した。土器片は、いずれも磨滅が著しく掲載しなかった。構築時期は、出土遺物から縄文時代後期と思われる。

#### S K205 土坑(第 33 図)

L H53 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で、黒褐色土の落ち込みと表出する礫で確認した。平面

第33図 SK 170-175-176-177-191-196-197-205-224-225-227-229-245-250  
土坑とその出土遺物

形は、長軸 1.03m × 短軸 0.84m の楕円形を呈し、確認面からの深さは 0.30m を測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は 1 層である。礫は意図的に埋められたと思われる。底面は中央部が低いが、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

#### S K224 土坑(第 33 図)

L I 52、L J 52 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。S K225 土坑と重複するが、本土坑が古い。平面形は、長軸 0.72m × 短軸 0.61m の楕円形で、確認面からの深さは 0.15m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、自然堆積と思われる。底面は平坦である。復土中より縄文土器片が 9 点出土したが、磨滅が著しく掲載しなかった。構築時期は、出土遺物から縄文時代後期と思われる。

#### S K225 土坑(第 33 図)

L J 52 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。S K224 土坑と重複するが、本土坑が新しい。平面形は、直径 0.55m の円形で、確認面からの深さは 0.24m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、自然堆積と思われる。底面は、平坦である。復土中から縄文土器片数点が出土したが、磨滅が著しく掲載しなかった。構築時期は、確認面の層位と出土遺物から縄文時代後期と思われる。

#### S K227 土坑(第 33 図)

L H 55、L I 55 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。柱穴と重複するが、本土坑が古い。平面形は、直径 0.87m のほぼ円形で、確認面からの深さは 0.39m を測る。壁はやや外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、一気に埋められたと思われる。底面は、平坦である。中央付近に炭の薄い堆積が見られ、火を使用した痕と考えられる。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

#### S K229 土坑(第 33 図)

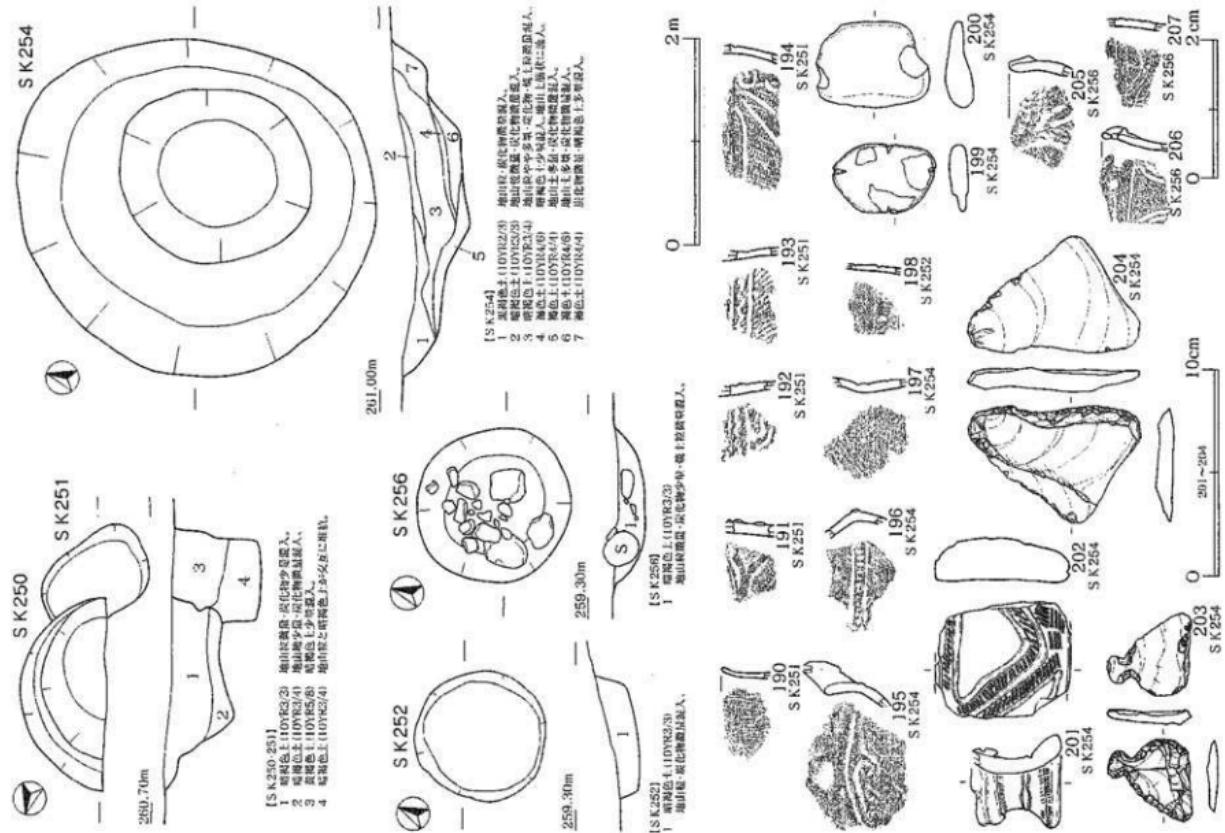
L I 54 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。柱穴と重複している。本土坑が古い。平面形は、直径 0.58m の円形で、確認面からの深さは 0.17m を測る。壁はやや外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

#### S K245 土坑(第 33 図)

L I 55 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で、黒褐色土の落ち込みと表出する礫で確認した。S I 202 穴立柱跡と重複するが、本土坑が新しい。平面形は、長軸 0.76m × 短軸 0.69m の楕円形で、確認面からの深さは 0.13m を測る。壁は外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、大小の礫を含む。人為堆積と思われる。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

#### S K250 土坑(第 33・34 図)

L I 59 グリッドに位置する。道路の法面で掘り込みを確認した。S K251 土坑と重複するが、本土坑が新しい。道面上に削られ半分ほどしか調査できなかったが、平面形は、直径 1.54m の円形を呈し、確認面からの深さは 0.66m を測る。壁は南東側がやや外傾し、北東側が大きく外傾するが、開口部



第34図 SK 250-251・252・254-256 土坑とその出土遺物

近くではさらに傾きが大きくなり緩やかに立ち上がる。覆土は、2層に分けられた。第2層は人為堆積、第1層は自然堆積と思われる。底面はほぼ平坦であるが、北側は低い。遺物は、覆土中から縄文土器片(188・189)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

#### SK251 土坑(第34図)

L I 58・59 グリッドに位置する。道路の法面に掘り込みを確認した。SK250 上坑と重複するが、本土坑が古い。平面形は、長軸 1.15m × 短軸 0.76m の楕円形で、確認面からの深さは 0.83m を測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は、2層(第3・4層)に分けられた。第3層はほとんど地山である。第4層は地山と暗褐色土が交互に堆積している。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(190～194)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

#### SK252 土坑(第34図)

L J 57 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。SI 261 上坑と重複する。本土坑が新しい。平面形は、ほぼ直径 1.3m の円形である。確認面からの深さは 0.43m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は1層で、自然堆積と思われる。底面は、中央部が低いが、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(198)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

#### SK254 土坑(第34図)

L H 59・60 グリッドに位置する。Ⅲ層中に黒褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径 3.2m の円形で、確認面からの深さは 0.53m を測る。壁は、途中で段差を持ち、大きく外傾しながら立ち上がる。覆土は7層に分けられた。自然流入である。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(195～197・201)、腕輪形土製品1点(202)、石匙1点(203)、搔器1点(204)、石錐2点(199・200)が出土した。201は、異形土器の台部と思われる。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

#### SK256 土坑(第34図)

MA 58・59 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。SQ 08 配石遺構と重複する。本土坑が古い。平面形は、ほぼ直径 1.48m の円形で、確認面からの深さは 0.30m を測る。壁は、大きく外傾しながら立ち上がる。覆土は1層で、拳大から人頭大の礫が混在する。意図的に埋められたものと思われる。遺物は、覆土中から縄文土器片(205～207)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われ、形態から上墳墓の可能性も考えられる。

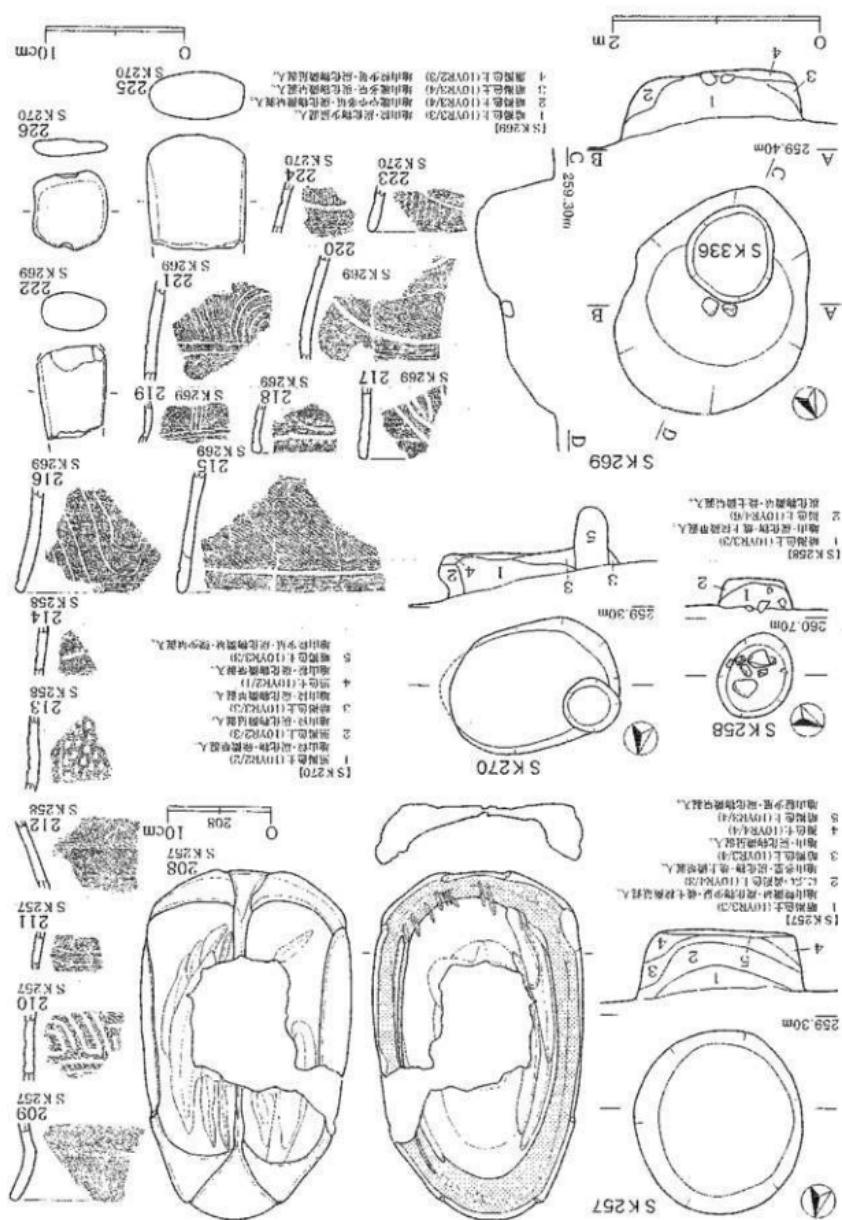
#### SK257 土坑(第35図)

MA 63・MB 63 グリッドに位置する。Ⅲ層中に暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、ほぼ直径 1.63m の円形で、確認面からの深さは 0.63m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は5層で、自然堆積と思われる。底面は、地山の礫が出ているがほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(209～211)、石皿1点(208)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。形態から、袋状土坑だった可能性も考えられる。

#### SK258 土坑(第35図)

MC 63 グリッドに位置する。Ⅲ層中に暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸 0.85m × 短軸 0.69m の楕円形を呈し、確認面からの深さは 0.30m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は2層で、拳大から人頭大の角礫が、底部から開口部まで雑然と混入している。第2層

第35圖 SK257-258-269-270-336 土坑墓出土遺物



第2圖 鎏金銅錢幣及鐵鏟出土遺物

は地山上の堆積、第1層は人為的に埋められたものと思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(212~214)が出土した。212は、台付鉢の台部と思われる。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S K269 土坑(第35図)

MA62、MB62 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。SK336土坑と重複するが、本土坑が古い。平面形は、長軸2.3m×短軸1.9mの不整橢円形を呈し、確認面からの深さは0.45mを測る。これは開口部の崩落によるもので、本来は円形と思われる。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は4層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(215~221)、磨製石斧1点(222)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。形態から、袋状土坑だった可能性も考えられる。

#### S K270 土坑(第35図)

MA61、MB61 グリッドに位置する。Ⅲ層中で黒褐色土の落ち込みとして確認した。柱穴と重複するが、本土坑が古い。平面形は、長軸1.65m×短軸1.23mの楕円形を呈し、確認面からの深さは0.41mを測る。壁は、外傾しながら立ち上がるが、東側の一部はオーバーハングする。覆土は1層で、自然堆積と思われる。底面は、やや凹凸はあるがほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(223・224)、磨製石斧1点(225)、石鍤1点(226)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S K272 土坑(第36図)

MA61 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。柱穴と重複するが、本土坑が古い。平面形は、長軸0.85m×短軸0.65mの楕円形を呈し、確認面からの深さは0.25mを測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は1層で、自然堆積と思われる。底面は、平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

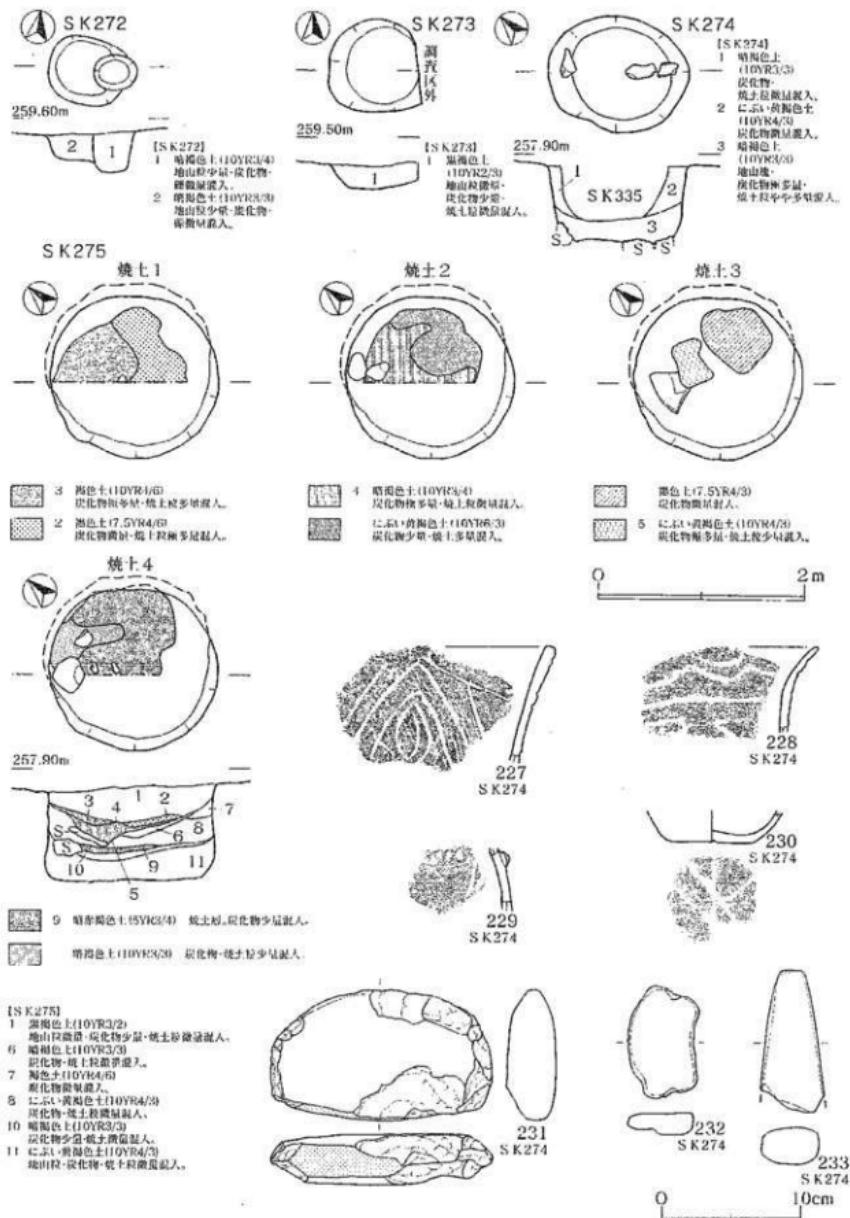
#### S K273 土坑(第36図)

MA62 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。東側一部は、調査区外であるが、平面形は、ほぼ直径0.87mの円形と思われる。確認面からの深さは0.22mを測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は1層で、自然堆積と思われる。底面は、凹凸があるが、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

#### S K274 土坑(第36図)

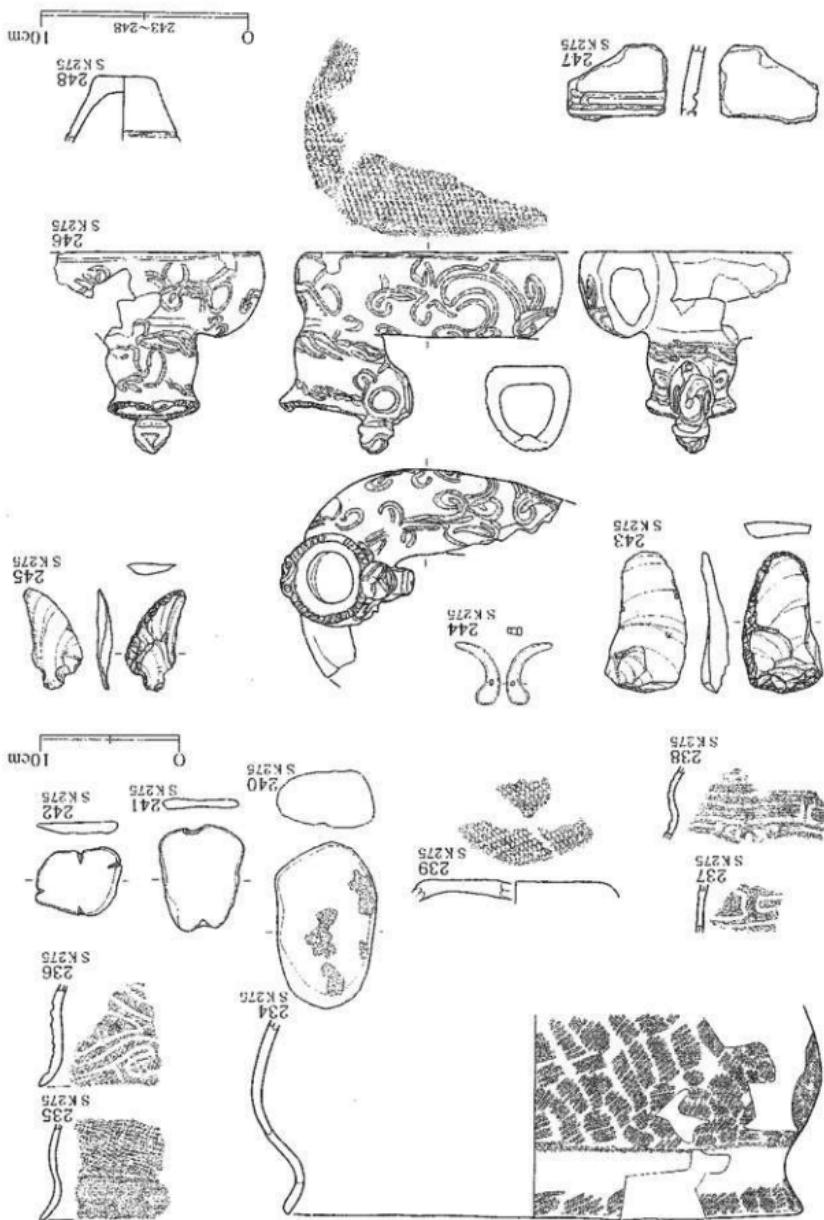
MG60 グリッドに位置する。Ⅲ層中で円形の礫のまとまりとその周囲の暗褐色土の落ち込みとして確認した。SK335土坑と重複しているが、本土坑の中央部を壊してSK335土坑が構築されている。平面形は、長軸1.36m×短軸1.12mの円に近い楕円形で、確認面からの深さは0.70mを測る。断面形は、「U」字形を呈する。覆土は3層で、炭化物・焼土粒・地山塊が多く入っている。人為堆積と思われる。第3層には、多量の炭の堆積があり、燃り返し火をいたたいた痕と判断した。底面は、地山礫層のため凹凸はあるが、ほぼ平坦である。遺物は、覆土第3層から縄文土器片(227~230)、石鍤1点(232)、磨製石斧1点(233)、半円状扁平打製石器1点(231)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S K275 土坑(第36・37図、図版7・10)



第36図 SK272・273・274・275 土坑とその出土遺物

圖37 SK275 土坑出土遺物



MII60 グリッドに位置する。II層下で黒褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径1.62m の円形で、確認面からの深さは0.91m を測る。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がるが、北側約半分は底面から3 分の1 の高さからオーバーハングする。底面は、ほぼ平坦である。覆土は、9 層に分けられた。第1 層は自然堆積、他は人為堆積と考えられる。壁面に多量の炭化物の付着が見られることと、十坑内で、4 面の焼上の広がりが確認できたことから、内部で少なくとも4 度にわたり火が焚かれたと考えられる。火を焚いた時期は、第11 層の堆積後と第8 層の堆積後の2 時期に大別され、第8 層の堆積後は3 度の使用が認められる。人頭大の礫も数個入っていたが、火を受けて赤変したもののが多かった。遺物は、覆土中から縄文上器片(234~239・246~248)、凹石1点(240)、石鍤2点(241・242)、削器1点(243)、石匙1点(245)、垂飾品1点(244)が出土している。246は、丁寧に研磨された環状注口土器である。構築時期は、出土した上器片から縄文時代後期前葉と思われる。遺跡の北西端の沢沿いにであることや内部で繰り返し火を焚いていることから、特別な用途があったと思われる。

#### S K276 土坑(第38図)

MB62、MC62 グリッドに位置する。III層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径1.06m の円形で、確認面からの深さは0.44m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は2 層に分けられた。第1 層は自然堆積、第2 層は人為堆積と思われる。底部に人頭大の角礫が1 個入っていた。底面は、中央部がやや凹むが、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

#### S K278 土坑(第38図)

MC64 グリッドに位置する。III層中で暗黒褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸1.05m × 短軸0.92m の円に近い楕円形で、確認面からの深さは0.32m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は1 層で、上位で人頭大の礫が2 個出土した。人為堆積と思われる。底面は、中央部がやや凹む。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から、縄文時代後期と思われる。

#### S K279 土坑(第38図)

MD64 グリッドに位置する。III層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。SK280 土坑と重複するが、本土坑が新しい。平面形は、直径0.72m の円形で、確認面からの深さは0.09m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は1 層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から、縄文時代後期と思われる。

#### S K280 土坑(第38図)

MD64 グリッドに位置する。III層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。SK279・341 土坑と重複するが、SK279 土坑より古く、SK341 土坑より新しい。平面形は、直径0.92m の円形で、確認面からの深さは0.14m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は1 層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文上器片が32点出土したが、磨滅が著しくため掲載しなかった。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S K282 土坑(第38・39図)

L 163 グリッドに位置する。III層上面でぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、

長軸 0.87m × 短軸 0.63m の楕円形で、確認面からの深さは 0.28m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、人為堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(249)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S K283 土坑(第 38・39 図)

L J63 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。調査区境界に位置しているため南側半分は未調査であるが、平面形は直徑 1.03m の円形と思われる。確認面からの深さは 0.56m を測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がると思われるが、北側の壁は底部付近は内傾しながら、開口部付近はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 4 層に分けられた。最下層(第 4 層)は人為堆積、それ以外は自然堆積と思われる。底面は平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(250)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と考えられる。

#### S K284 土坑(第 38・39 図)

L J63・64、MA63 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直徑 1.65m の円形で、確認面からの深さは 0.40m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、炭化物・焼土粒が多量に混入していた。人為堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(251)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S K285 土坑(第 38・39 図、図版 10)

L I64 グリッドに位置する。Ⅲ層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。S K286 上坑と重複している。本土坑が新しい。平面形は、直徑 1.08m の円形で、確認面からの深さは 0.30m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器 1 点(260)が出土した。構築時期は、出土した土器から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S K286 土坑(第 38・39 図)

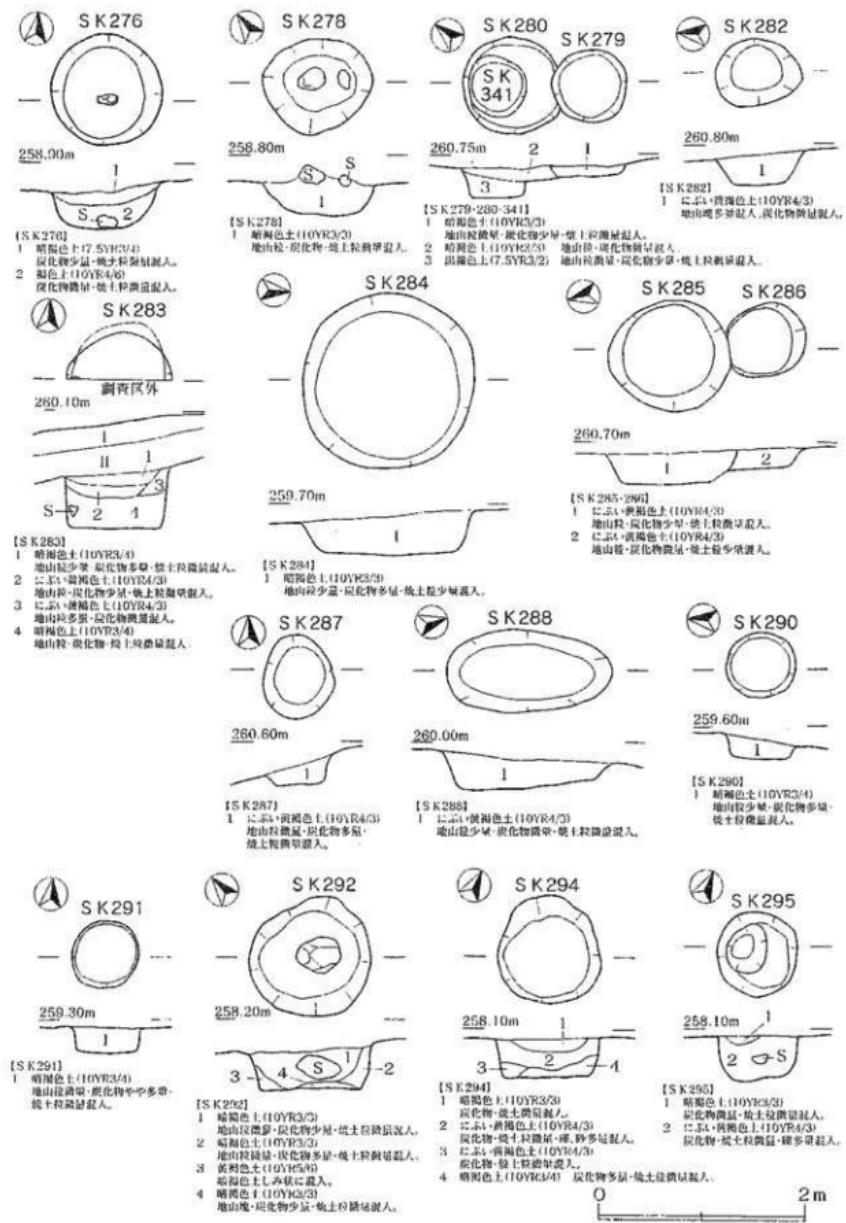
L I64 グリッドに位置する。Ⅲ層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。S K285 上坑と重複するが、本土坑が古い。平面形は、直徑 0.70m の円形で、確認面からの深さは 0.17m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(252)、石棒 1 点(256)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S K287 土坑(第 38・39 図)

L I64・65 グリッドに位置する。Ⅲ層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸 0.82m × 短軸 0.63m の楕円形で、確認面からの深さは 0.28m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、自然堆積と思われる。底面は、斜面のせいか西側がやや下がるが、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(253・254)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S K288 土坑(第 38・39 図)

L J64 グリッドに位置する。Ⅲ層下面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸 1.60m × 短軸 0.80m の楕円形で、確認面からの深さは 0.37m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、人為堆積と思われる。底面は、南側が低く、北側が高くなっているが、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(255)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄



第38図 SK276-278-279-280-282-283-284-285-286-287-288-290-291-292-294-295-341 土坑

文時代後期前葉と思われる。形態から、土壤墓と考えられる。

#### S K290 土坑(第38図)

MA63 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径0.64m の円形で、確認面からの深さは0.23m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は1層で、人為堆積と思われる。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

#### S K291 土坑(第38図、図版7)

MA64 グリッドに位置する。Ⅲ層中上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直徑0.64m の円形である。確認面からの深さは0.23m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は1層で、人為堆積と思われる。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

#### S K292 土坑(第38・39図)

MF61 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直徑1.16m のほぼ円形で、確認面からの深さは0.40m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は4層に分けられた。第1層は人為堆積、他は自然堆積と思われる。中央部に直徑約40cm の礫が入っていた。炭化物の混入量が多い。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(257)が出土した。構築時期は、出土した土器片から、縄文時代後期前葉と思われる。

#### S K294 土坑(第38・39図)

MF61 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直徑0.99m のほぼ円形で、確認面からの深さは0.38m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は4層に分けられた。炭化物・礫・砂が大量に混入している。第1層は自然堆積、他は人為堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(258・259)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S K295 土坑(第38図)

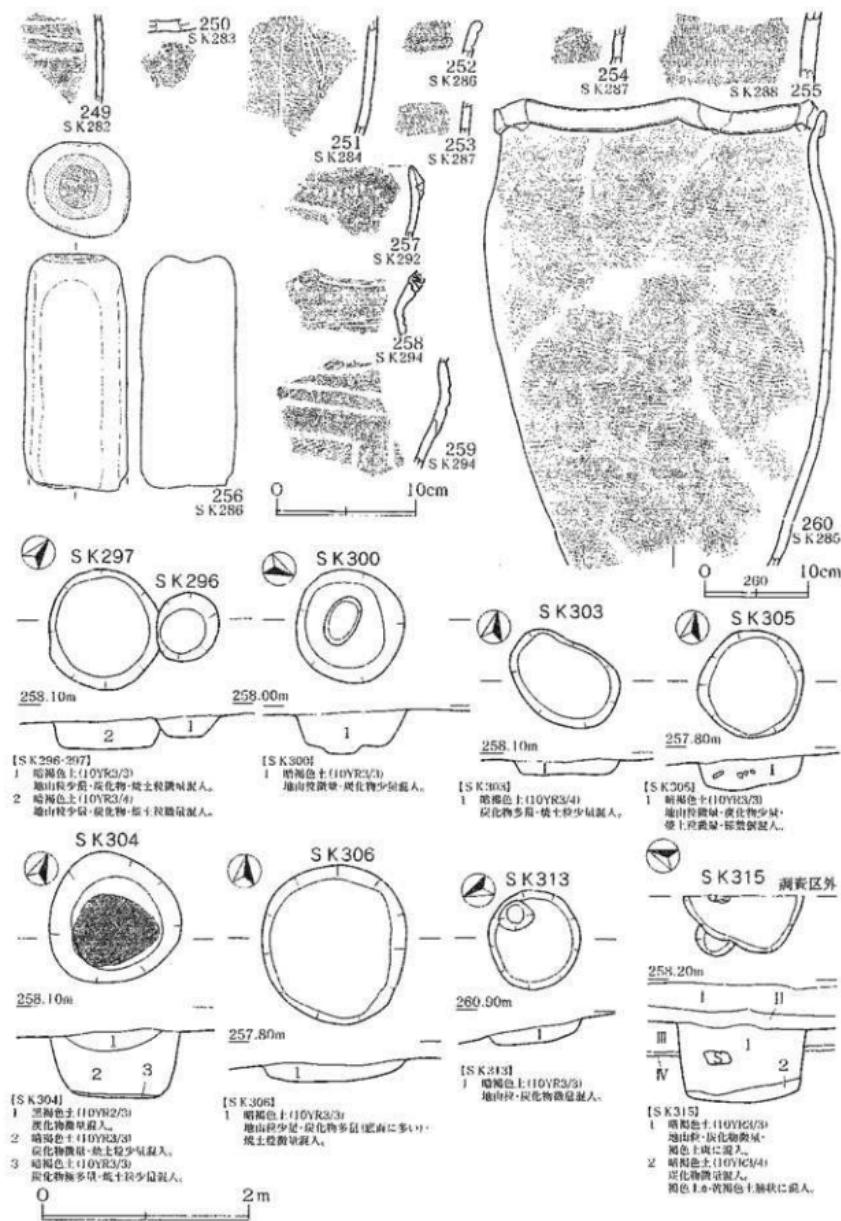
MF61 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直徑0.76m の円形で、確認面からの深さは0.43cm を測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は、2層に分けられた。礫が大量に混入していることから人為堆積と思われる。底面は、東側はほぼ平坦であるが、西側は凹んでいる。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。覆土の状況から上坑と判断したが、柱穴の可能性もある。

#### S K296 土坑(第39・40図)

ME60 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。SK297 土坑と重複する。本土坑が新しい。平面形は、直徑0.66m のほぼ円形で、確認面からの深さは0.20m を測る。壁は、大きく外傾しながら立ち上がる。覆土は1層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土から縄文土器片3点、石籠の未製品1点(261)が出土した。土器片は、磨滅が著しく掲載しなかった。構築時期は、確認面の層位と出土遺物から縄文時代後期と思われる。

#### S K297 土坑(第39図)

ME60、MF60 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。SK296 土坑



第39図 SK 282-283-284-285-286-287-288-290-294-296-297-300-303-304-305-306-313-315 土坑とその出土遺物

と重複する。本土坑が古い。平面形は、直徑 1.16m のほぼ円形で、確認面からの深さは 0.28m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

#### S K300 土坑(第 39 図)

M F60 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直徑 1.09m のほぼ円形で、確認面からの深さは 0.38m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、人為堆積と思われる。底面は、中央部に長径 0.48m、短径 0.32m、深さ 0.06m の楕円形の落ち込みがある。それ以外は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

#### S K303 土坑(第 39 図)

M E61 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸 1.11m × 短軸 0.80m の不整椭円形で、確認面からの深さは 0.13m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、炭化物・焼土粒が多量に混入していた。人為堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

#### S K304 土坑(第 39 図、図版 10)

M G60 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直徑 1.28m の円形で、確認面からの深さは 0.64m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は 3 層に分けられた。第 1 層は自然堆積、第 2・3 層は人為堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。底面付近に炭化物の広がりがあり、その炭化物のまとまり具合から、内部で火を焚いた痕と考えられる。遺物は、第 2 層下面から縄文土器(262・269)が出土した。262 は異形土器で、土器底面内側の中央部に突起が付き、それに外側から穿孔している。構築時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S K305 土坑(第 39 図)

M H59 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直徑 1.01m の円形で、確認面からの深さは 0.30m を測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、拳大の礫が 10 個ほど混入していた。人為堆積と思われる。底面は西側がやや下がるが、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(263～265)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S K306 土坑(第 39 図)

M H59 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。柱穴と重複するが、本土坑が新しい。平面形は、直徑 1.53m のほぼ円形で、確認面からの深さは 0.18m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層で、底面付近に炭化物が多量に混入していた。人為堆積と思われる。底面は、中火がやや低いが、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

#### S K313 土坑(第 39 図)

L G58 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。柱穴と重複するが、本土坑が古い。平面形は、直徑 0.88m の円形で、確認面からの深さは 0.16m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は 1 層である。底面は中央部がやや凹むが、ほぼ平坦である。本土坑のもの



と確認できた遺物はない。構築時期は、確認面の状況から縄文時代後期と思われる。

#### S K315 土坑(第39図)

L F56 グリッドに位置する。調査区外と境界の断面で掘り込みを検出して確認した。柱穴と重複する。本土坑が新しい。半分は調査区外であるが、平面形は、直径1.10mの円形またはそれに近い楕円形と思われ、確認面からの深さは0.75mを測る。断面形は、「U」字形を呈する。覆土は2層に分けられた。第1層は人為堆積、第2層は自然堆積と思われる。底面は、中央部がやや凹むが、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。

#### S K325 土坑(第40図)

M A65 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径0.68mの円形で、確認面からの深さは0.13mを測る。壁は、やや大きく外傾しながら立ち上がる。覆土は1層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位から縄文時代後期と思われる。

#### S K326 土坑(第40図)

M A65 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径0.75mの円形で、確認面からの深さは0.17mを測る。壁は、やや大きく外傾しながら立ち上がる。覆土は1層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位から縄文時代後期と思われる。

#### S K327 土坑(第40図)

L J 64 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸1.14m×短軸1.05mの円に近い楕円形で、確認面からの深さは0.13mを測る。壁は、大きく外傾しながら立ち上がるが、北西側だけはほぼ垂直に立ち上がる。覆土は1層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(266・267)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。形態から土壙墓と考えられる。

#### S K330 土坑(第40図)

M H59 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、直径0.90mのほぼ円形で、確認面からの深さは0.10mを測る。覆土は2層に分けられた。第1層は人為堆積、第2層は自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から縄文時代後期と思われる。

#### S K332 土坑(第40図)

M F62 グリッドに位置する。Ⅲ層下面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸1.10m×短軸0.95mの円に近い楕円形で、確認面からの深さは0.28mを測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は2層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(268)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期と思われる。

#### S K333 土坑(第40図、図版7)

M C63、M D63 グリッドに位置する。Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、長軸1.02m×短軸0.92mの円に近い楕円形で、確認面からの深さは0.36mを測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は2層に分けられた。挙火から人頭火の角礫が底部から開口部付近まで多数入っ

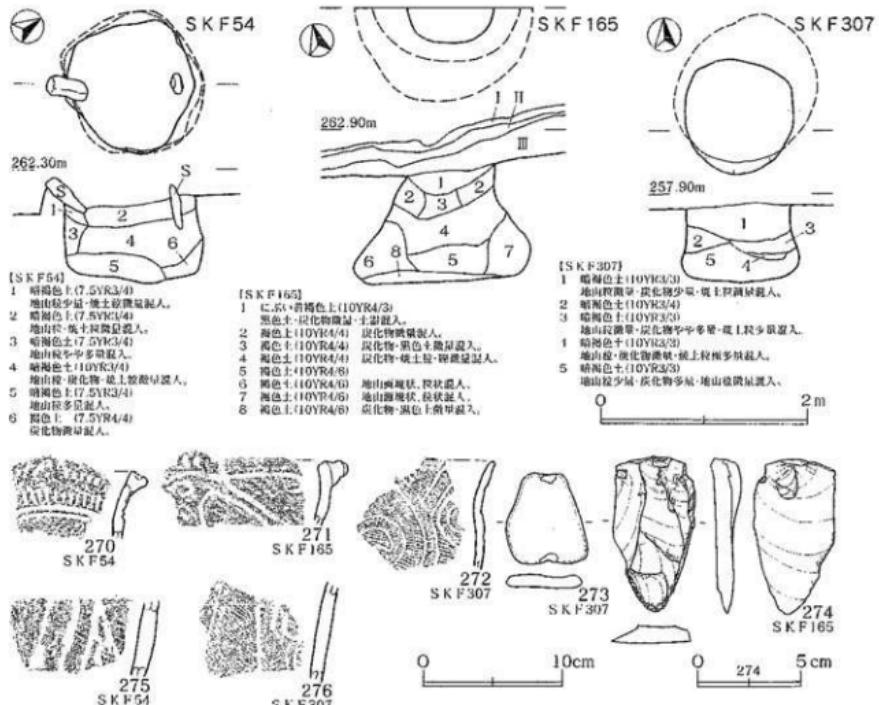
ており、人為的に埋められたと思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位と覆土の状況から繩文時代後期と思われる。

## SK 335 土坑(第40図)

MG60、MH60 グリッドに位置する。SK 274 土坑の精査中、断面で確認した。SK 274 上坑を壊してその中央部に構築されている。平面形は、長軸 1.05m × 短軸 0.85m の円に近い楕円形で、確認面からの深さは 0.53m を測る。壁は、外傾しながら立ち上がる。覆土は 2 層に分けられた。第 1・2 層とともに、炭と親指爪大の円礫が混入していて意図的に埋められたと思われる。底面は、ほぼ平坦であるが、しまりが弱い。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認状況から繩文時代後期と思われる。覆土のしまりが弱いことから土坑と判断したが、柱穴の可能性も否定できない。

## SK 336 土坑(第35図)

MA62、MB62 グリッドに位置する。SK 269 土坑の半断面中に、底面近くでその落ち込みを確認した。SK 269 土坑と重複する。確認状況からは、本土坑が古いと言えるが、その新旧は不明である。平面形は、直徑 0.88m の円形で、確認できた深さは 0.25m である。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は、SK 269 土坑の第 1 層とはほぼ同じであった。底面は、北東側がやや高いがほぼ平坦である。本土坑のもの



第41図 SK F54・165・307 フラスコ状・袋状土坑とその出土遺物

と確認できた遺物はない。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。

#### S K338 土坑(第40図)

MA60 グリッドに位置する。北西側は、昨年(1997年)の調査で埋設土器を掘り上げたところで、凹んでいた。SKP226柱穴様ピットを完掘中、壁に掘り込みと礫を検出して確認した。SKP226柱穴様ピットと重複する。本土坑が古い。平面形は、推定長軸1.2m×短軸0.93mの楕円形で、確認面からの深さは0.20mを測る。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。底面は、平坦である。本土坑のものと確認できた遺物はない。構築時期は、確認状況と覆土から縄文時代後期と思われる。形態から上墳墓と思われる。

#### S K341 土坑(第38図)

MD64 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。SK280土坑と重複する。本土坑が古く、SK280土坑に上部を壊されている。現状で確認できた平面形は、直径0.56mの円形で、確認面からの深さは0.28mである。壁は、やや外傾しながら立ち上がる。覆土は1層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。本土坑のものと確認できた遺物はない。構築時期は、確認面の層位から縄文時代後期と思われる。

#### 4 フラスコ状・袋状土坑

##### S K F54 袋状土坑(第41図)

LD59、LE59 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で疊の刺さった暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は、開口部が直径1.50mの円形で、底面は長軸1.65m×短軸1.40mの円に近い楕円形である。確認面からの深さは0.80mを測る。断面形は、袋状である。覆土は6層で、人為堆積と思われる。北東側と南西側にそれぞれ人頭大を超える疊が立てられている。遺物は、第2・4層中から縄文土器片(270・275)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。形態から土墳墓と考えられる。

##### S K F165 フラスコ状土坑(第41図)

LF64 グリッドに位置する。IV層上面でぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。調査区境界に位置するため南側半分の調査であるが、平面形は、開口部直徑0.83m、底面直徑1.70mの円形と推測される。確認面からの深さは1.06mを測る。断面形は、フラスコ状を呈する。覆土は8層で、自然堆積と思われる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、第1層から縄文土器片(271)、削器1点(274)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

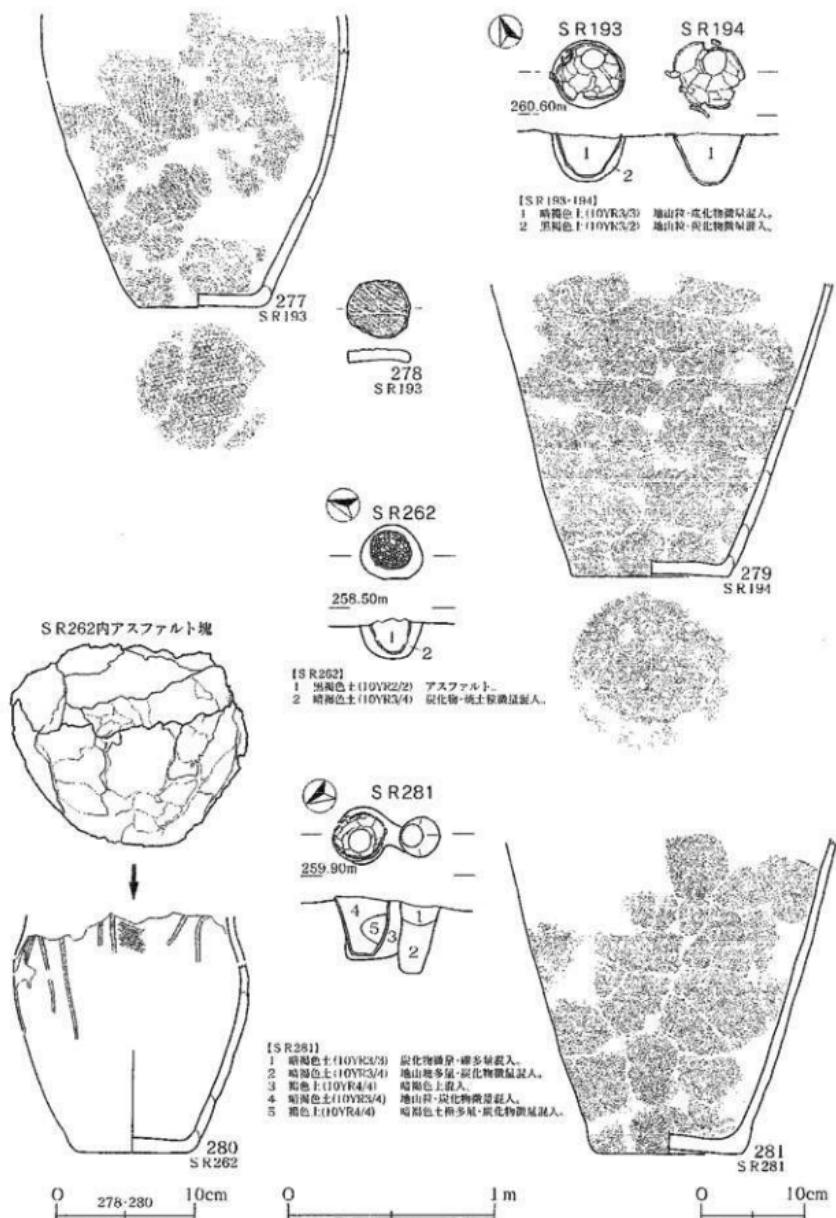
##### S K F307 袋状土坑(第41図、図版7)

MH61 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で暗褐色土の円形プランとして確認した。開口部は直徑1.12mのはば円形で、底面は長軸1.44m×短軸1.28mの楕円形である。確認面からの深さは0.76mを測る。断面形は、袋状である。覆土は5層に分けられた。第4・5層は人為堆積、それ以外は自然堆積と思われる。底面は、中央がやや低いが、ほぼ平坦である。遺物は、覆土中から縄文土器片(272・276)、石錐1点(273)が出土した。構築時期は、出土した土器片から縄文時代後期前葉と思われる。

#### 5 土器埋設遺構

##### S R193 土器埋設遺構(第42図、図版7・10)

L G57、L II57 グリッドに位置する。SQ172配石遺構の精査中に検出した。SQ172配石遺構と重複する。新旧関係は不明であるが、同配石遺構を構成する礫群の間に埋設されていることから、古いの存在を知ることのできるほど近いときに成立したか、同時であると思われる。また、確認状況と



第42図 SR193・194・262・281 土器埋設遺構とその出土遺物

土層から S R194 上器埋設造構とは同時に存在したと思われる。掘り方規模は、開口部径 33cm、底面径 15cm、深さ 23cm で、埋設土器(277)は、底径 11cm、口徑 20cm、高さ 20cm の口縁部を欠く深鉢形土器であった。埋設土器以外の遺物は、上器の内部から出土した円盤状土製品 1 点(278)である。覆土は、土器内と掘り方で 2 層に分けられた。時期は、出土した土器から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S R194 土器埋設造構(第 42 図、図版 7・10)

L G57 グリッドに位置する。S Q172 配石造構の精査中に検出した。S Q172 配石造構と重複する。新旧関係は不明であるが、同配石造構を構成する礫群の間に埋設されていることから、互いの存在を知ることのできるほど近いときに成立したか、同時であると思われる。また、確認状況と土層から S R193 土器埋設造構とは同時に存在したと思われる。掘り方は検出できなかったが、ほとんど土器と同じ大きさと思われる。土器(279)は、底径 12cm、口徑 33cm、高さ 24cm の口縁部を欠く深鉢形土器である。埋設土器以外の遺物は出土しなかった。覆土は、上器内の 1 層のみである。時期は、出土した土器から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S R262 アスファルト入り土器埋設造構(第 42 図、図版 7・10)

MD63 グリッドに位置する。造構検出作業中、Ⅲ層で埋設土器とその内部にあるアスファルトを検出し確認した。S 1321 穹穴住居跡の床面を掘り込んで埋設されていたことから、S 1321 穹穴住居跡と同時に、本造構が新しい。掘り方規模は、開口部径 28cm、底面径 16cm、深さ 18cm を測る。覆土は、土器内アスファルトと掘り方の 2 層に分けられた。上器(280)は、現存部分で、底径 9cm、開口部径 16cm、高さ 18cm の上部を欠する深鉢形土器である。正位埋設で、内部にはアスファルトが詰められていたが、油分が揮発し、ブロック状に固結していた。総重量は、3,580g で、アスファルトだけの重量は、2,490g であった。その他の遺物は出土しなかった。時期は、出土した土器から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S R281 土器埋設造構(第 42 図、図版 7・11)

L H56 グリッドに位置する。道路のため上部は削平されていたが、地山上で正立する土器を検出して確認した。掘り方規模は、開口部径 28cm、底面径 13cm、深さ 31cm である。5cm ほど離れた南側に同時に存在したと思われる柱穴(開口部径 20cm、底面径 11cm、深さ 33cm)がある。土器は、底径 12cm、高さ 27cm の上部を欠す深鉢形土器である(281)。覆土は、土器と掘り方で 3 層、柱穴を 2 層に分層した。土器には地山塊と小さな礫が詰められていた。埋設土器以外の遺物は出土しなかった。時期は、出土した土器から縄文時代後期と思われる。

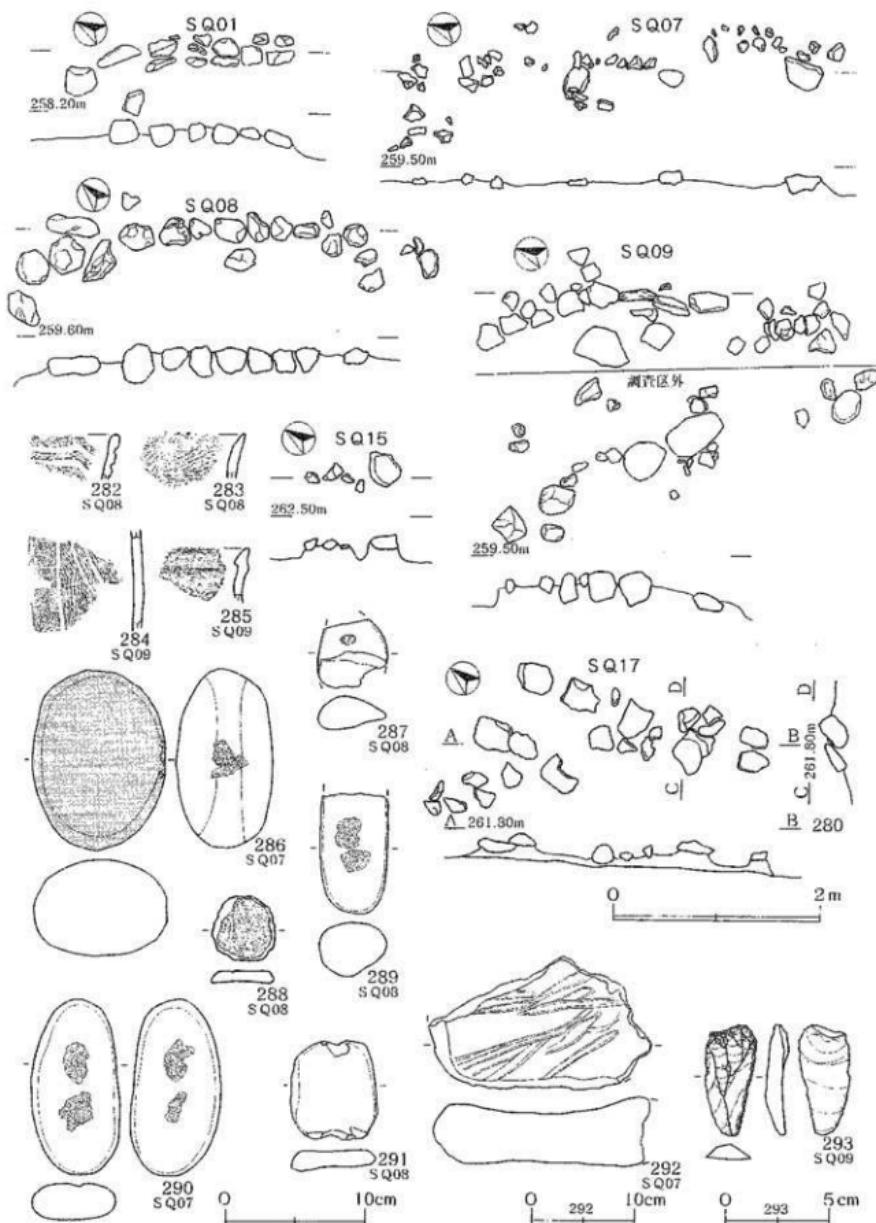
### 6 配石・集石造構

#### S Q01 配石造構(第 43 図、図版 8)

L I47・48 グリッドに位置する。1997 年の調査で検出されていた。周囲の状況から基本土層Ⅲ層を構築面としていたと考えられる。S 130 穹穴住居跡と重複するが、本配石が新しい。長軸 2.2m × 短軸 0.7m で南南東 - 北北西の直線状を呈する。人頭大ほどの礫を 2 列ないし 3 列に並べている。礫のレベルは、南南東側がやや低くなっているが、ほぼ同一である。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。本配石は、S 130 穹穴住居跡の付構施設の可能性もある。

#### S Q07 配石造構(第 43 図)

L J57、MA57 グリッドに位置する。1997 年の調査で検出されていた。周囲の状況から基本土層Ⅲ層を構築面としていたと考えられる。S 1242・261 穹穴住居跡の覆土上にある。S 1242 穹穴住居跡は



第43図 SQ01・07・08・09・15・17 配石遺構とその出土遺物

S I 261 穫穴住居跡より新しく、本配石はこの2造構より新しい。長軸4.4m×短軸0.9mで、南南東-北西の直線状を呈する。疊の大きさにはばらつきがあり、拳大から人頭大の疊が用いられている。疊の上面レベルは、ほぼ一定である。本配石を構成している疊の中に磨石1点(286)、凹石1点(290)、砥石に転用された石皿1点(292)が混じっていた。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。

#### S Q08 配石遺構(第43図)

I, J 58, M A 58 グリッドに位置する。1997年の調査で検出されていた。周囲の状況から基本土層Ⅲ層を構築面としていたと考えられる。S I 261 穫穴住居跡の覆土上にあり、同住居跡より新しい。形態は弧状ないし直線状を呈し、方向性は南東-北西とみることができる。長軸4.2m×短軸0.5mで、疊のほとんどが人頭大である。疊の上面レベルは、ほぼ一定である。疊の間から縄文土器(282・283)、有孔石製品1点(287)、円盤状土製品1点(288)、凹石1点(289)、石錐1点(291)が出土した。構築時期は、出土した土器から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S Q09 配石遺構(第43図、図版8)

M A 59, M B 59 グリッドに位置する。1997年の調査で検出されていた。周囲の状況から基本土層Ⅲ層を構築面としていたと考えられる。調査区外の疊の配置も視野に入れると、二重の弧状ないし直線状で、南東-北西の方向性がうかがわれる。弧状と考えると、弧長4.0m、幅1.2mほどの弧が並列している形ととらえることができる。疊の大きさにはばらつきがあり、拳大から人頭大を超えるものまである。疊の上面レベルはほぼ一定で、縦長のものは深く差し込まれていた。疊の間から縄文土器(284・285)、削器1点(293)が出土した。構築時期は、出土した土器から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S Q13 配石遺構(第44図、図版8)

M A 63・64 グリッドに位置する。1997年の調査で検出されていた。周囲の状況から基本土層Ⅲ層を構築面としていたと考えられる。平面形は弧状を呈しているが、環状であった可能性もある。南北方向に長く、その弧長は約5.7m、東西の幅は約0.7mを測る。構成している疊の大きさにはばらつきがあり、ビンボン玉大からバスケットボール大である。疊の上面レベルは、ほぼ一定である。周辺からは縄文時代後期前葉の土器が出土しているが、配石からの出土はない。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。

#### S Q15 配石遺構(第43図)

L E 59 グリッドに位置する。1997年の調査で検出されていた。周囲の状況から基本土層Ⅲ層を構築面としていたと考えられる。南南東-北北西の直線状を呈し、長軸1.5m×短軸0.5mを測る。斜面に位置するため、疊の一部は欠損しているものと思われるが、人頭人の扁平な疊1個と拳大の疊を数個並べたものとみることができる。疊の上・下面レベルは、ほぼ一定である。周辺からは縄文時代後期前葉の土器が出土しているが、配石からの出土はない。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。

#### S Q17 配石遺構(第43図)

L E 57 グリッドに位置する。1997年の調査で検出されていた。周囲の状況から基本土層Ⅲ層を構築面としていたと考えられる。斜面のため疊の一部は崩落しているものと思われるが、本配石の南西側斜面の落ち込みに沿うように弧状を呈していたものと考えられる。長軸方向は南東-北西で、長軸3.3m×短軸1.4mを測る。疊の大きさは不揃いであるが、人頭大を上回り、扁平なものが多い。周辺からは縄文時代後期前葉の土器が出土しているが、配石からの出土はない。構築時期は、確認状況か

ら繩文時代後期と思われる。

#### S Q18 配石遺構(第44図、図版8)

M B63・64、M C63・64 グリッドに位置する。1997年の調査で検出されていた。周囲の状況から基本上層Ⅲ層を構築面としていたと考えられる。南東-北西の直線状を呈し、長軸3.8m×短軸1.2mである。人頭大の礫を主体に配石されているが、礫の大きさはやや不揃いである。礫の上面レベルは、ほぼ一定であり、縦長のものは深く差し込まれていた。周辺からは繩文時代後期前葉の土器が出土しているが、配石からの出土はない。構築時期は、確認状況から繩文時代後期と思われる。

#### S Q23 集石遺構(第44図、図版8)

M G58 グリッドに位置する。1997年の調査で検出されていた。周囲の状況から基本土層Ⅲ層を構築面としていたと考えられる。敷石状を呈するが、擾乱により半数は失われていると思われる。もともとの形態は不明である。およその規模は長軸(東西)1.3m×短軸(南北)1.0m であるが、南東側の現状から推測すると長方形形状に敷かれたものとも考えられる。礫の上面レベルはほぼ一定である。周辺からは繩文時代後期前葉の土器が出土しているが、集石からの出土はない。構築時期は、確認状況から繩文時代後期と思われる。

#### S Q56 配石遺構(第44図)

L J45 グリッドに位置する。1997年の調査で検出されていた。周囲の状況から基本土層Ⅲ層を構築面としていたと考えられる。擾乱により礫の半数は失われていると思われる。もともとの形態は不明であるが、長軸(南東-北西)1.6m×短軸(北東-南西)0.5m の直線状とみることができる。周辺からは、繩文時代後期前葉の土器が出土しているが、配石からの出土はない。構築時期は、確認状況から繩文時代後期と思われる。

#### S Q68 配石遺構(第44図)

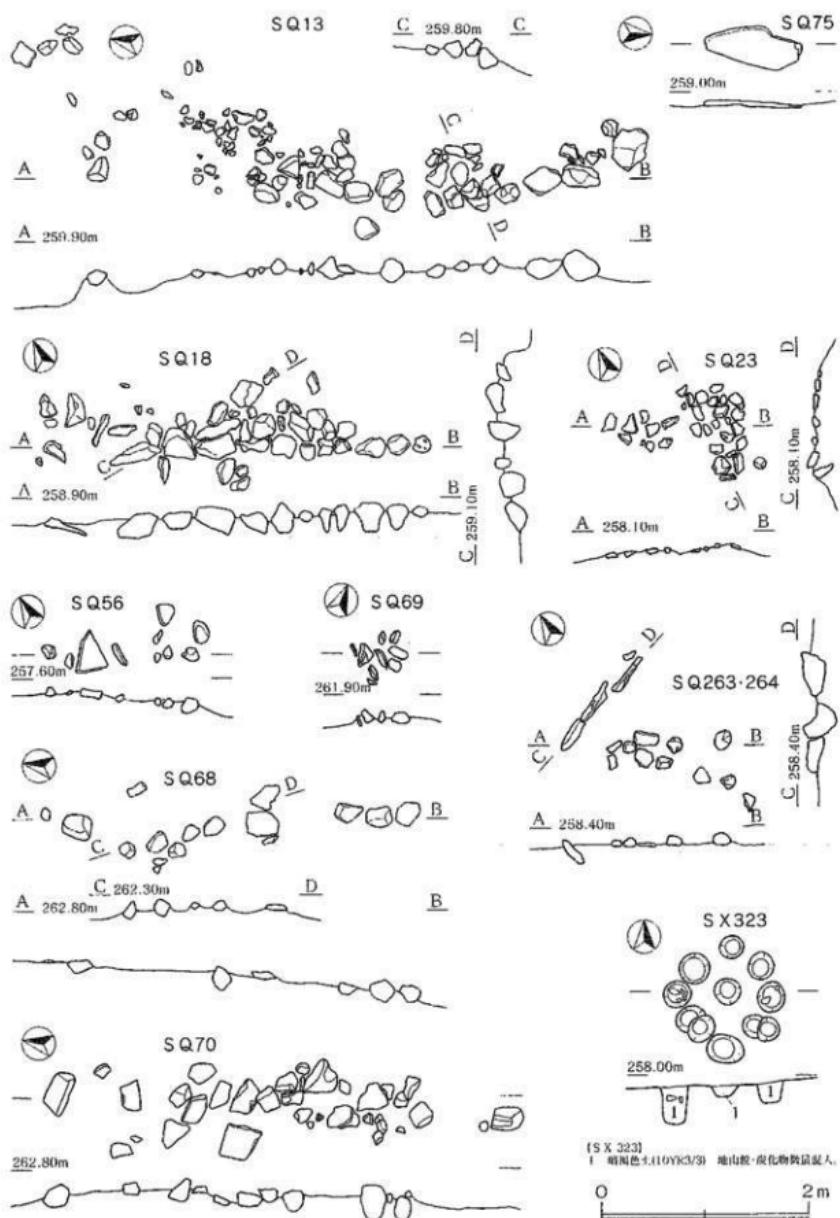
L F61・62 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で直線的な礫の並びとして確認した。確認状況と土層から、S Q70 配石遺構とは同時存在であり、一連の配石遺構とも考えられる。また、別々に構築された後、つながりをもたせるように造り替えた可能性もある。形態は、本遺構の礫の並びだけを見ると弧状を呈すると思われるが、本配石の延長上に S Q70 配石遺構があり、2 遺構を同時に見ると直線状の礫の並びとも考えられる。南南東-北北西の直線状とみると、長軸3.7m×短軸0.6m である。礫は人頭大のものが主体となっている。周辺から繩文時代後期前葉の土器が出土しているが、配石からの出土はない。構築時期は、確認面の層位から繩文時代後期と思われる。

#### S Q69 集石遺構(第44図)

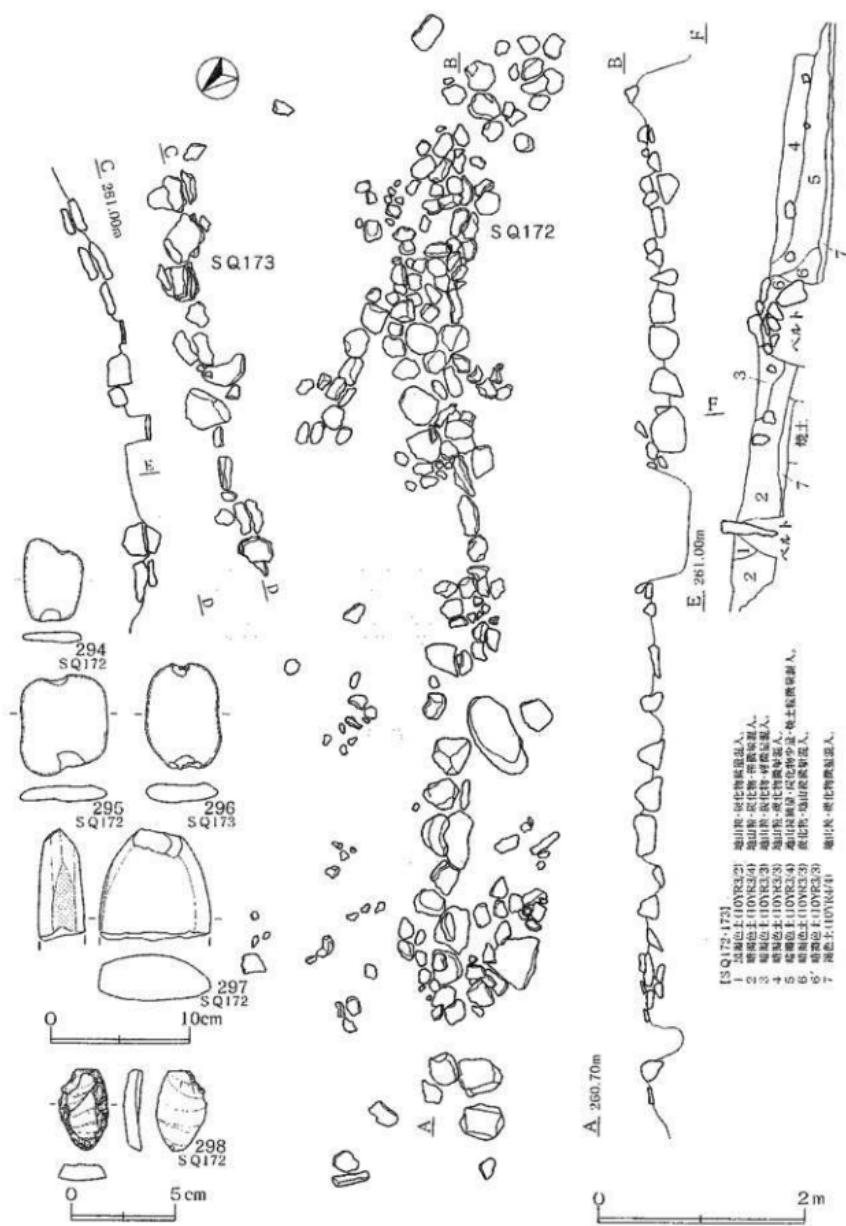
L F61、L G61 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で、礫の集まりとして確認した。直径0.6m の円形内に集められた礫の集合体とみることができる。礫は、掌大のものが主体である。土坑に伴う礫の可能性もあるが、掘り込みは確認できなかった。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位から繩文時代後期と思われる。

#### S Q70 配石遺構(第44図、図版8)

L F63・64 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で、直線的な礫の並びとして確認した。SK F165 フラスコ状上坑と重複する。本配石が新しい。確認状況と土層から、隣り合う S Q68 配石遺構とは同時存在で、一連のものとも考えられる。また、別々に構築された後つながりをもたせるように造り替えた



第44図 SQ 13-18-23-56-68-69-70-75-263-264配石遺構、SX323 性格不明遺構



第45図 SQ172・173 配石遺構とその出土遺物

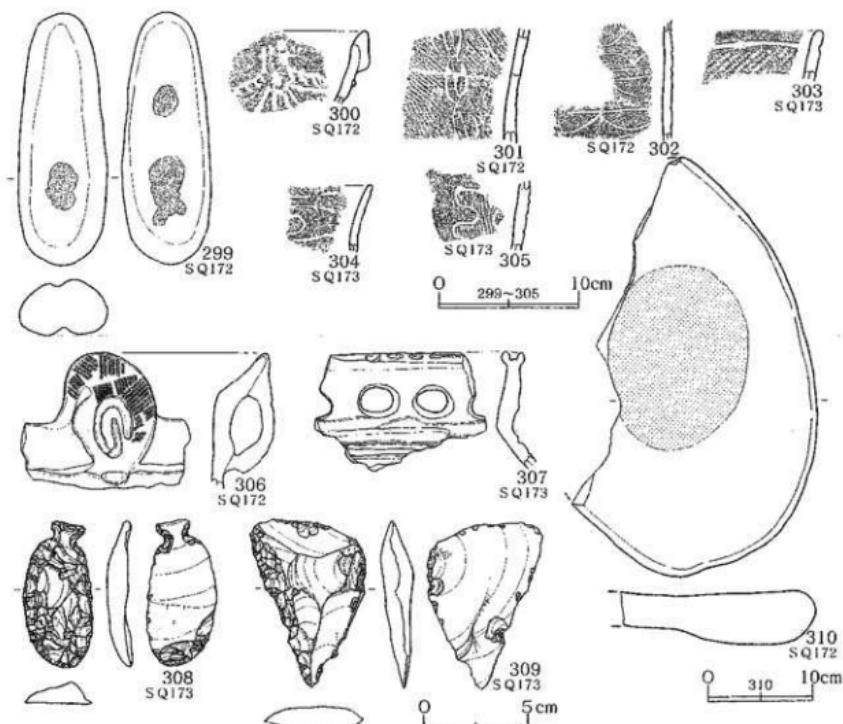
られた可能性もある。本遺構の礫の並びだけを見ると弧状を呈すると思われるが、本遺構の南側延長上に S Q68 配石遺構があり、2 遺構を同時に見ると直線状の礫の並びとも考えられた。本配石を南北東-北北西の直線状みると、長軸 4.6m × 短軸 0.8m である。礫の大きさは、人頭大のものが主体となっているが、不揃いである。礫の上面は、ほぼ水平であり、大きな礫ほど深く埋もれていた。遺物は、礫に混じって石皿の破片が出土した。礫とともに並べられたものと考えられるが、磨滅が著しく掲載しなかった。構築時期は、確認面の層位から縄文時代後期と思われる。

## S Q75 配石遺構(第44図)

LG49・50 グリッドに位置する。Ⅲ層で扁平な礫として確認した。長軸 95cm × 短軸 45cm で厚さが 7cm のほぼ梢円形の礫が水平に据えられていた。本配石に伴うと判断される遺物は出土しなかった。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。平らな礫だが使用痕はなく、性格は不明である。

## S Q172 配石遺構(第45・46図、図版8)

LG56・57、LH56・57・58、LI58・59 グリッドに位置する。II 層の掘り下げ中、連続して並ぶ礫として確認した。S T308・309・310 竪穴住居跡、S R193・194 上器埋設遺構と重複する。S I



第46図 SQ172・173 配石遺構出土遺物

308・309・310 竪穴住居跡より新しく、S R 193・194 七器埋設遺構とはほぼ同時である。主軸は南東ー北西の直線状であり、長軸約11m×短軸約1.5mである。一部枝状の張り出し部分がある。南東から見ると曲がりの少ない「S」字状にも見える。礫のうち大きなものは、縦85cm×横50cm×厚さ35cmに達するが、縦60cm×横40cm×厚さ10cmほどの扁平な礫が多い。これらの大きな礫と人頭人の礫によって構成されている。遺物は、縄文土器片(300~302・306)、石錐2点(294・295)、擦石1点(297)、削器1点(298)、凹石1点(299)、石皿1点(310)が出土した。構築時期は、確認面の層位と出土した上器片から縄文時代後期前葉と思われる。

#### S Q173 配石遺構(第45・46図)

L G57、L H58 グリッドに位置する。II層掘り下げ中に連続して並ぶ礫として確認した。S I 308 竪穴住居跡と重複するが、本配石が新しい。南東ー北西の直線状を呈し、長軸4.2m×短軸0.7mである。縦60cm×横40cm×厚さ10cm程度の扁平な礫を主体に、人頭人の礫が混じる。礫はほとんどが立てた状態で据えられている。遺物は、縄文土器片(303~305・307)、石匙1点(308)、削器1点(309)、石錐1点(296)が出土した。307は、裏面の所々に赤色顔料が付着していた。構築時期は、出土した上器片から縄文時代後期前葉と思われる。S Q172 配石遺構とほぼ同時期に存在したと思われることから、本配石の一部を使用してS Q172 配石遺構を作ったと考えられる。

#### S Q263 配石遺構(第44図)

M E61 グリッドに位置する。1997年の調査で検出されていた。周囲の状況から基本上層Ⅲ層を構築面としていたと考えられる。S I 337 竪穴住居跡と重複するが、本配石が新しい。西南西ー東北東の直線状を呈し、その長さは1.2mである。縦40cm×横25cm×厚さ10cmほどの扁平な礫3個と掌大の角礫1個が、ほぼ一列に並んでいた。礫は立てた状態で据えられていた。周辺から縄文時代後期前葉の土器が出土しているが、配石からの出土はない。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。竪穴住居の壁の一部の可能性も考えられるが、性格は不明である。

#### S Q264 配石遺構(第44図)

M E60・61 グリッドに位置する。1997年の調査で検出されていた。周囲の状況から基本上層Ⅲ層を構築面としていたと考えられる。S I 337 竪穴住居跡と重複するが、本配石が新しい。弧状を呈するが、ほぼ南東ー北西の方向性をもち、その弧の長さは1.6mである。掌人の礫が並んでいたが、いくつかの礫はすでに失われているものと思われる。周辺から縄文時代後期前葉の土器が出土しているが、配石からの出土はない。構築時期は、確認状況から縄文時代後期と思われる。

### 7 性格不明遺構

#### S X323 性格不明遺構(第41図、図版8)

M F59 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で暗褐色土の入る柱穴が円形に配列されていることから確認した。S I 324 竪穴住居跡と重複するが、本遺構が新しい。規模は、中央にある柱穴を中心に半径60cmの円形に柱穴が8カ所配されていた(重複2カ所)。覆土は、各柱穴とも1層で、同様の覆土である。P 3・P 9には礫が入っていた。遺物は出土しなかった。構築時期は、確認面の層位から縄文時代後期と思われる。

### 第3節 遺構外出土遺物

#### 1. 土器

出土した土器資料はすべて縄文時代のものであるが、磨滅の著しい破片が多く、全体の形状を把握できるものは少なかった。この項では、施文と胎土と器形から出土土器を5群に分けて、潟前遺跡出土土器群の特徴を記述する。器形や文様の全体については推測による部分が多く、また層位的に取り上げることのできなかった土器が多いので、施文の特徴に重点をおいて分類している。

#### [第1群土器](第49図320・321)

縄文時代前期中葉の土器と思われるものである。深鉢形土器で、口縁部は外反する。織糸文を不規則に施す。褐色、一部赤褐色を呈する。胎土は粗いが、織糸の混入は認められない。焼成はやや良好である。出土土器に占める本群の割合は1%以下である。本群は、円筒下層a式に並行するかそれ以前と思われる。

#### [第2群土器](第47図313~315、第49図322~352)

縄文時代前期中葉以降の土器で、基本的に無文または縄文のみで文様が構成される土器である。一部の土器(330・342)の胎土には、織糸が含まれる。器前の色調は黒褐色のものと灰褐色のものが多く、黒褐色のものは概して焼成状態が不良である。器形は、外傾基調の直線的なバケツ形を呈するものが主体であるが、口縁部が外傾し頸部がくびれ、胴部が緩やかに内湾するものもある。出土土器の約15%を占める。本群は、円筒下層a~b式に並行するものと思われる。文様の特徴から以下の1~8類に細分する。

1類 無文の土器である(第49図322・323)。口縁部がやや外反する。胎土に織糸を含む。指頭による整形痕が顕著に残るもの(322)、丁寧に磨き、口唇部に刻み目を施したもの(323)がある。

2類 表裏に縄文を施す土器である(第49図324~326)。表裏で縄文原体の異なるもの(324・326)と表裏ともに同一原体のもの(325)がある。324・326は表が綾絡文、裏が撚糸文で、325は表裏ともLR縄文である。326は、LI唇部にも表と同様の綾絡文を施したものと思われる。

3類 縄文または撚糸文のみを施文する土器である(第47図313・314、第49図327~332)。横位のLR縄文(329~331)が多いが、RL縄文(313・327)、撚糸文(314・328)、前段多条の縄文(332)など多種にわたる。器形はバケツ形を呈する。口縁部は垂直に近いか、緩やかに外反する。

4類 口唇部に指頭圧痕の入る土器である(第49図333~334・340・341)。沿面の文様は縄文のみのもの(333・334)と綾絡文(340・341)に区別される。

5類 羽状縄文を横位に施す土器である(第47図315、第49図335~347)。口縁部は外反するもの(315・335)と垂直に近いもの(347)がある。前者は頸部がすぼみ胴部が膨らむ器形、後者は直線的なバケツ形の器形を呈すると思われる。また、前者は結束1種であり、後者は結束2種である。

6類 半截竹管による刺穴を施す土器である(第49図336)。厚手の土器であるが、焼成は比較的良好である。

7類 綾絡文が施される土器である(第49図337~339・342~346)。口縁部は垂直に近いか、緩やかに外反する。口縁部または頸部に横位の綾絡文が施されるもの(337~342)、幅の狭い無文帯を持つものの(339~341)、口縁部から胴部にかけて綾絡文を施すもの(343~346)がある。綾絡文は、すべて横位

で、複数条のものが多い。口唇部に縦文を施すもの(346)や、補修孔の穿たれているもの(340)もある。

8類 口目状撲糸文が縦位に施される土器である(第49図348~351)。口縁部は垂直に近いか縦やかに外反する。器形はバケツ形を呈すると思われる。いずれも2条1組の撲糸文が施されている。

9類 綱目状撲糸文が施される土器である(第49図352)。器形は7類と同様である。

#### [第3群土器](第47図311・312、第50図353~377、図版11)

隆帯の貼付により文様帶が形成される上器である。器形はバケツ形を呈するのが主体である。沟前遺跡出土土器群においては、最も大型で、厚手のものが多い。概して胎土は粗いが、焼成は良好である。器面の色調は第2群と同様である。出土土器の30%を占める。本群は、縄文時代前期中葉から中期初頭の土器であり、円筒下唇a~d式、大木6~7a式に比定される。隆帯の特徴から以下の4類に細分する。

1類 頸部に幅広な隆帯を貼付した土器である(第50図353~358)。隆帯を貼付した後、それに指頭圧痕(353~355)あるいは刻印(356)や刺突(358)を加え、口縁部文様帶を形成したものである。口縁部の文様は、無文(356)、縦文(353・354)、原体側面圧痕文(353・355)、鋸歯状の平行沈線文(357)、隆線の貼付とそれに刺突を施すもの(358)がある。胴部の文様は、結束2種羽状縦文(355)や縫絡文(354)がある。

2類 口頭部に幅広な隆帯を貼付をした後、沈線により2条化した土器である(第47図311・312、第50図359~364)。一部2条化しない部分もあり、そこに棒状工具による凹形刺突が施文されるもの(359~361)と2条化した隆帯に凹形刺突文を付加したもの(364)がある。口縁部に1ないし2条の縫絡文を施したもの(361~363)、口唇部を内外に分けるかたちに溝と刺突を施したもの(361)がある。363は隆帯が一部剥落しているが、その残存部分には原体側面圧痕文が認められる。胴部の文様は、複節の斜縦文(311・312・362・364)が目立つ。312は、高さが65cmを超え、県南部出土土器中では、最大級のものである。なお311と312は同一個体と思われる。

3類 口頭部にやや幅広の隆帯を貼付した後、沈線により2条化した土器である(第50図365~367・368)。隆帯の幅以外は2類と同形態であるが、2類よりやや小型で文様も細かめである。口唇部に指頭圧痕を施すもの(365・367)がある。口縁部は、無文(365)のものとLR縦文(367・368)のものがある。胴部の文様には、LR縦文(365・367)と網目状撲糸文(368)のものがある。

4類 幅の狭い隆帯を貼付した土器である(第50図366~369~377)。やや突出した隆帯が巡るもの(370)もあるが、1~3類に比べて細めの隆帯である。隆帯には、縦状体圧痕(366・371)、刻み目(369)、原体側面圧痕文(370・372)、竹管等による刺突の入るもの(373~377)がある。口縁部の文様は、原体側面および縦状体の圧痕文であり、それが数条口唇とほぼ平行に施されるもの(369~375・377)と斜めに施されるもの(371~376)がある。口唇部には、刻み目を施すもの(369)と縦文を転がすもの(366~373・375~376)がある。胴部は、単方向の結束LR縦文(369)や横位の羽状縦文(373)、縦位の羽状縦文(375)を施すものがある。

#### [第4群土器](第48図316~319、第51図378~404、図版11)

頸部の上ドで文様帶が区画される土器である。器形は、口縁部が外反するのが一般的な形状であるが、外傾しながら外反するものと内傾しながら外反するものがある。胴部は内済し、丸みを持つものが多く、胴部上半部が最も膨らむ。頸部附近で文様帶が区画され、口縁部には文様が充填される。頸部には、沈線、隆帯、刺突を巡らすなどのバリエーションがある。概して赤褐色か赤褐色に近い褐色を呈し、焼成は良好である。最も肥厚する部分は、口縁部ないし口唇部の場合が多いが、平均的に厚

みのあるやや大型の深鉢形土器である。出土土器の約15%を占める。本群の土器は、縄文時代前期末から中期初頭の上器で、大木6~7a式、または円筒下唇d式に比定される。施文方法や文様のモチーフから以下の6類に細分する。

1類 頸部または口縁部に菱形状や鋸歯状のモチーフを持つ、複数条の平行沈線文を主体とする土器である(378~386)。頸部またはその近辺に降帯や沈線を巡らし、口縁部文様帯と胴部文様帯を区画する。降帯は頸部に巡るもの(378~383)と口唇部(385)に巡るものがあるが、頸部に巡るものは区画の意味をもち、口唇部のものは装飾文様の一端を構成していると思われる。巡らした降帯には、原体側面圧痕を施すもの(378)、刺穴を加えたもの(383)、刻み目を入れたもの(385)がある。平線口縁のものと波状口縁のものがある。菱形状の文様の中心に丸い棒状の物による刺穴の入るもの(378~380)、波状口縁の波頂部直下に短隆線を貼り付けるもの(383)がある。胴部の文様は、羽状縄文(378~383)や木目状撚糸文(386)を縦位に施すものがある。

2類 口縁部に綾杉状またはそれに類似した沈線文を施す土器である(319~387~391)。沈線文は直線を基調としている。1類に比べ幾何学的で、単純化されている。文様帯の区画は、他類と同様に頸部またはその近辺においてなされるが、刺穴や刻み目が主体と思われる。319は口縁部を欠くが、391に類似した文様構成をとると思われる。胴部の文様も1類と同様である。

3類 口縁部に同心円状の弧状沈線を連ねたモチーフを持つ、沈線文を主体とする土器である(316~318、392~395)。施文方法としては2類に近似しているが、曲線の描画されるところに相違を見いだせる。文様帯の区画は、指頭圧痕、短い沈線や刺穴の並列(394~395)によるものがある。また、飾り突起の付くもの(316)や、口縁部に2本の隆線が平行に貼付られているもの(318)もある。なお、316と317は同一個体と思われる。器形は、1~2類に比べて、胴部上半の膨らみが大きくなると思われる。

4類 口縁部に条痕文を施す土器である(396~399)。縄文原体による側面圧痕文(396~398~399)や半截竹管による押し引き条痕を施すもの(397)がある。2~3類と同器形と思われるが、口縁部が内傾しながら外反するのが特徴である。

5類 柳状工具による平行沈線文を主体にする土器である(403~404)。沈線は1~4類に比較して細身で、垂直な平行沈線の地文の上に2条1組の平行沈線により波状文を描く。一部沈線に沿って三角形状または逆三角形状の刻みが並び、鋸歯状の文様を作出している。北陸系の新保・新崎様式に近似した文様形態である。

6類 口縁部に幅広の降線と太い沈線による文様を施す土器である(400~401)。幅広の降線が貼付されるもの(400)と太い平行沈線を施文することにより沈線と降線が形成されるもの(401)がある。前者は口唇部に降帯が巡り、さらにその上に2条の刻み目を入れた粘土紐の貼付がある。後者には降線の貼付はないが、口唇部が最も肥厚し、前者と同様の装飾効果が見られる。いずれも曲線を主体とする大胆な文様構成の土器である。

7類 LI縁部にやや細めの降帯を2条巡らす土器である(402)。降帯には、細かい刻み||が施され、口唇部にも同様の刻みが見える。降帯以外の部分には、絡状体圧痕文が施されている。

#### [第5群土器](第52図405~410、第53図411~第55図490、図版12)

縄文時代後期前葉の上器と思われるものを一括した。本群は、十腰内I式または、それ以前の上器と、十腰内II式並行の上器と思われる。なお、十腰内I式以前と思われる土器は、関東の堀之内I式

に類似し、十腰内II式並行と思われる土器は、宝ヶ峰式および加曾利B式に類似する。器形は多様であり、深鉢形土器を主体に、浅鉢、台付鉢、壺、切断蓋付土器、注口上器等が混じるが、器形の不明なものも少なくない。概して第1~4群に比べて薄手で焼成も良好なものが多い。しかし、器形等によって製作の仕方に違いがあり、粗製、半精製、精製の3つの製作工程が考えられる。すなわち、深鉢形土器は、粗製、半精製のもの、壺・浅鉢等は半精製・精製のものが多い。器面は、赤褐色、褐色、黒褐色と多様で、胎土も一様でない。本群は湯前遺跡山上上器群の主体をなし、調査区全域から出土している。出土上器の約40%を占めるが、1997年の調査を勘案すれば70%に達するものと思われる。全体の判明する個体が少ないと、主に施文方法や文様の特徴から以下の16類に細分する。

1類 磨消繩文で文様を構成する土器である(第52図405~407、第53図411~429)。直線的な平行沈線を主体とするものと山線的な平行沈線を主体とするものがある。全体の文様は不明な土器が多いが、長楕円形を呈する平行沈線をモチーフにしたものや一角形状の平行沈線をモチーフにするものがある。基本的には、平坦な器面に磨消繩文が施されるが、刺突を伴うもの(420~425)、波状口縁の波頂部に刻み目を施したり(418)、刺突を加えたりするもの(425)、口縁部が肥厚するもの(427~429)がある。

2類 繩文と沈線文で文様が構成され、磨消を行わない土器である(410~430)。モチーフは第1類と同じであるが、磨消を省いたかたちになるものである。

3類 口縁部に細身の隆帯が巡る土器である(431~432)。モチーフは第1類と同じで、竹管による刺突が入る。

4類 沈線と降線または沈線隆線で文様を構成する土器である(433~435)。いずれも地文を持たない。隆線で区画した内部に沈線文を施すもの(434~435)、隆線に刻み目の入るもの(435)がある。

5類 沈線文が主体となる土器である(436~446)。沈線のみの土器と地文を持つ土器とがあるが、2本以上の沈線による平行沈線文が主体をなす。また、モチーフは円を主体とする曲線となっている。

4類同様に降線の貼り付けられるもの(436~438~443)や、ボタン状の貼付のあるもの(442~443)もある。なお、439~441は並て、439は切断蓋付上器である。

6類 基本的に繩文のみを施す土器である(447~453)。LR繩文が主体であるが、RL繩文(450~452)のものも少量混じる。網目状撚糸文を施文するもの(451)もある。

7類 口縁部に無文帯を持つ土器である(409~452~461)。口縁部にRL原体(454)、LR原体(455)の側面圧痕文を巡らすもの、沈線を巡らすもの(456~460)、また細い隆帯を貼付し、その上に半截竹管による左方向からの刺突を巡らすもの(461)がある。胴部の文様は、太めの沈線間に細い平行沈線を充填し磨消繩文風の文様を形成したもの(408~458~459)と磨消繩文を主体とするもの(460~461)がある。409は、屈曲外傾する口縁部を持ち、口縁上部にやや広い文様帯が設けられている。

8類 折り返し風口縁を持つ土器である(462~463)。折り返し様の部分には、繩文の施されるもの(462~463)と無文のもの(260)がある。

9類 口縁部に指頭圧痕による凹み文様が施される土器である(464~467)。口縁部の表裏にそれを施し、口唇が波状を呈するもの(464~467)と大きめの凹みを表面に施すもの(465~466)に2分することができる。

10類 突起や把手の付く土器である(468~469~471)。平行沈線文が施されるもの(469)と磨消繩文で文様が表されるもの(468)と磨消を行わないもの(471)がある。468~471は丁寧に研磨され、黒褐

色で光沢のある精製土器である。

11類 無文の浅鉢形土器である(470)。底部はやや肥厚するが、口縁部は薄めである。10類の468、471同様、器内外面とも丹念に磨かれている。黒褐色で、光沢がある。

12類 脚部上半部に平行線的な文様を持つ土器である(406・472~475)。口縁に磨かれている。406の器外面は褐色である。それ以外は、器外面とも光沢のある黒褐色の精製土器である。

13類 器外面全体を取り巻く曲線其調の沈線と磨消繩文により表出される文様を持つ土器である(405)。これは、口縁部の一側が大きく外反する片口土器である。

14類 器内面に格子状または縦に走る直線状の沈線を施す土器である(410~476)。器外面は、無文のもの(476)と繩文地文で口縁部に細い沈線による長楕円形の曲線文を施すもの(410)がある。いずれも器厚が際だって厚いが、前者は粗製、後者は半精製土器である。

15類 太めの平行沈線文が文様の主体となる土器である(477~478)。波状口縁の波頂部には直線的な平行沈線が垂下し、口唇直下と頭部付近には2ないし3条1組の平行沈線が巡る。

16類 連鎖状の沈線が垂下する土器である(479~490)。太めの沈線が文様の主体となるのは、15類と同様であるが、モチーフが異なる。連鎖状の沈線を大別すれば、綾格文状のもの(479~480・484・485)と渦形や楕円の連なり状のもの(483~487~490)に分けられる。地文は、無文と思われるもの(484・488)や櫛齒状工具による沈線文(489)のものもあるが、繩文のものが一般的である。なお、繩文の入るものは磨消を作りうる。

## 2. 上製品

土偶・ミニチュア土器・鉢形土製品・垂飾品・腕輪形土製品・円盤状土製品・三角形土製品が出土した。施文方法や文様の特徴からいずれも繩文時代後期前葉のものと考えられる。

土偶(第55図491~495・498、図版12)

頭部1点、胴部1点、脚部2点の出土である。楕円形の頭部(491)は、縦81mm×横64mm×厚さ28mmを測る。隆線により眉と鼻の稜線部分を表し、刺突により目、鼻、口を表す。複数条の沈線により入れ墨状の文様が施されている。頭部は、首を前に突き出す形に付けられていたと考えられる。胴部(495)は、縦78mm×横43mm×厚さ22mm、脚部(498)は、幅48mm×高さ38mmを測る。ともに頭部と別個体と思われるが、いずれも竹管状の工具による刺突が列をなしたり、周囲を取り巻いたりしている。胴部は、中火付近が膨らみを持っていて、妊娠を表しているものと思われる。

ミニチュア土器(第55図492、図版12)

小型の無文の土器が2点出土した。492は、口径41mm×高さ44mmを測る。器面は丁寧になでつけられているが、座りが悪く、正立しない。

鉢形土製品(第55図493、図版12)

無文のもの2点(うち1点493)と、細い沈線により裏表に筋状の文様を施すもの1点(494)が出土した。なお、494にも紐が付いていたものと思われる。493は最大径35mm×高さ42mm、494は最大径21mm×高さ35mmを測る。

垂飾品(第55図496、図版12)

長方形の四隅が突出する形状で、最大縦23mm×横31mm×厚さ9mmを測る。銳利な工具により幾何

学的な文様が彫られている。裏面は、無文である。長軸方向にごく狭い穿孔がある。1点出土した。

#### 腕輪形土製品(第55図497、図版12)

全体に埋みがある。沈線文を施すもの1点と無文のもの1点、いずれも破片が出土した。沈線を施すもの(497)は、現状で縦74mm×横61mm×厚さ16mmを測る。やや細めの3本の平行沈線により、三角形を構成した幾何学的な文様が施されている。その他に、遺構内(SK254上部)からも1点(202)出土した。

#### 円盤状土製品(第55図499、図版12)

土器片を打ち欠いて円盤状にしたものである。繩文が施されているものとそれに沈線の見えるものがある。径35~50mmのものが3点出土した。うち1点(499;直径49mm×厚さ9mm)を掲載した。

#### 三角形土製品(第55図500、図版12)

平面形は正三角形の板状と思われる。現状で縦35mm×横61mm×厚さ7mmを測る。鋭利な工具によって表裏に文様が彫られている。1面は平行沈線状、もう1面は鋸歯状の文様が施されている。周囲は丁寧になでつけられている。

### 3. 石器

#### 石鑿(第56図501~505)

基本的に両面加工で中軸線で左右対称となる。遺構外から30点出土しており、基部の形状により4類に分けた。類中でさらに細分できるものは細分した。( )は器種内に占める割合である(以下同様)。

A=基部が平らなものである。

A-a:平面形が二等辺三角形を呈し、基部の両端が角張るものである。9点(30%)出土した。  
(501)

A-b:両側縁が並行するか基部に向かってすぼまるものである。7点(23%)出土した。(502)

B=基部がくぼむもの、いわゆる凹基式である。5点(17%)出土した。(503)

C=基部が凸基式のものである。広葉樹の葉に似る。8点(27%)出土した。(504)

D=茎のあるものである。1点(3%)出土した。(505)

#### 石槍(第56図506~508)

槍先形の石器である。基本的には扁平細長で一方の先端に鋭い尖頭部を持つものである。

A=断面が凸レンズ状で、石器の長さが10cm以上のものである。2点出土した。(506)

B=断面が薄い凸レンズ状で、石器の長さが10cm以下のものである。4点出土した。(507)

C=断面が凸レンズ状で、石器の長さに対して幅が狭い細身の石器で、石器の長さが10cm以下のものである。2点出土した。(508)

#### 石錐(第56図509)

尖端部の断面が菱形や凸レンズ状になる石器である。4点出土した。(509)

#### 有環石巻(第56図510)

両側縁から抉りを入れてつまみ部を作り出し、両面調整かそれに近い調整を行い、石器の中軸線で左右対称となる石器である。4点出土した。(510)

#### 石匙(第56図511~第57図524)

両側縁から抉りを入れて、つまみ部を作り出し、片面からの加熱によって刃部が作られた石器であ

る。103点出土した。

A=縦型石匙 つまみ部の中軸線にほぼ平行する刃部を持つものである。刃部は直線的であったり曲線的であったりする。

A-a-1; つまみ部の中軸線にほぼ平行する直線的な2つの刃部を持つもので、先端部を加工していないものである。11点(10%)出土した。(511)

A-a-2; つまみ部の中軸線にほぼ平行する直線的な2つの刃部を持つもので、先端部を加工しているものである。13点(12%)出土した。(512)

A-a-3; つまみ部の中軸線にほぼ平行する直線的な刃部と、曲線的な側縁を持つものである。曲線的側縁は加工しているものとしていないものがある。9点(9%)出土した。(513)

A-a-4; つまみ部の中軸線に対して、直線的な2側縁が少し末広がりに開くものである。10点(10%)出土した。(514)

A-b-1; つまみ部の中軸線に対して左右対称な側縁が外側に膨らみ円に近い形をなすものである。10点(10%)出土した。(515)

A-b-2; つまみ部の中軸線に対して側縁が外側に膨らむが、左右対称とならないものである。15点(14%)出土した。(516)

A-c-1; 直線的または曲線的な側縁が先端部で交わって尖り、つまみ部の中軸線に対して左右対称となるものである。7点(7%)出土した。(517)

A-c-2; 直線的または曲線的な側縁が先端部で交わって尖り、つまみ部の中軸線に対して左右対称とならないものである。8点(8%)出土した。(518)

A-d ; 側辺の中に抉りのあるものである。2点(2%)出土した。(519)

B=斜型石匙 2~3の側辺の中で最も長い側辺の中心と、つまみ部の中軸線が約45°で交わる右匙である。5点(5%)出土した。(520)

C=横型石匙 最も長い側辺と、つまみ部の中軸線とがほぼ直角に交わる右匙である。

C-a-1; 2側辺と最も長い側辺の交わる部分が弧状になるもの。4点(4%)出土した。(521)

C-a-2; 2側辺と最も長い側辺の交わる部分が尖るものである。2点(2%)出土した。(522)

C-a-3; 2側辺と最も長い側辺の交わる部分がやや尖るものである。4点(4%)出土した。(523)

C-b ; つまみ部の部分が右器の中軸線から離れているものである。3点(3%)出土した。(524)

#### 籠状石器(第57図525~527)

大小の厚手の剥片に粗い二次加工を施して、全体の形状がいわゆる籠状を呈するように作り出された石器である。二次加工は両面加工と片面加工がありほぼ同数である。形状によって3つに分けられる。46点出土した。

A=基端に明瞭な辺を持ち、刃部が基部より幅広のいわゆる撥形を呈するものである。24点(52%)出土した。(525)

B=基端が尖り、全体の平面形が二等辺三角形を呈するものである。20点(47%)出土した。(526)

C=基端と刃部の幅がほぼ等しい短圓形のものである。2点(1%)出土した。(527)

#### 削器(第57図528~532)

剥片の比較的長い1辺あるいは2辺に、片面からの二次加工によって長い刃部を作り出した石器で

ある。刃部以外の二次加工はない。126点出土した。

A=様々な形状、厚さの不定形剥片の1辺に、直線的あるいは弧状に刃部を作り出したものである。

58点(46%)出土した。(528)

B=様々な形状、厚さの不定形剥片の2辺に、直線的あるいは弧状に刃部を作り出したものである。

刃部は急傾斜のものもある。28点(22%)出土した。(529)

C=剥片が二等辺三角形に近い形をなし、底辺は打面側となるものが多い。底面を除く他の2辺に連続した刃部が作られる。2つの刃部の交わる角度が鋭角のものが多い。18点(14%)出土した。

(530)

D=剥片が4辺の辺を持ち、2辺に連続した刃部が作られる。3辺に連続した刃部を作るものもある。16点(13%)出土した。(531)

E=粗い二次加工を両面に施し、一部分に細かい加工の見えるものである。6点(5%)出土した。

#### 木葉形石器(第57図533)

先端部が尖りそこから発する縁邊に二次加工を施す削器に似ているが、本石器はほぼ全部の縁邊に二次加工を施す。基本的に広葉樹の葉に似る。3点出土した。(533)

#### 搔器(第57図534・535)

比較的手の大小の剥片の一部に、裏面からの二次加工によって急斜度をなす分厚い刃部を作出した石器である。刃部は弧を描くのが一般的である。縦長の剥片を用いたものと、不定形の剥片を用いたものとがある。20点出土した。

A=縦長剥片の一端に刃部を作出した、いわゆるエンド・スクレーパーである。大部分は打面側に当たる基部を除き両側辺にも二次調整が加えられている。刃部には丁寧な二次調整が行われている。13点(65%)出土した。(534)

B=不定形の分厚い剥片の一部に、弧状の刃部を作り出している石器である。7点(35%)出土した。

(535)

#### その他の剥片石器(第57図536)

円形または橢円形に近い剥片の両面に粗い二次加工を施したものである。木製品の可能性がある。

(536)

#### 磨製石斧(第58図537・538・543・544・547・548)

47点出土した。うち完全なものは2点だけである。基部が残ったもの14点、刃部が残ったもの23点、刃縁が欠けたもの7点、半分に割れたもの1点である。なお石斧の部分名称は佐原貞(1977)による。

A-a; 基部と刃部がほぼ同じ幅で、刃部は円刃で両凸刃である。23点(50%)出土した。(537)

A-b; 基部と刃部がほぼ同じ幅で、刃部は直刃で両凹刃である。1点(2%)出土した。(538)

B ; 基部より刃部の幅が広いもので、刃部は円刃で両凹刃である。8点(17%)出土した。(543)

C-a; 明瞭な基端面を持つものである。5点(11%)出土した。(544)

C-b; 明瞭な基端面を持たず、尖り気味のものである。9点(20%)出土した。(547)

D ; C-aと同形態であるが、極めて小型のものである。(548)

#### 半円状扁平打製石器(第58図539・540・541・542・545・546・549・550・552・553)

半円状を呈する扁平な疊を素材にしている。多くの場合長側縁(下側縁)の直線的な辺を打ち欠いて刃部を作り出している。刃部は擦られている場合がある。13点出土した。

I類=素材の直線的な辺を打ち欠いて刃部を作り出しただけのものである。3点(7%)出土した。  
(539)

II類= I類の刃部以外の辺に抉りを持つものである。

1;抉りが両端にあるものである。

a;刃部に打ち欠きまたは擦りのあるもの。4点(9%)出土した。(540)

b;素材のままのものである。5点(11%)出土した。(541)

2;抉りが刃部の対辺にのみあるものである。2点(5%)出土した。(542)

3;抉りが刃部の対辺とどちらか一方の端にあるものである。1点(2%)出土した。これには中央に穴が開けられている。(545)

III類= I類の側縁にあたるどちらか一方を打ち欠いているものである。2点(5%)出土した。(546-549)549は打ち欠き以外の辺および表裏、すべて擦られている。

IV類= I類の刃部以外の辺のほぼ全部に打ち欠きを行っているもの。

1;刃部に擦りのないもの。17点(40%)出土した。(550)

2;刃部に擦りのあるもの。4点(9%)出土した。(552)

V類=一部欠けていて分類できないもの

1;中央に穴のあいているもの。2点(5%)出土した。(553)

2;1以外のもの。3点(7%)出土した。

#### 石鍼(第58図551-554~559)

漁網鍼あるいは編物の鍼として用いられたと思われるものである。出土数243点である。

I類=円か楕円形に近い丸みのある疊の縁辺に刻み目を入れたものである。

A;刻み目が4ヶ所あるもの。39点(16%)出土した。(551)

B;刻み目が2ヶ所あるもの。1点(0.4%)出土した。(554)

II類=抉りが2ヶ所にあるもの。

A;素材となる疊が楕円形に近く長軸の両端に抉りのあるもの。94点(39%)出土した。(558)

B;素材となる疊が楕円形に近く短軸の両端に抉りのあるもの。16点(7%)出土した。(555)

C;抉りのある軸とない軸の幅がほぼ同じものである。82点(34%)出土した。(556)

D;抉りが対角にあるもの。5点(2%)出土した。(557)

III類=抉りが4ヶ所にあるものである。素材となる疊は円形に近い。6点(2%)出土した。(559)

#### 石皿(第59図560-561)

造構外から9点出土したが、ほとんど欠損していて形状のわかるものはない。自然石の少し凹んだ面をそのまま利用したもの、縁が付いているもの、脚の付いているものなどがある。

#### 砾石(第59図566)

両面が非常になめらかに磨かれたもの、両面を使用するために中央が薄くなりついには穴があいたと思われるもの、中程が磨り減って「U」字状になったものが出土した。

#### 圓石(第59図562~565)

素材となる礫の面に半に嵌打による凹みを有するものである。形状によって円形と梢円形に分け、他に凹みが片面にあるか、両面にあるかによっても分けた。32点の出土のうち9点は半分に割れていたがすべて分類可能であった。

I類=円形のものである。

A;凹みが片面にあるもの。5点(16%)出土した。(562)

B;凹みが両面にあるもの。6点(19%)出土した。(563)

II類=梢円形のものである。

A;凹みが片面のもの。3点(9%)出土した。(564)

B;凹みが両面のもの。18点(56%)出土した。(565)

#### 4. 石製品

##### 石刀・石棒(第59図567~570)

石刀は7点、石棒は3点出土した。いずれも破損したものである。うち石刀3点(567~569)、石棒1点(570)を掲載した。なお、568と569は同一個体と思われる。

##### 抉状耳飾り(第59図576~579)

4点出土したが、完形品は1点だけである。蛇紋岩を材質として刃に研磨されている。

##### 有孔石製品(第59図573~575)

3点出土した。2点(574・575)は、円盤状の礫の表面を研磨し、中央付近に孔を穿つものである。垂飾品と思われる。他の1点(573)はやや扁平な礫の端部に孔を穿ったものである。

##### 短冊形有孔石製品(第59図571)

短冊形に研磨し、一端に穿孔するものである。全体の形はわからない。1点出土した。

##### 石皿状石製品(第59図572)

丁寧に整形された石皿状を呈する。全体の形はわからない。1点出土した。

##### 円盤状石製品(第59図580~582)

3点出土した。2点(581・582)は、泥岩質の礫の全面を研磨し整った円盤状に仕上げたものである。他の1点(580)は、泥岩質の薄い板状の礫の周辺を打ち欠き円盤状にしたものである。これには特別な仕上げはされていない。

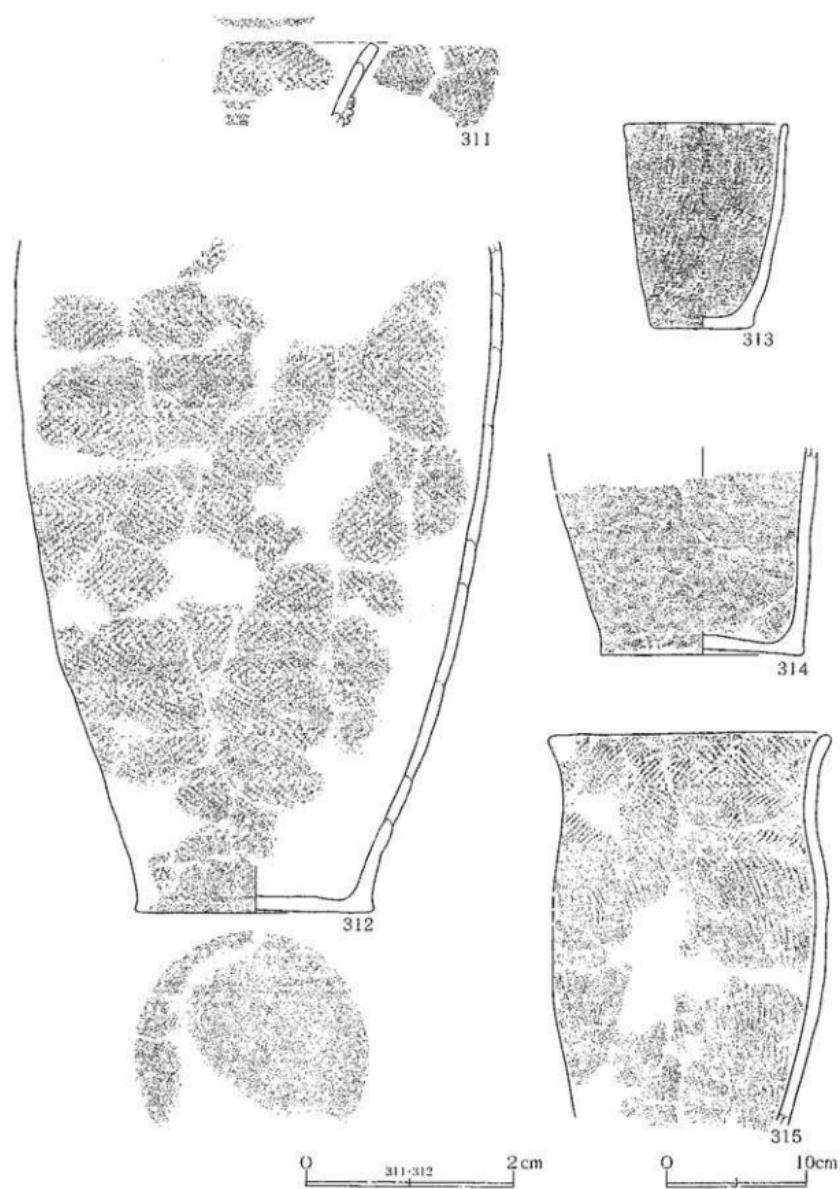
註

註1. 秋田県教育委員会『公害防除特別土地改良八木地区に係る埋蔵文化財発掘調査一八木遺跡』秋田県文化財調査報告書第181集 1989(平成元年)

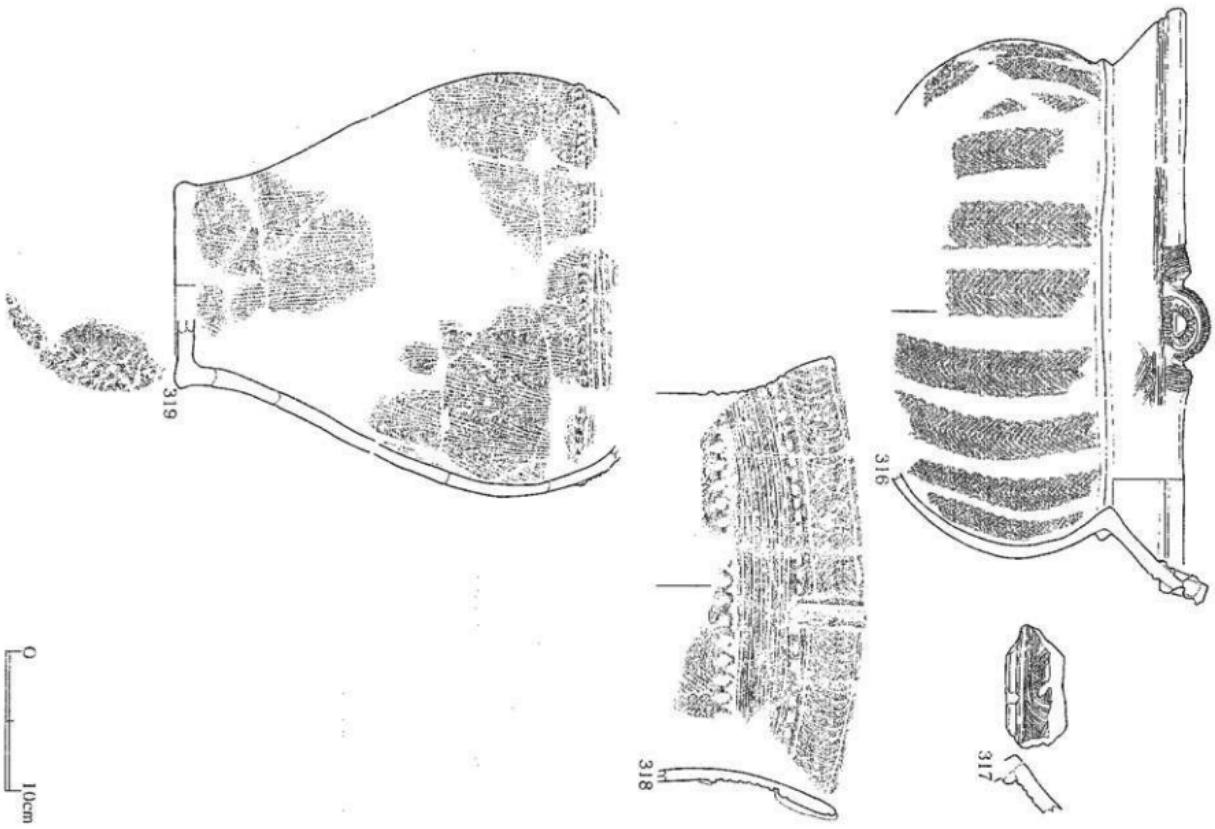
註2. 佐原貞『石斧論』『考古論集』1977(昭和52年)

#### 参考文献

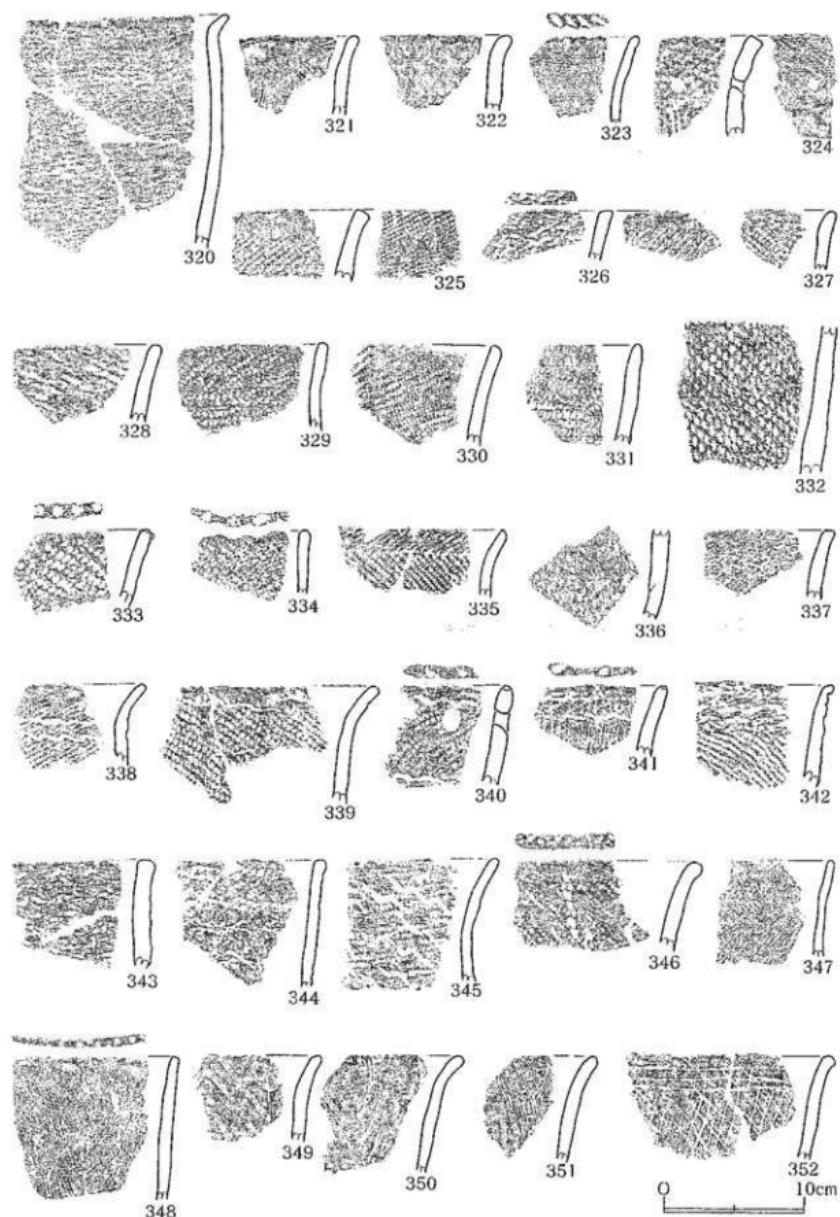
- 村越潔『増補大内土器文化』雄山閣 1984(昭和59年)
- 秋田県教育委員会『東北縦断自動車道秋田駅充満調査報告書一上ノ山道路・船岡遺跡・上ノ山道路一』秋田県文化財調査報告書第166集 1988(昭和63年)
- 秋田県教育委員会『西前道路(第1次) - 保育オートキャンプ場建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一』秋田県文化財調査報告書第290集 1999(平成11年)
- 今井高士著『鐵橋正彦「門前」青森県弘前市「櫛内繩文式道路調査報告書」岩木山』1969(昭和44年)
- 陳前高市教育委員会『門前貝塚-桑原山川半島線の改修に伴う緊急発掘-』陸前高田市文化財調査報告 第16集 1992(平成4年)



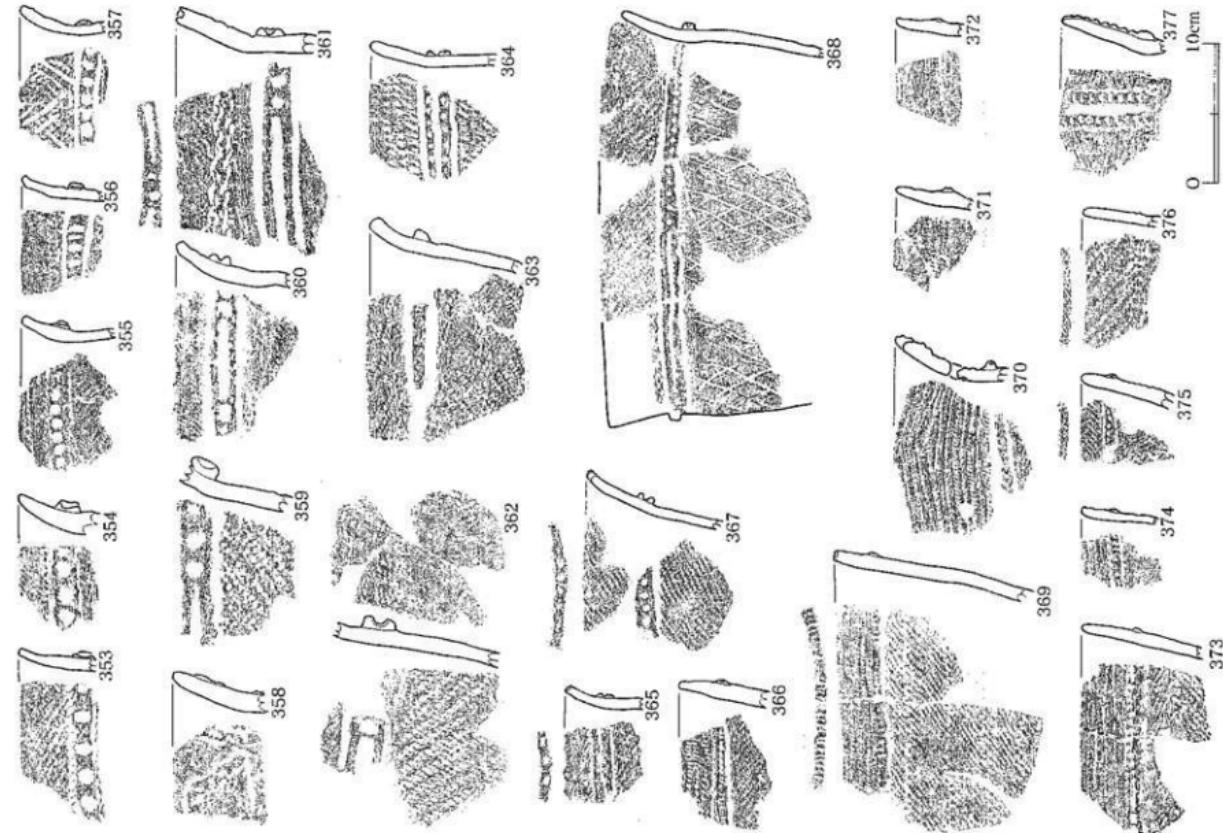
第47図 遺構外出土土器(1)



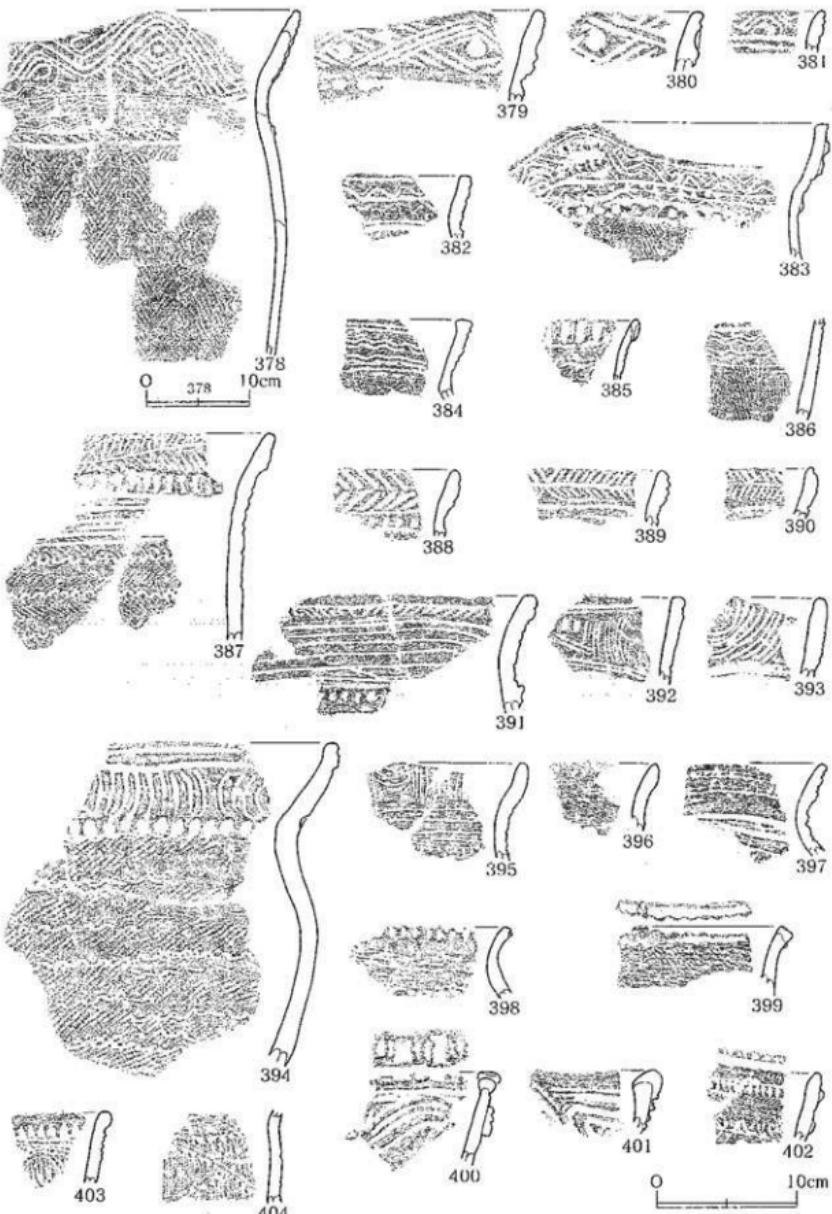
第48図 造橋外出土土器(2)



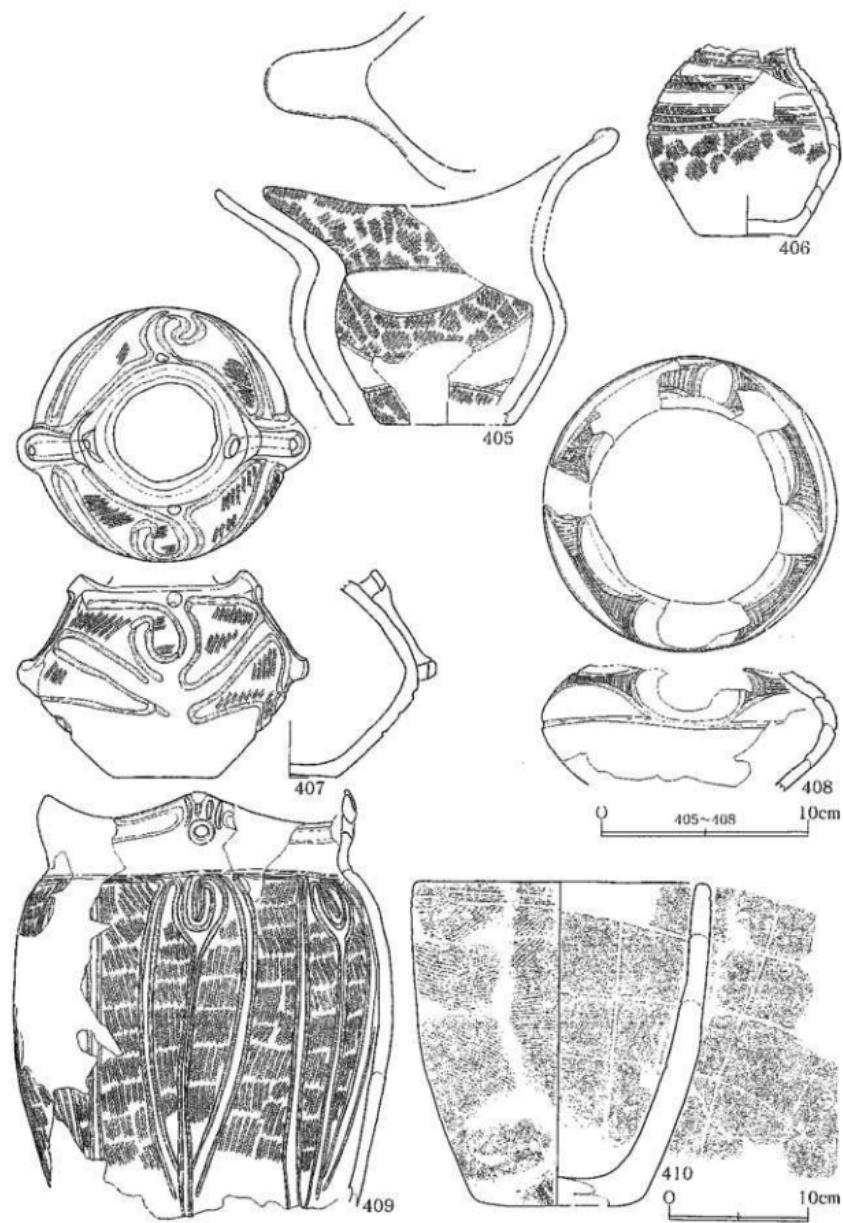
第49図 遺構外出土土器(3)



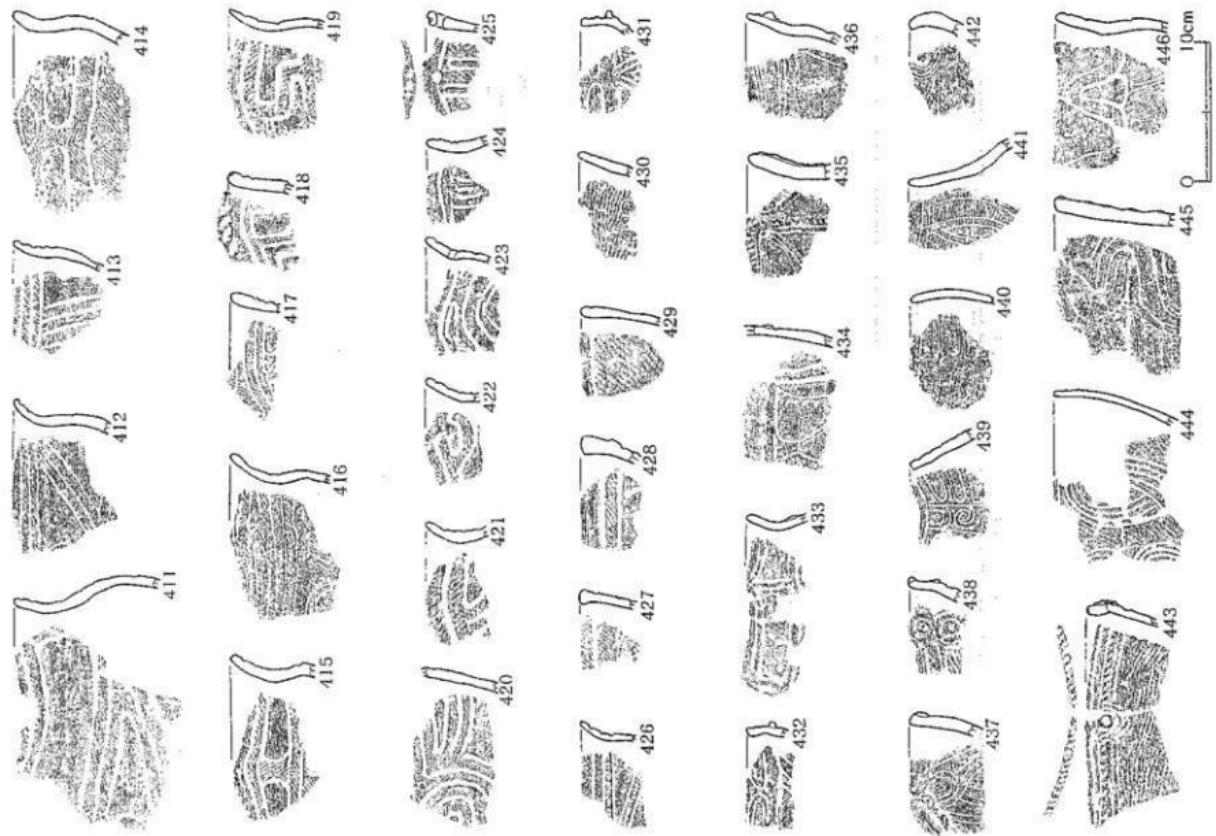
第504圖 遷橫外出土土器(4)



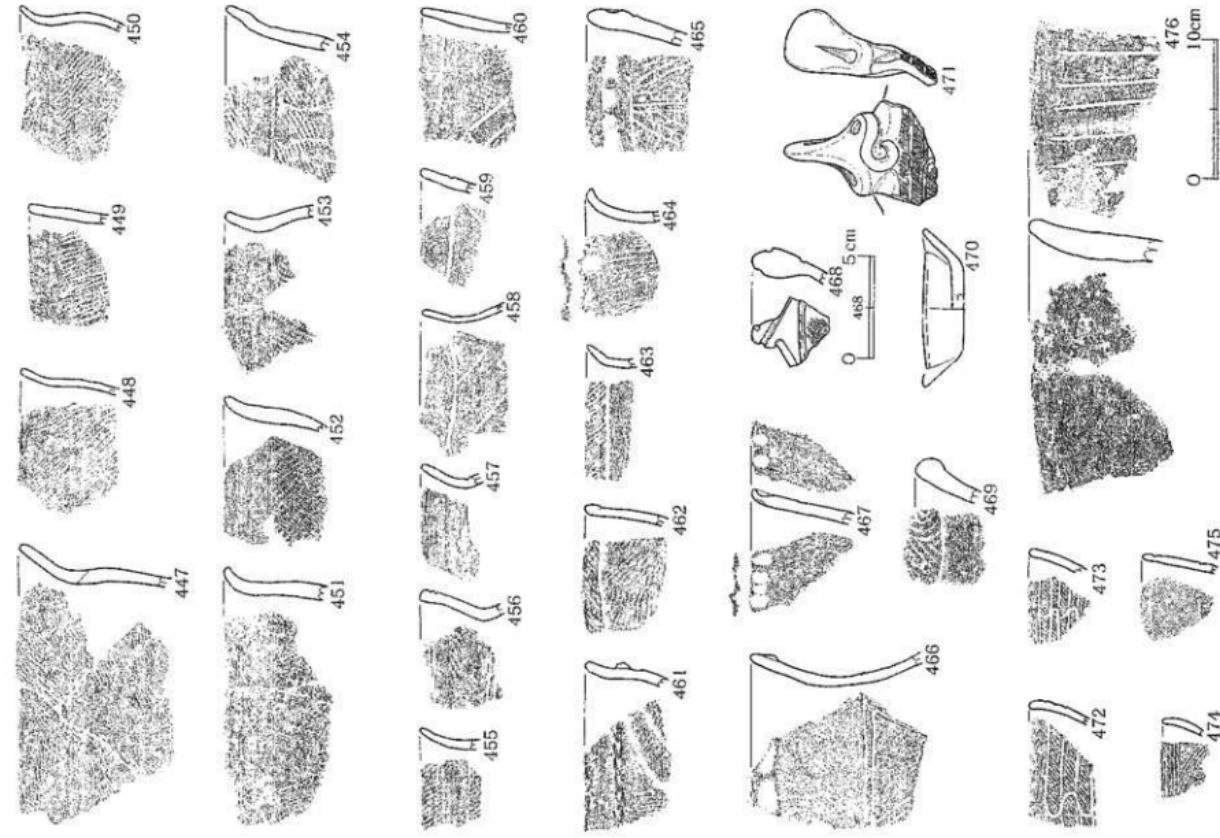
第51図 遺構外出土土器(5)



第52図 造構外出土土器(6)

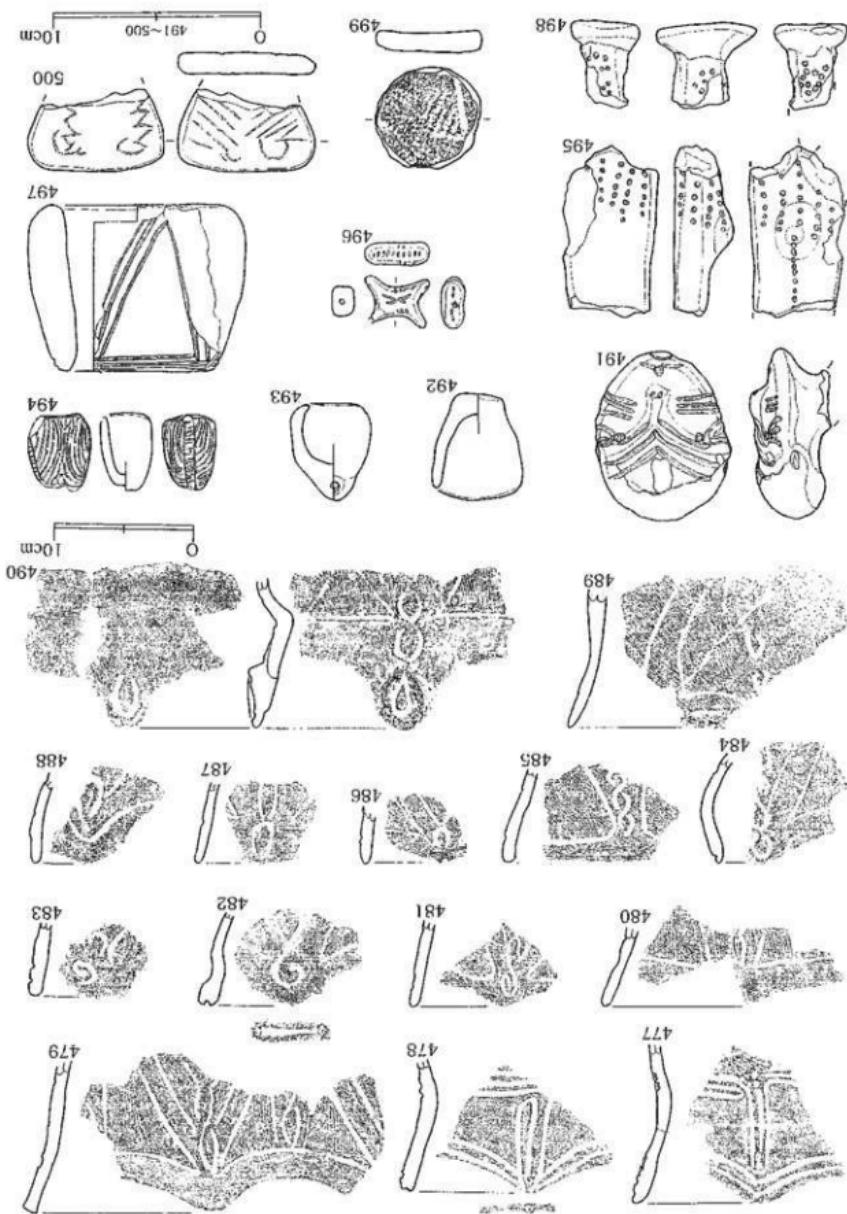


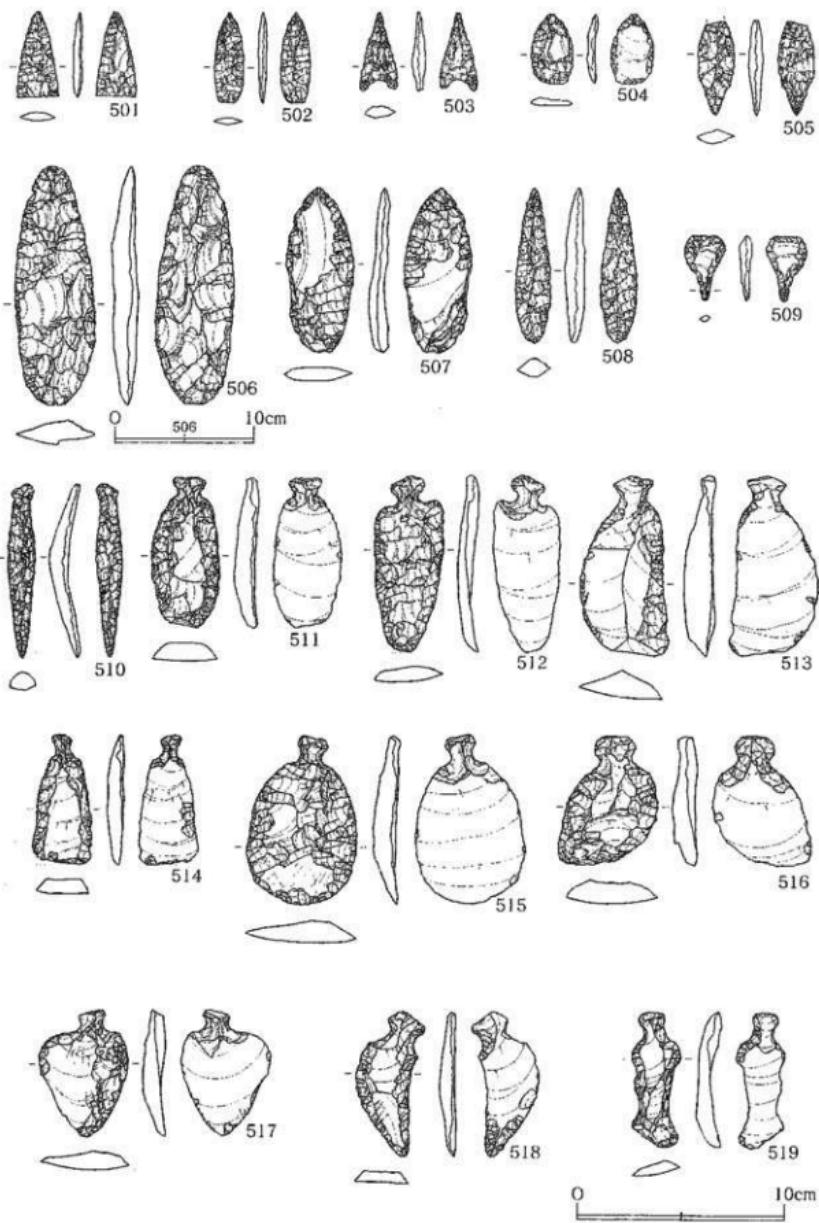
第53図 遺構外出土土器(7)



第54圖 遺構外出土器器(8)

第55図 通稱外出土器(9)・土器品

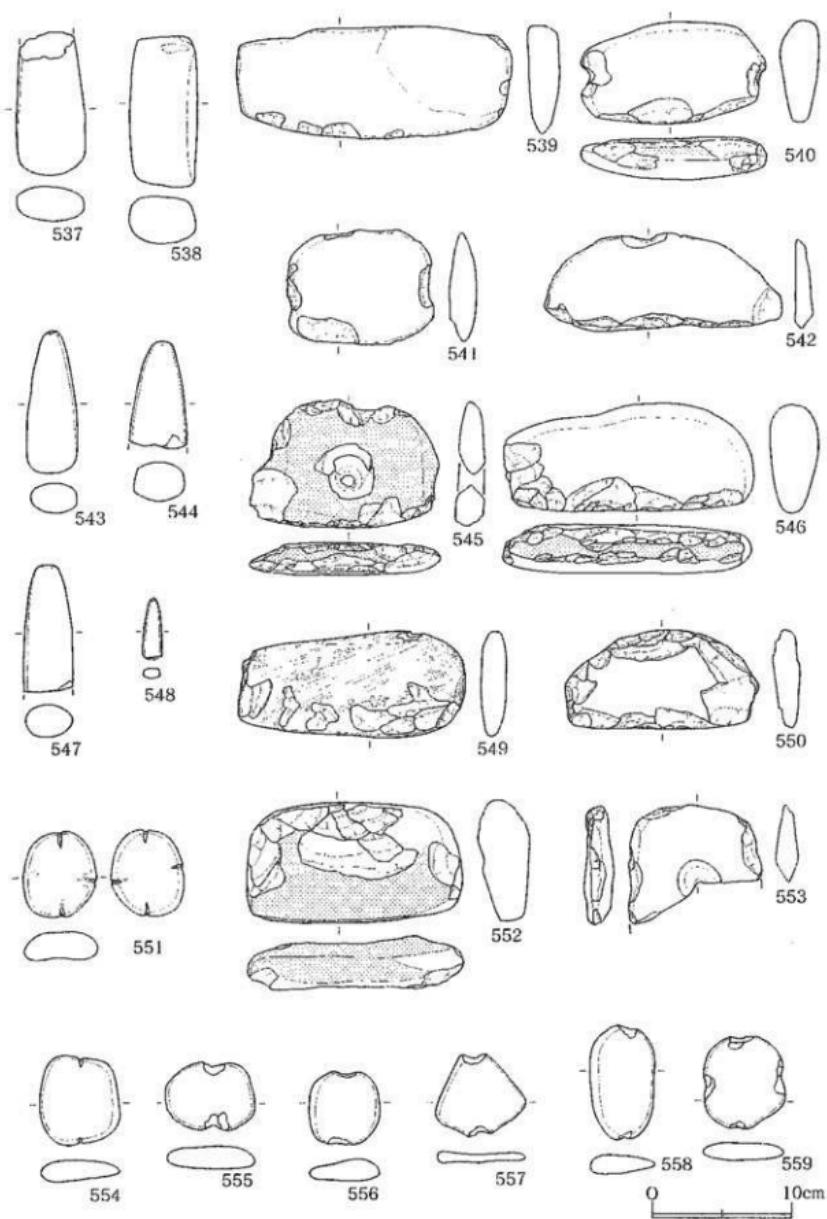




第56図 遺構外出土石器(1)

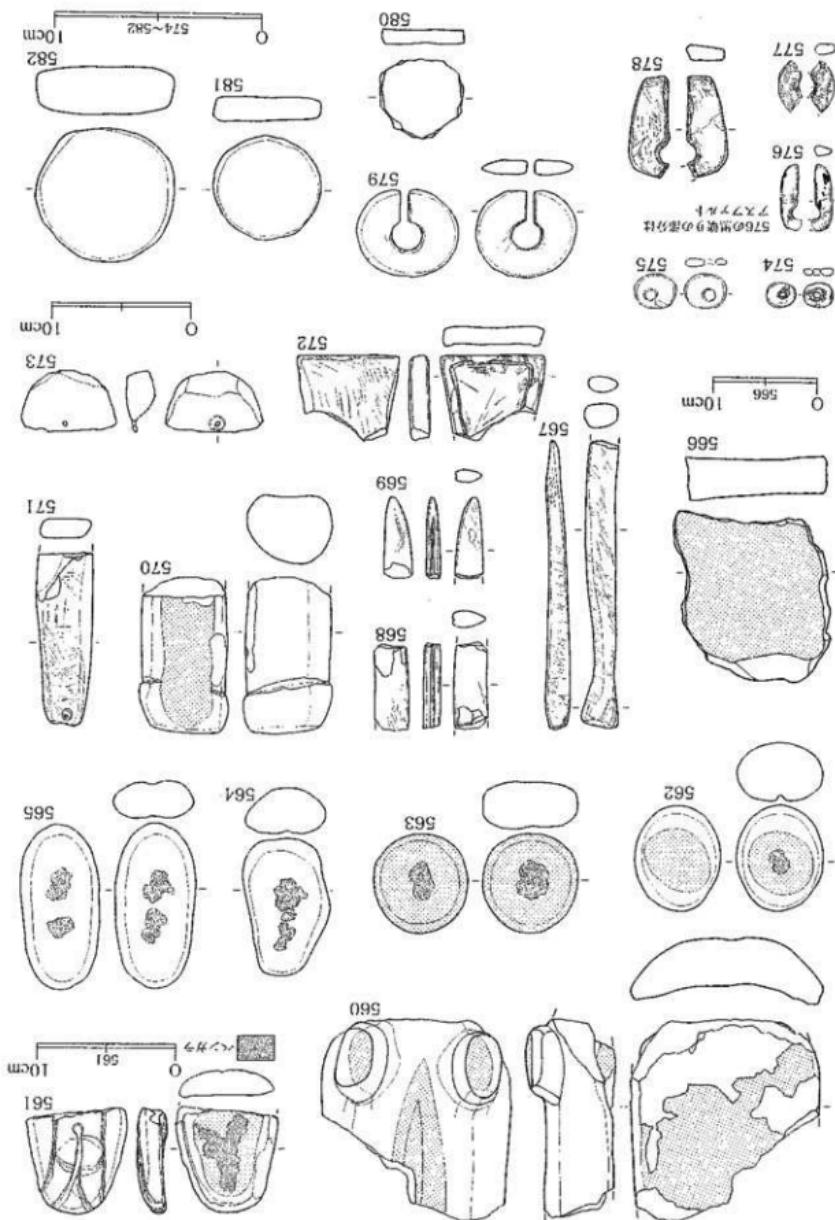


第57図 遺構外出土石器(2)



第58図 遺構外出土石器(3)

第59圖 通橫外出土石器(4)·石製品



## 第5章 自然科学的分析

本章は、S R 262十器埋設構造内のアスファルトの分析結果である。アスファルトの産地同定により、その流通経路を解明することを目的として、北海道大学教授 小笠原 正明 氏に依頼したものである。

### アスファルトの科学分析と原産地

小笠原 正明

(北海道大学高等教育機能開発総合センター)

#### 1. はじめに

天然アスファルトは、地表付近に漏れ出した原油中の揮発性成分が失われて残った不揮発性の物質である。そのもとになっている石油は、古生代において海や湖沼などに沈積した生物有機体が、その後の地形の変化によって地中深く閉じ込められてきたものである。これらの根源生物のバイオポリマー(リグニン、セルロース、脂質、蛋白質など)はもともと化学構造が複雑であるうえに、長い地質年代の経過とともに地熱や地圧や周囲の無機物の影響によってさまざまな変成作用を受けている。そのため出土アスファルトの化学分析から産地や供給ルートを推定することは困難とされてきた。しかし1992年に北海道南茅部町豊崎N遺跡で巨大なアスファルト塊が発掘されたを契機に、化学分析による産地同定の研究が飛躍的に発展した。この報告では、これまでの研究成果の要約に加え、新たに開発された石油の根源成分から由来するバイオマーカーなどの成分比から産地と供給ルートを解明する方法について述べる。

#### 2. 分析方法の概要

発掘試料の表面部分を取り除いて一部を元素分析のためにとっておき、一部をベンゼン-メタノール(B-M)混合溶媒で抽出する。可溶分の溶媒部分を減圧蒸留で除いて乾燥したあと、さらにn-ヘキサンで抽出する。ヘキサン可溶分はオイル分、不溶分はアスファルテンと呼ばれている。オイル分に含まれている溶媒を減圧蒸留で除いたあと、高速液体クロマトグラフィー(HPLC)にかける。試料注入からもっとも短い保持時間で脂肪族炭化水素(パラフィン)類や脂環族炭化水素(シクロパラフィン)類などの飽和炭化水素部分(フラクションP)のピークが現れ、次いでベン



第60図 アスファルト試料分析のフローチャート

ゼン環を1個持つ炭化水素すなわち1環芳香族部分(フラクションM)、さらに2個を有する2環芳香族部分(フラクションD)、3個以上を有する多環芳香族部分などのピークが一部重なって現れる。最後に、HPLCのカラムをクロロフォルムで洗浄すると、極性化合物部分が分離される。このようにして、それぞれの部分を分離することができる。フラクションPまたはフラクションMを分取して質量分析(マス)スペクトルにかけると、それぞれの成分のマスパターンが求められる。以上の分析方法のフローチャートを第60図に示した。

### 3. 元素分析、溶媒分割およびオイル分の分析による分類

**元素分析** 天然アスファルトの主成分は、飽和炭化水素のほかに、酸素、窒素、および硫黄原子を含むテロ化合物である。第2表に北日本各地の遺跡から出土した試料の元素分析の結果を示した。その主成分は炭素Cであり、全体の約70-80%を占める。次に多いのは水素Hである。Cに対するHの原子数の比が1をやや上回ることが石油起源のアスファルトの特徴で、この比はアスファルトか否かの判定の指標として使える。

その例として、柏山館跡遺跡出土の試料の分析結果を示した。これは旧石器時代の地層からマイクロブレードとともに出土した暗褐色の試料で、外見といいB-M混合溶媒に溶ける性質といい、アスファルトに良く似ていた。しかし、Hの原子数がCに対して1を大きく下回っていることから、何かの有機物が考古年代の間に炭化したものと判定された。イオウSの濃度は産地の指標となり得るものであるが、これまで分析した東日本の試料ではいずれも0.8%程度と違いが少ない。ただし、岩手県塙ヶ森遺跡出土の試料は、ここには示さないが3%以上の高い値を示した。出土アスファルトには不純物が含まれていることが多く、元素分析値はアスファルトを区別するための指標とはならない場合がある。

**溶媒分割** 2で述べたような方法によって、試料をB-M不溶分、アスファルテン、オイル成分の3種類に分割できる。外見が似ていても、溶媒分割の結果からアスファルトとははっきり区別できる場合がある。たとえば余市町大川遺跡から出土したピース状の試料は、その90%弱がB-M不溶分であることから草炭または泥炭によるものと結論される。しかしアスファルト自身の溶媒分割の結果も、試料ごとに非常に異なる。例えば、オイル分の割合は秋田県昭和町の約20%から豊崎N遺跡の60%程度と違いが大きい。産地から採取されたあと、どのような環境におかれたかによって変るからである。

	地名・遺跡名	C	H	N	S	O(残)
北海道	豊崎N遺跡	81.7	9.2	1.0	0.8	7.3
	苦小牧III遺跡	83.1	9.2	1.4	0.8	5.5
	美々日遺跡	84.2	8.8	1.5	0.8	4.7
秋田県	伊勢堂岱遺跡	76.5	8.4	1.3	0.7	13.1
	湯前遺跡	75.2	8.3	1.2	0.8	14.5
	小袋岱遺跡	82.1	9.3	1.2	1.0	6.4
	昭和町(I)*	73.9	7.4	1.7	0.7	16.3
岩手県	赤坂田II遺跡	80.5	9.0	1.1	0.8	8.6
	川口II遺跡	75.2	8.5	1.1	0.8	14.4
	沢田I遺跡	59.7	6.7	1.0	0.6	32.0
	柏ノ沢遺跡	83.2	8.1	1.7	0.8	6.2
	(柏山館跡遺跡)**	86.3	5.6	0.4	4.5	6.2
新潟県	大人遺跡	84.9	8.0	1.3	0.9	4.9

\* 昭和町(I)とは奈良・平安期の羽白目遺跡を指す(注2参照)

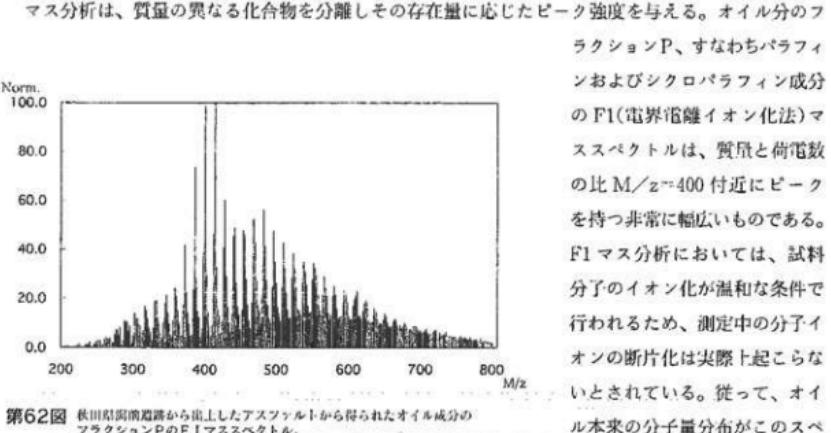
\*\* 柏山館跡遺跡出土のものは分析の結果アスファルトではないと判定された(本文参照)

第2表 遺跡出土アスファルトの元素分析

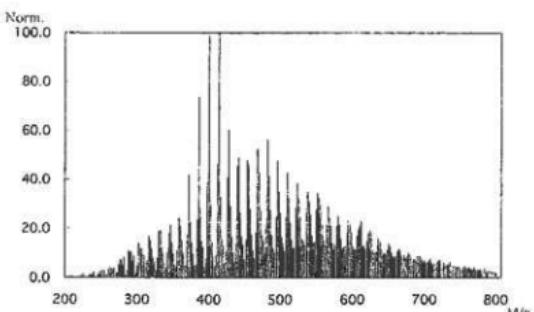
**オイル分の分析** オイル分中のフラクションPに対するフラクションMやフラクションDの比は、区別のための1つの指標となり得る。フラクションMとフラクションDのHPLCスペクトルはお互いに重なっていて厳密な分離はむずかしいので、この2つのフラクションを足したものフラクションPに対して比較する。第61図に、産地とみなされる秋田県および新潟県のほかに、岩手県および北海道の各遺跡から出土したアスファルトのオイル分の分析結果を示した。前述の溶媒による分割結果と違って、オイル分の各化合物クラスの比は互いに似通っているが、注意して見ると地域によって多少の違いがあることがわかる。

北海道の豊崎N遺跡、秋田県のおよび新潟県の各遺跡、および岩手県の大部分の遺跡から得られた試料では、フラクションM、D、すなわち芳香環を含む化合物クラスの割合が10-20%程度と低い。これに対して、岩手県の塩ヶ森遺跡と新潟県の刈羽大平遺跡から出土した試料のオイル分は芳香族性が非常に高く、フラクションMとフラクションDの和がオイル全体の30%もある。このように、オイル分の芳香族成分の割合から、出土アスファルトは約2系統に分類できることが分かった。

#### 4. フラクションPのマス分析による分類



第61図 遺跡上アスファルトのオイル分の高速液体クロマトグラフィーによる分析結果  
F<sub>r</sub>-P: 芳香化合物部分; F<sub>r</sub>-M,D: 1, 2環芳香族部分;  
F<sub>r</sub>-P: 酸和炭化水素部分

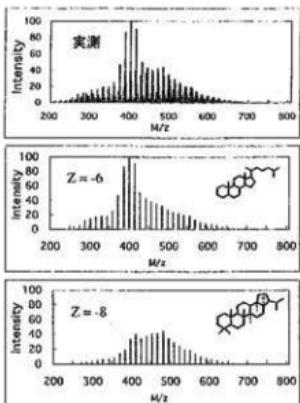


第62図 秋田県御前遺跡から出土したアスファルトから得られたオイル成分のフラクションPのF1マススペクトル。

マス分析は、質量の異なる化合物を分離しその存在量に応じたピーク強度を与える。オイル分のフラクションP、すなわちパラフィンおよびシクロパラフィン成分のF1(電界電離イオン化法)マススペクトルは、質量と荷電数の比M/z=400付近にピークを持つ非常に幅広いものである。F1マス分析においては、試料分子のイオン化が温かく条件で行われるため、測定中の分子イオンの断片化は実際上起こらないとされている。従って、オイル本来の分子量分布がこのスペ



第63図 アスファルトの交易に関する北東北の上な河川および遺跡名。  
ただし、駒形および昭和町だけは地名を表す。



第64図 1: 秋田県伊勢堂岱遺跡から出土したアスファルトから得られたオイル成分のフラクション1のF1マススペクトル；中： $Z = -6$ すなわち環の数が4の成分（例としてステランの骨格を図中に示した）のスペクトル；下： $Z = -8$ すなわち環の数が5の成分（同じくホパンを示した）のスペクトル。

クトルに反映されていると考えてよい。第62図に潟前遺跡出土のアスファルト試料のマススペクトルを示した。

北日本出土試料のマススペクトルを測定したところ、数種類のパターンに分類できることが分かった。この分類により、北日本のアスファルトの原産地と流通について新しい知見が得られた。すなわち、秋田県の日本海側から岩手県の太平洋側に抜ける重要なルートである米代川および馬淵川流域の遺跡から出土した試料は、すべて同じパターンを与えることがわかった。これまで東日本出土のアスファルトは、その多くが秋田県昭和町櫻木庄と考えられていた。しかしわれわれのマススペクトル分析では、昭和町の試料の一部は上述の2河川流域の遺跡から得られた試料とは必ずしも一致しなかった。そこで秋田県埋蔵文化財センターが調査を行ったところ、米代川の流域に近い二ツ井町駒形に地元では古くから知られていたアスファルト露頭があることがわかった(第63図参照)。この露頭から採掘した試料を分析したところ、2河川流域の試料と良く一致した。このようにして、駒形こそが繩文時代の有力なアスファルト供給地であるという説が浮上してきた。

次にマススペクトルのパターンによる分類から一步進んで、 $Z$ 数による定量的な解析を試みた。 $Z$ 数とは、炭化水素の一般式を  $C_xH_{2x-z}$  と表した時の  $Z$  のことで、パラフィン系炭化水素からの水素の不足数に相当し、分子構造中に不飽和結合を持たないときはナフテン環の数のみに依存する。実測のスペクトルを、 $Z=2$  から 1 つおきの  $Z=-8$  までの 6 つの成分スペクトルに分割したところ、スペクトルの形を特徴づけているのは第64図に示すように、 $Z=-6$  と  $-8$  であることが分かった。 $Z=-6$  と  $-8$  の成分はそれぞれ重質油のバイオマーカーとして重要なステラン類およびホパン類を含むものである。そこでこの 2 つのスペクトルの強度比をとって、これを  $R$  値と名付けて産地推定のた

めの指標とした。駒形の露頭から採掘したアスファルトのR値の平均値と各遺跡から出土した試料のR値は第3表のように求められた。遺跡出土試料のR値と駒形産の試料のR値の平均値との差をとり、それを産地試料の標準偏差で割って相対偏差を求めた。この相対偏差は、駒形産試料との隔たりを表す目安となる。

このような分析の結果、米代川・馬淵川の2河川、およびその支流域にある伊勢堂岱、川口、岩成田、寺久保の各遺跡出土の試料の中で、駒形産ではないと言えるものは一つもないことがわかった。一方、同じ北東北出土の試料でも、秋田県の潟前遺跡や岩手県の塩ヶ森遺跡出土のものは相対偏差が大きく、駒形産である可能性はほとんどなかった。さらに、馬淵川の河口から三陸海岸を南に100キロほど下った岩手県山田町の沢田I遺跡出土の試料は駒形の試料に非常に近かった。しかし、さらに南の内陸部にある相ノ沢遺跡(第63図参照)出土の試料は別系統であった。米代川と馬淵川をつなぐラインは、縄文前期・中期の代表的な上器形式である大木式と円筒式を区別する南北の境界線であり、その後も日本海側と太平洋側をつなぐ重要な交易ルートであったことを考えれば、駒形産アスファルトがこのルートをたどって三陸沿岸まで運ばれたと考えるのが妥当であろう。今回の結果は、さらに三陸海岸を通じて山田町付近まで南下した可能性を示唆するものである。

## 5. 産地同定の問題点

試料の成分分析から産地を無前提に決めることはできないが、成分データを統計的に処理すれば、第3表に示すように基準となる試料からどれだけ隔たっているかがわかる。基準となる試料が複数であれば、すなわち候補地としての産地が複数で

あれば、出土試料がそれぞれの産地にどれだけ近いか(あるいは遠いか)を判定することになる。相対偏差が2以下であれば問題の試料がその産地のものである確率が最低数%はあるということであり、3以上であればそれが実質的にゼロだということである。従って、アスファルトの成分分析から産地を同定するためには、(1)産地の数が比較的少ないと、(2)それぞれが産出するアスファルトが他と区別できる成分比を持っていることの2つの条件が必要となる。

アスファルトの産出地とみなされる地点は、今のところ秋田県の櫻木と駒形、新潟県の大入遺跡など数カ所である。以前からアスファルトの原産地と考えられていた櫻木を中心とする昭和町のアスファルトには、昭和町(1)と(2)の2種類がある。昭和町(1)タイプは駒形産と区別がつかない。そこでここでは、駒形タイプと昭和町(1)タイプを一緒にして「秋田タイプ」と呼ぶことにする。他にも可能性として考えられる場所があるが、アスファルトが明確な露頭として存在しない、

地名・遺跡名	R値	相対偏差
秋田県 駒形	0.632±0.036	—
伊勢堂岱遺跡*	0.650	0.50
潟前遺跡	0.781	4.09
小袋岱遺跡	0.666	0.95
昭和町(1)	0.586	1.26
昭和町(2)	0.953	8.82
岩手県 赤坂田遺跡*	0.706	2.04
川口遺跡	0.698	1.18
岩成田遺跡*	0.637	0.15
寺久保遺跡*	0.709	2.11
相ノ沢遺跡	0.930	8.19
沢田I遺跡	0.646	0.40
北海道 霧崎N遺跡	0.685	1.45
キウス4B遺跡(1)	0.758	3.47
キウス4B遺跡(2)	0.61	0.26

\* 印は米代川と馬淵川の2河川およびその支流域にある遺跡を示す。

第3表 遺跡出土アスファルトのR値と駒形産の試料のR値からの相対偏差

近隣に縄文遺跡が確認されていないなどの理由で、産地として確定することができない。

われわれの分析の結果によれば、秋田タイプは前節に述べたように秋田県の産地から米代川・馬淵川流域を中心に岩手県の三陸沿岸までの広い範囲に分布している。北海道南部の南茅部町で出土したアスファルトもこのタイプに良く似ている。しかし、岩手県に近い秋田県や、岩手県の中部以南ではこれとは明らかに異なるアスファルトが見られている。特に岩手県の盛岡市に近い塩ヶ森遺跡の試料はS濃度など多くの点で際だった違いがあり、このタイプがどの産地から来たものか大いに興味がある。

新潟県産のアスファルトの化学分析は現在進行中であるが、予備的実験では秋田県産のものよりも高いR値が得られており、秋田県産と区別できる可能性が高い。

最後に考古学研究における化学情報の性格について一言つけ加えたい。物質の化学構造は情報の宝庫であるが、本来時間とともに指數関数的に減衰する性格を持っている。考古遺物を扱うときは、千年単位の時間スケールでどの情報が消え、どの情報が生き残ったかという評価が不可欠である。アスファルトの場合は、地質年代にわたって安定な物質であるという有利さはあるが、直射日光や酸素による変成の影響も考慮しなければならない。その影響を避けるために、この研究では比較的大きなアスファルト塊の内側からサンプリングした試料のみを用いている。石器などの表面に薄く付着した試料を扱う場合には、考古年代の間にどのような経年変化を受けるか実証的に明らかにする必要がある。

#### 注

- 1) Z数による実測のマススペクトルの分割の方法は、参考文献のイで詳しく説明している。
- 2) 昭和町(1)の試料は奈良・平安期の羽白目遺跡出土のもので、地質的に近いので概本産といわれている。昭和町(2)は概本の豊川油田のものである。
- 3) 津軽海峡に面した地域では北海道側の釜谷地域で地表に原油が出ている場所が発見されているが、今のところアスファルトの露頭は発見されておらず、従って産地とは確定されていない。この地域でアスファルトの産地が発見され、かつその性質が「秋田タイプ」と酷似している場合に限り、南茅部出土アスファルトの秋田原産説は否定される。

#### 参考文献

- 1) 我孫子昭二(1986) 「アスファルト」『縄文文化の研究』8:205-222頁、雄山閣
- 2) 小笠原正明・阿部千春・前川靖明・横山晋(1994) 「豊崎N遺跡出土の天然アスファルト塊」『考古学ジャーナル』373号:25-29頁
- 3) 小笠原正明・櫻山 一・能登谷宜康(1999) 「二ツ井町富根字不動沢地内のアスファルト浸出地について」『秋田県 墓誌 文化財センター研究紀要』14号:50-57頁
- 4) 小笠原正明(1999) 「縄文時代の交易-アスファルトがたどった道」『化学』9月号:28-30頁

## 第6章 まとめ

平成11年度渕前遺跡発掘調査は、県営山沢湖オートキャンプ場整備事業に伴う道路、水路部分(2,800m<sup>2</sup>)について実施した。これは遺跡推定面積の23%にあたる。しかし、平成9年度に田沢湖町が遺跡中央部と見られる配石遺構の広がる部分4,300m<sup>2</sup>の表土付近を調査しているため、調査域の重なる部分が多く、新たに調査した面積は750m<sup>2</sup>、遺跡推定面積の6.3%である。この結果、渕前遺跡で発掘調査の行われた範囲は平成8年度実施発掘調査面積を含め3,830m<sup>2</sup>、遺跡推定面積の32%となった。

平成8年度調査では、旧石器時代の石器、剥片と縄文土器が出土し、縄文時代の土坑5基を検出した。平成9年度の調査では、主に縄文土器が出土したが、II石器時代の石器、上師器・須恵器が数点混じる。遺構は、配石遺構19基、石組遺構2基、柱穴14基、土器埋設遺構4基、上坑1基、フラスコ状土坑1基、焼土遺構16基を検出した。

今回の調査では、縄文時代前期前葉・中葉・後葉～中期初頭の土器と縄文時代後期初頭から前葉の土器が出土した。遺構は、堅穴住居跡42軒、土坑91基、フラスコ状・袋状土坑3基、配石・集石遺構18基、土器埋設遺構7基、焼土遺構8基等を検出した。

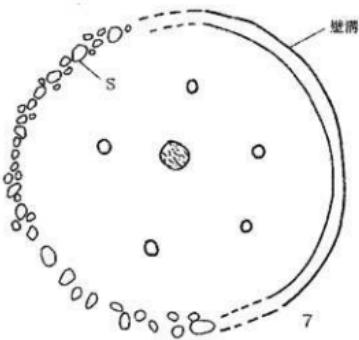
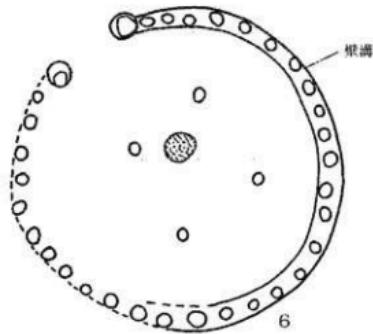
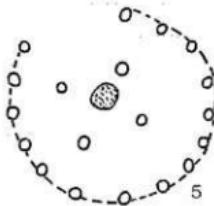
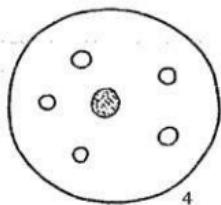
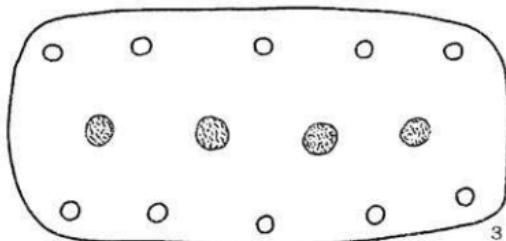
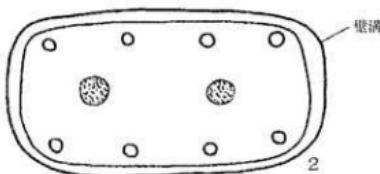
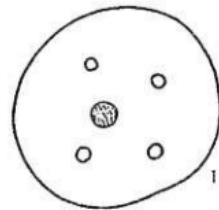
### 縄文時代前期～中期の堅穴住居跡

本遺跡で下位の第IV・V・VI層すなわち地山漸移層から地山面で確認した堅穴住居跡は、伴出する土器から縄文時代前期前半から縄文時代中期初頭に構築されたものである。構築時期と形態には相関関係があると考えられ、全体の形状がわかるものを形態的に分類した。時期の想定は確認状況や切り合ひ関係などをもとにし、時期の特定できないものについては、検出面や土色にその基準をおいて時期を想定した。

本遺跡中最も占い段階の堅穴住居跡は、S I 42・76・80・259堅穴住居跡(第65図1)と考えられる。これらは、直徑2.5～4.5m、確認面からの深さは18～35cm、その床面積は9～15m<sup>2</sup>である。小型で掘り込みも浅い。柱穴は、いずれも径20cm以下、床面からの深さ20cm以下であり、2～7基検出した。円筒下層a・b式並行の土器を伴出しているものがあり、構築時期は縄文時代前期中葉を想定した。

次の時期に出現するのは、いわゆるロングハウスと呼ばれる長方形大型住居(第65図3)である。「大型住居」という言葉の解釈には多様性があるが、ここでは、隅丸長方形か梢円形の平面形をとり、その長軸長が10mを超えるものと考えている。8割を調査したS I 97堅穴住居跡をはじめS I 136・137・340堅穴住居跡がこれにあたる。これらについては1軒すべてを調査したものではなく、また後世の攪乱等により推定部分が多くなるが、S I 97堅穴住居跡は、長軸17m、短軸4.8m、深さ40cmと推定される。他のものも同程度の規模を行するとと思われる。なお、S I 102堅穴住居跡は長軸長7.7mであり、大型住居には含まれないが、同時期、類似の形態であるので付け加えておく。

炉は住居の中央部にあり、中央を通る長軸に沿って數基並ぶ形態をとる。いずれも地床炉であり、住居の改築にともなって炉の位置がずれたり、重なったりして、焼上が二重ないし三重になる部分もある。そのため改築が重なると、炉の数のはっきりしないものが増える。しかし、長軸に沿う形に変



炉

第65図 住居跡模式図

わりはなく、住居が広げられると、かの位置も中央によるものと考えられる。

柱穴は、おむね壁に沿って巡る形をとる。その他床面にあると思われる柱穴も何基か検出できたが、主柱穴と思われるものは壁沿いに配置される。屋根の構造材いわゆる垂木と呼ばれる部分の痕跡が検出できることから屋根が地面前から直接斜めに立ち上がっていたものと思われる。

本遺構群に伴う土器は、円筒下脛d-1式・d-2式や大木6式・7a式に比定できる土器が混在しているが、円筒下脛d-1式と大木7a式が主体である。構築時期は縄文時代前期後葉から中期初頭と思われる。

同形態の豊穴住居跡の検出は、協和町上ノ山II遺跡で29軒<sup>計</sup>を数える。これらはすべて円筒下脛c式土器を伴出する、縄文時代前期後葉の住居跡である。岩手県鳩岡崎遺跡では3軒<sup>計</sup>検出されているが、伴出する土器は大木6~7式が主体で、縄文時代中期前葉のものである。

次の時期を想定できるのは、平面形が長方形または隅丸長方形で、壁溝の巡る豊穴住居跡(第65図2)である。いずれも全容の不明な住居跡であるが、SI 148・158・308豊穴住居跡がこれである。明確な切り合いはないが、確認状況から前者のものより新しいと考えられる。壁の一部と壁溝しか検出できなかつたためその規模は不明であるが、長軸10m程度と思われる。また、その平面形は隅丸長方形と思われる。すべてに地床炉が確認でき、前者の小規模化によるバリエーションの可能性もある。伴出する土器に時期を明確にするものはないが、縄文時代後期の遺構に搅乱されていると考えられ、それから推定すると前者同様円筒下脛d-1式土器または、大木7a式土器が伴つたのではないかと考えられる。

#### 縄文時代後期の豊穴住居跡

縄文時代後期初頭から前葉の住居跡は、炉や柱穴だけしか検出できなかつたものが多く、規模や形態等不明な部分が多いので構築時期と住居形態を関連づけて触れることができない。平面形は、円形で、直径4~5mのものと6~8mのものに2大別できる。

小型の豊穴住居跡は、直径4m前後と思われるものが多い。柱穴は床面に5基前後あるもの(第65図4)が一般的だと思われる。中にはSI 143豊穴住居跡など壁にあたると思われる部分に柱穴が巡るもの(第65図5)もあった。かは、地床炉(SI 140・331・339豊穴住居跡)と石圓炉(SI 77・113豊穴住居跡)もあるが、大部分は土器埋設炉(SI 45・46・47・53・55・61・122・242・260・268豊穴住居跡)である。石圓かは、人頭大的疊を6~8個円形または楕円形に置いたものである。上器埋設かの土器は、住居跡1軒に1~3個埋設されていた。複数検出した土器埋設かは、新旧が明白なものもあるが、同時存在と考えられるものもある。

SI 143・334豊穴住居跡では円形に巡る柱穴の途切れる部分があり、そこが出入り口と思われる。なお埋設炉を伴う住居跡は、確認面が最も上位であり、本遺跡中最も新しいものと思われる。

大型の豊穴住居跡(第65図6・7)は、平面形が直径8~10mの円形で、壁溝が巡るのが特徴である。壁溝の底面から柱穴を検出したもの(第65図6; SI 30豊穴住居跡)もあるが、その他構造材の痕跡は検出できなかつた。炉はすべて地床炉であり、床面中央部ないしやや壁よりにある。出入り口と思われる部分を検出した住居跡はSI 30豊穴住居跡だけであるが、その位置は北西側である。壁溝は、おむね幅20cm、深さ10cmであるが、SI 30豊穴住居跡だけがやや大きめとなる。時期がずれるのか、特殊なのか不明であるが、壁の構造そのものが違うと思われる。すなわち壁溝内に垂直に

掘られた柱穴が並ぶことから、柱状の用材を立てて壁としたものと思われる。つまり、地面から直接壁が立ち上がっていてその上に屋根が架かる軒高の上屋構造だったと推定される。なお、柱穴の掘り方やその並びは、S I 143 壴穴住居跡にも類似している。また、S I 202 壴穴住居跡(第65図7)の壁部分は、弧状の溝と共に弧状の礫の並びが向かい合って一つの円をなしており、溝も礫も壁を構成していたと考えられる。類例は、岩手県遠野市張山遺跡で円形に礫の巡る竪穴住居跡が検出されている。これも本遺跡と同時期後期初頭の構築であるが、かは石垣<sup>(注)</sup>である。

#### 土坑

土坑は、形態から貯蔵穴や墓と思われるものも検出しているが、決めてとなるような遺物は出土していないためその性格付けのできないものが多い。ここでは、SK 275 土坑など特殊と思われる土坑について触れておきたい。SK 275 土坑には焼土の堆積が著しく、何度も内部で火を焚いたものと判断した。大きく4回の使用が認められたが、断続的に使用されたものとも考えられる特殊な土坑である。火を焚く目的については不明であるが、環状注口上器や垂飾品等の出土遺物から祭祀に関わる遺構と思われる。また、これと類似の土坑がSK 304である。これは、SK 275 土坑より小規模であるが、形態が類似していることと底面に火を焚いた痕跡のあることから同性格の遺構と思われる。しかし、これは一度しか使用されていない。また、SK 335 土坑も底面に厚い炭化物の層があり、幾度か火を焚いたものと思われた。なお、これらは、台地状平坦面の北西端に位置し、本遺跡中では、最も新しい部類の遺構と考えられる。また、これらはSN 343・344 焼土遺構との関連も考えられ、一連の遺構群と見ることもできる。そう考えると、遺跡北西部は一連の儀式のための場所という想像もできる。なお、これらの土坑と同様の性格と考えられるものが、伊勢堂岱遺跡<sup>(注)</sup>、高壁館跡<sup>(注)</sup>、貞壁地遺跡<sup>(注)</sup>などで検出されており、伊勢堂岱遺跡では、“墓”と性格付けされている。

#### 配石遺構

配石遺構は、縄文時代後期初頭の住居跡と同時か、それよりも新しいという結果を得た。また、当初SQ 06 配石遺構としたものは、S I 202 壴穴住居跡の壁であることがわかった。しかし、その他の配石遺構の性格は不明である。なお、SQ 01 配石遺構は、S I 30 壴穴住居跡の出入り口の施設の一部としての可能性も考えられる。他の配石遺構にも同形態のものがあり、SQ 263・264 配石遺構は、住居の壁と出入り口の可能性も考えられる。さらに、SQ 23 築石遺構は、S I 324 壴穴住居跡の付属施設の可能性もある。

#### 性格不明遺構

S X 323 性格不明遺構の性格を判断する材料は得られなかった。SK 275 土坑などの周囲の遺構から推定すると、これも祭祀に関わる遺構かとも思われ、形態から類例を探すと、秋山市大松沢I遺跡に見いだすことができた。大松沢I遺跡では、中心部の小土坑に土器が埋設されているものがあり、柱穴の集合体と思われた遺構も上屋構造のある“墓”ではないかとされている。形的には本遺構と類似しているが、時期は縄文時代晩期後葉とされている。本遺構は、S I 324 壴穴住居跡より新しいと判断できたが、同住居の付属施設の可能性も否定できない。

#### アスファルトの原産地

アスファルトの原産地については、今のところ不明であり、分析結果からは、昭和町産でも上ヶ井町産でもないということしか言えない。すなわち、第3、第4のアスファルト産出地があるとすれば

そこが原産地の可能性が高いということであった。

#### 潟前集落の隆盛と衰退

本遺跡からは、旧石器時代の石器や円筒下脛式以前と思われる土器や土師器・須恵器も出土しているが、主な遺物は、円筒下脛a・b・d式、大木7a式、十腰内I式(人湯式・門前式とも言える)に比定される土器である。このことから判断すると、潟前遺跡の隆盛期は、縄文時代前期中葉、前期末葉から中期初頭、後期初頭の3期である。一部分の調査で全体を判断することはできないが、あえて集落規模を想像してみたい。

竪穴住居跡の検出数や出土遺物の量から、縄文時代前期中葉には、小型の竪穴住居が、2~3軒程度が同時に存在するものと思われる。前期末葉から中期初頭には、大型またはやや大型の住居が1~2軒と小型の住居が数軒あったと思われる。後期初頭には、小型の円形竪穴住居の時期から大型の円形竪穴住居の時期を経て十腰埋設炉を持つ小型竪穴住居の時期へという変遷が考えられる。いずれも、未調査区域を勘案すると5~6軒程度は同時に存在していたものと思われる。特に後期の大型円形竪穴住居の建つ時期には人口が最も多かったと推定される。

また、縄文時代後期初頭には前述の配石や上坑群が構築され北西部には祭礼の場が設けられる。住居との重なり合いから、住居の廃絶後にこれが設けられたと考えられ、後期初頭も後半になると居住地と祭礼場は分離していたのではないかと推測できる。

#### 出土遺物

出土遺物で特徴的なことは、第一に石錘の出土数が極めて多いことである。また、縄文時代前期の円筒下脛式土器に伴出する半円状扁平打製石器が多数出土していることも挙げられる。縄文時代後期の遺物では、非日常的と思われる土器、土製品、石製品も多数出土している。

縄文時代前期中葉の土器は、大木式土器と思われるものもあるが、円筒下脛式土器の範疇に入るものが圧倒的である。逆に、前期末から中期初頭の土器は、大木式土器系の色彩が強くなる。後期初頭の土器は、十腰内I式に比定される土器が主体で、関東の堀之内I式に対比できる。若干ではあるが、十腰内II式に比定される土器で、関東の加曾利B式に相当する土器も出土している。

潟前遺跡は、旧石器時代から縄文時代後期前葉まで断続的に使用された場所である。旧石器時代は、石器製作の場として、縄文時代前期から中期初頭にかけては集落として、後期初頭から前葉にかけてはやや規模の大きい集落と祭祀の場としてとらえることができる。

縄文時代前期中葉には、円筒土器分布圏に入っていたものが、前期末から中期初頭にかけては大木式土器分布圏に取り込まれる。また、中期初頭には、北陸系土器文化の影響も受けている。後期になると全国的に土器文化の共通性が見え始めるが、本遺跡についてもその傾向がうかがわれる。

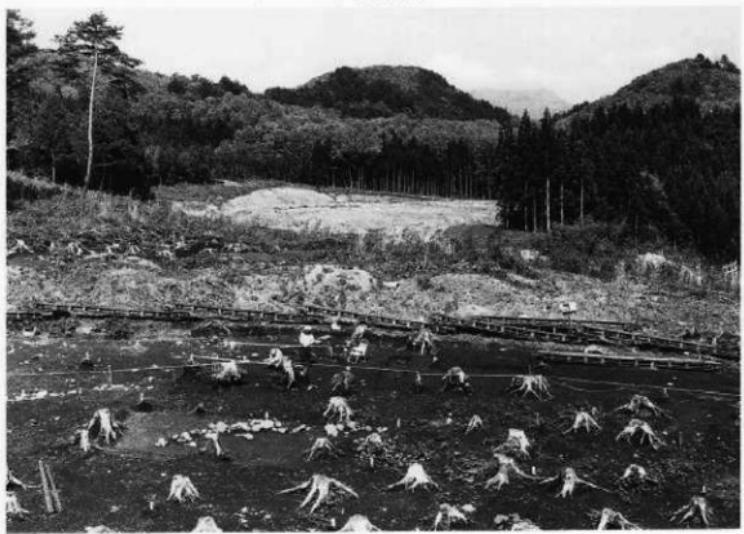
このように、本遺跡は円筒土器文化と大木式文化の中間的な位置にあり、時期により土器様式が変わることから、この地域の土器文化を研究するためには欠かせない遺跡の一つである。とりわけ、秋田県南部においては、縄文時代前期末から中期初頭にかけての時期の遺跡は少なく、貴重なものである。

註

1. 田沢湖町教育委員会『湯前遺跡－平成9年度発掘調査報告－』 1998(平成10年)
2. 秋田県教育委員会『湯前遺跡(第1次)原宮オートキャンプ場建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』秋田県文化財調査報告書第290集 1999(平成11年)
3. 武藤康弘「縄文時代前・中期の長方形大型住居の研究」『住の考古学』藤本強編 山藤洋充発行 同成社 1997年
4. 秋田県教育委員会『上ノ山Ⅰ遺跡・館野遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡－下 東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ』1988(昭和63年)
5. 岩手県教育委員会・日本道路公団『江釣子付地周辺遺跡・遺構編・遺物編 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XV～I』1982(昭和57年)
6. 逸野市立博物館『縄文の暮らしと精神文化』逸野市立博物館第35回特別展図録 1997(平成9年)
7. 秋田県教育委員会『伊勢堂岱遺跡－県道木戸石庭線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』秋田県文化財調査報告書第290集 1998(平成10年)
8. 秋田県教育委員会『西山廻区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VI－高尾館跡－』秋田県文化財調査報告書第198集 1990(平成2年)
9. 秋田県教育委員会『真壁地・鐵ノ台遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第102集 1983(昭和58年)
10. 秋田県教育委員会『秋田・昭和線地方道改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I－大松沢Ⅰ遺跡－』秋田県文化財調査報告書第243集 1994(平成6年)



1 遺跡遠景



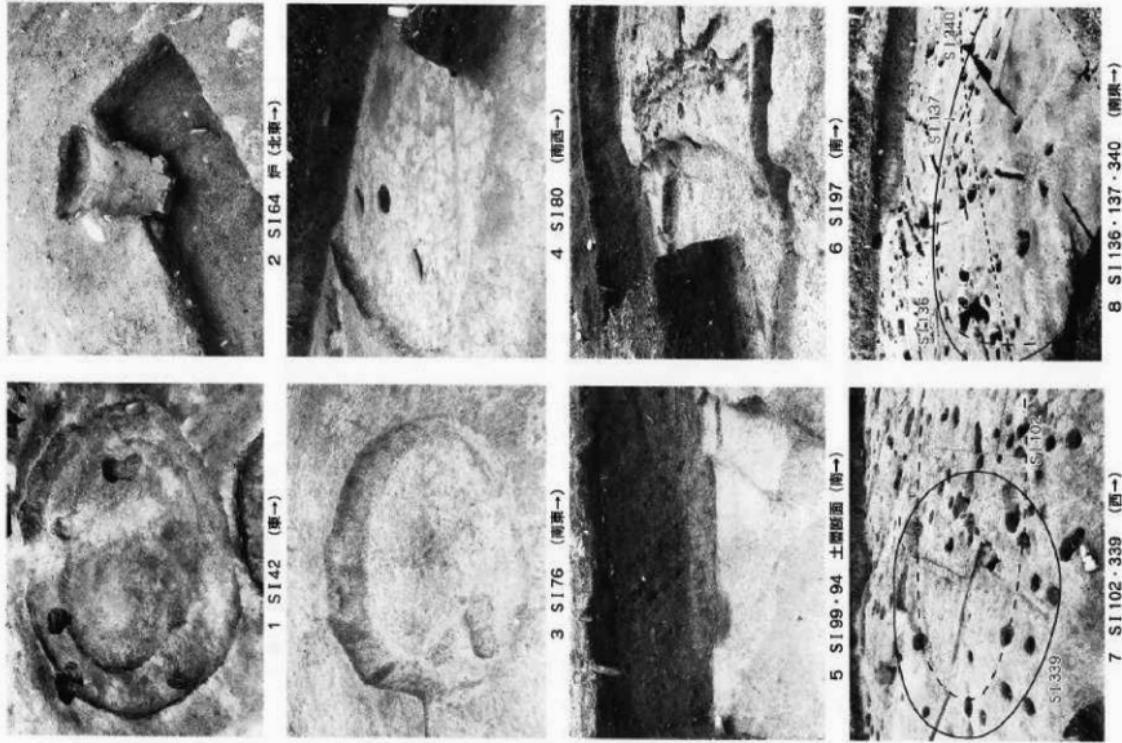
2 調査区東部全景

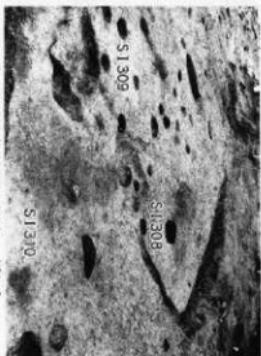


1 北部作業風景



2 中央部作業風景

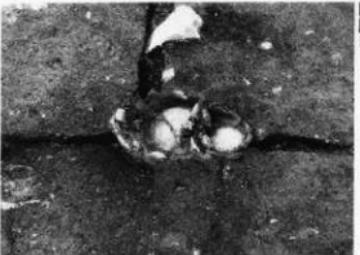




7 SI45 帽 (南→)



1 SI 53 炉 (東→)



2 SI 55 炉 (北東→)



3 SI 77 炉 (西→)



4 SI 113 炉 (南→)



5 SI 1122 炉 (南西→)



6 SI 143 (南→)



7 SI 157 · 340 (西→)



8 SI 202 (西→)



1 SI 242 爐 (南→)



2 SI 260 爐 (北西→)



3 SI 268 爐 (南西→)



4 SI 261 (北西→)



5 SI 321 (南東→)



6 SK 10 (西→)



7 SK 36 (南→)



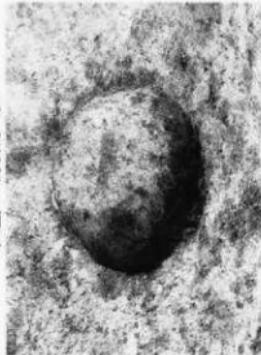
8 SK 49 (南→)



1 SK159 (東→)



2 SK275 (南西→)



3 SK291 (西→)



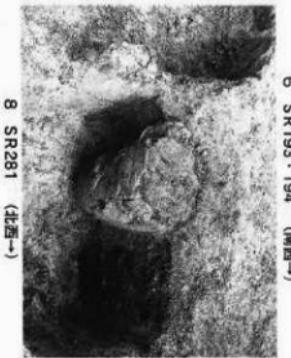
4 SK333 (南東→)



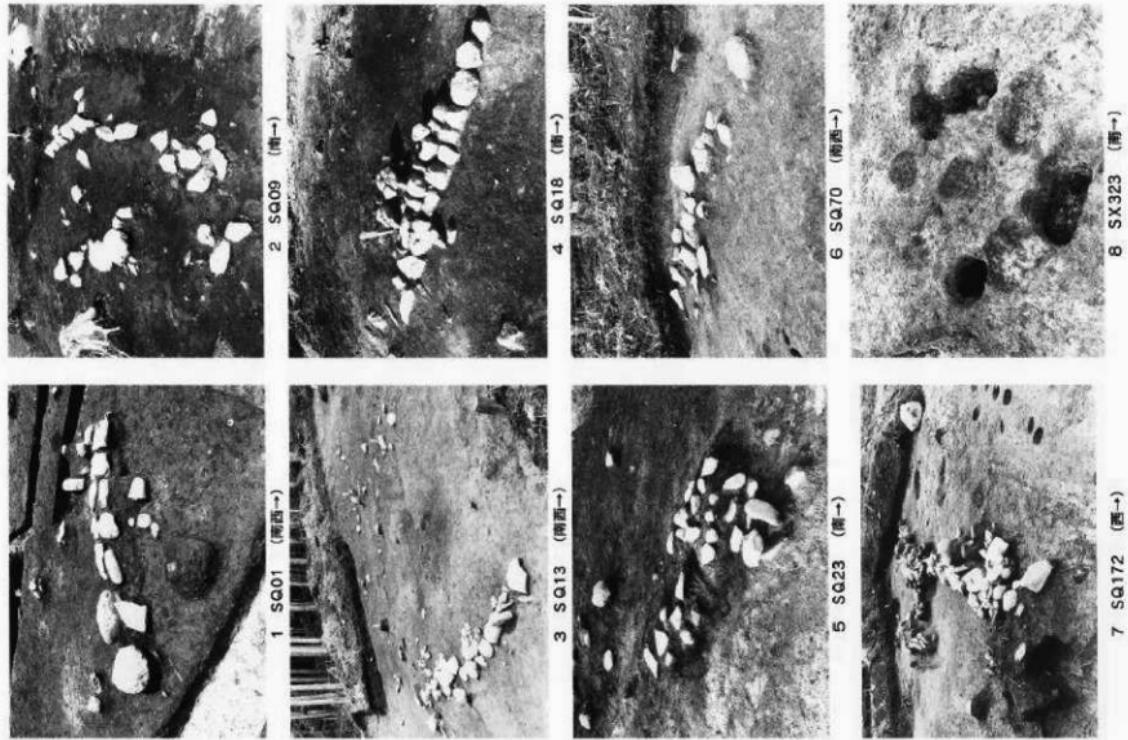
5 SKF307 (南→)



6 SR193, 194 (南西→)



7 SR262 (西→)



图版 8





90



95



118



125



129



131



150



163



234



246



260



269



277



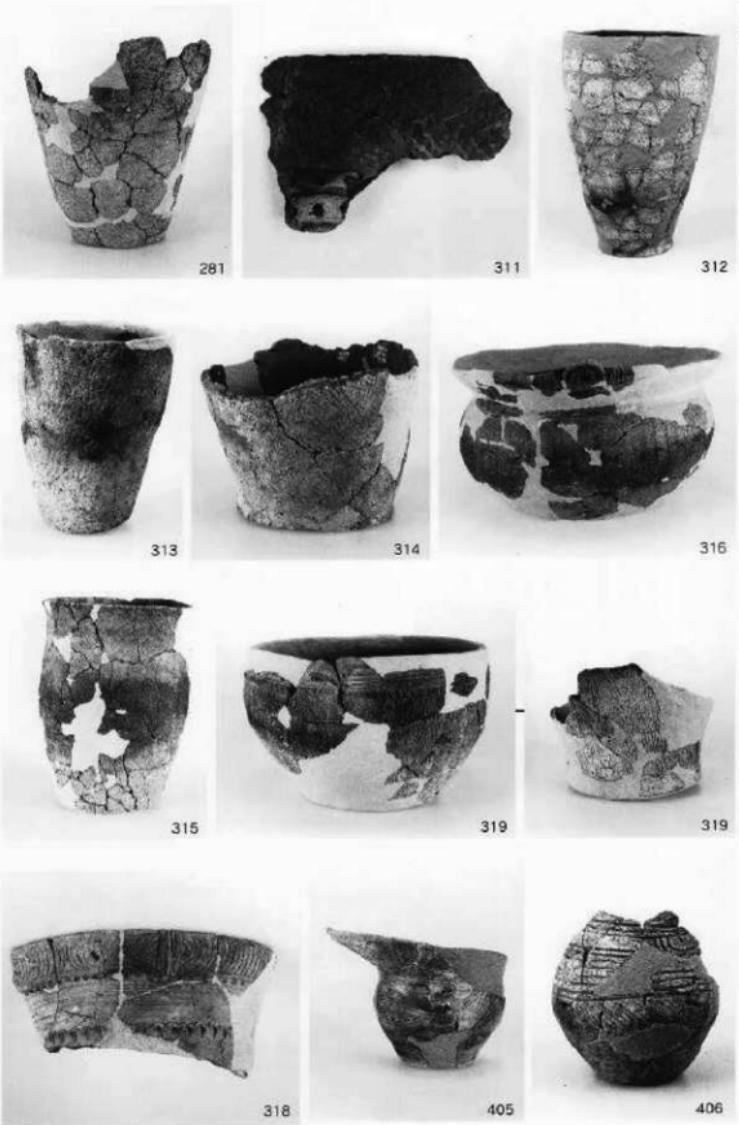
279

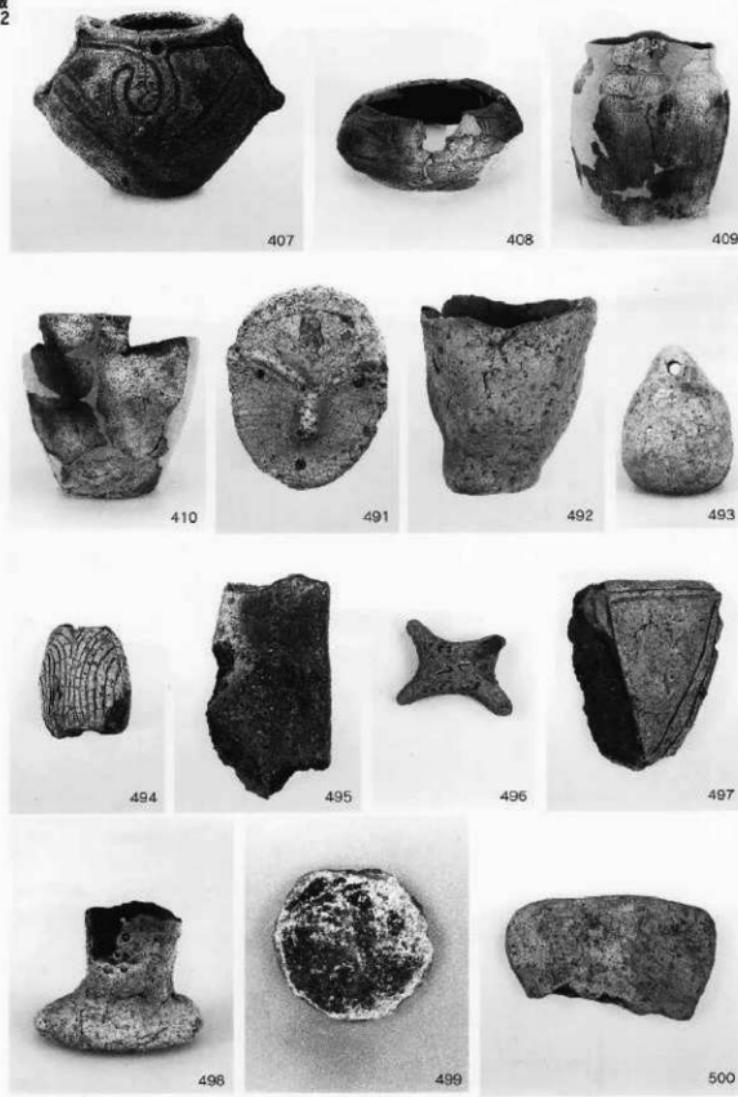


280



280





# 報告書抄録

ふりがな	紹観
書名	潟前遺跡（第2次）
副書名	県営田沢湖オートキャンプ場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	2
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第306集
編著者名	松木昌樹・伊藤 攻
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋 20 TEL 0187-69-3331
発行年月日	西暦2000年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北 緯 遺跡番号	東 緯 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	
潟 前	秋田県仙北郡 田沢湖町田沢 字潟前69外	05426	50-24	39° 44' 29"	140° 41' 18"	19980512 ~ 19981009	2,800 m <sup>2</sup>

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な 遺 構	主な 遺 物	特 記 事 項
潟 前	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 18軒	土器・石器	縄文時代前期・中期・
		前期	土坑 7基	石製品(块状耳飾等)	後期の土器、日本最大級のアスファルト塊が出土。
		縄文時代	上器埋設造構 3基		
		中期前葉	粘土貯蔵遺構 1基		縄文時代前期の大型
	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 24軒	土器・石器	竪穴住居跡を検出。
	祭祀場	後期前葉	焼土遺構 8基	土製品(土偶・錘形土製品等)	
			土坑 84基		
			フラスコ状・袋状土坑 1基	石製品(装身具・	
			上器埋設造構 4基	石刀等)	
			配石・集石造構 18基	天然アスファルト	
			性格不明造構 1基		

## あとがき

潟前遺跡の発掘調査ならびに整理作業は多くの困難をともないましたが、関係各位のご協力により、ここに調査結果をまとめた報告書を刊行する運びとなりました。

最後に、現場作業及び整理作業にご協力いただいた方々の名前を記して感謝申し上げます。  
(順不同・敬称略)

(調査参加者) 川瀬 正 草彌 実治 今野長一郎 酒出 司 坂本 熊 佐々木惣吉  
佐藤 勝治 平 正幸 田口 孝 田口 良平 田村 敦 羽川健之介  
半岡 敏篤 藤井千代松 堀川 省吾 堀川 久也 堀川 祐久 三浦嘉兵エ  
三浦善一郎 三浦 義捷 村田 繁夫 梶田 良雄 石川 悅 上野めぐみ  
大石 弥生 大川 新子 西藤 千秋 佐藤キス子 進藤 美雅 横葉 博美  
田村ひとみ 村上 優子 羽川 悅子 山本 博子  
(整理参加者) 富樫 厚子 藤谷 和子 千山 真澄 大西 英子 萩津ひろみ 後藤山美子  
山崎 景子 齊藤 美幸 齊藤美江子 小松 雅子 高橋 宏子 新田ひとみ  
川原 礼子 泉谷 昭子 藤田 悅子 小山長京子 小西 文子

### 秋田県文化財調査報告書第306集

#### 潟前遺跡(第2次)

—県営田沢湖オートキャンプ場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

印刷・発行 平成12年3月

編 集 秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802 仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地

電話(0187) 69-3331 FAX(0187) 69-3330

発 行 秋田県教育委員会

〒010-8580 秋田市山上3丁目1番1号

電話(018) 860-3193 FAX(018) 860-3886

印 刷 株式会社 佐藤印刷